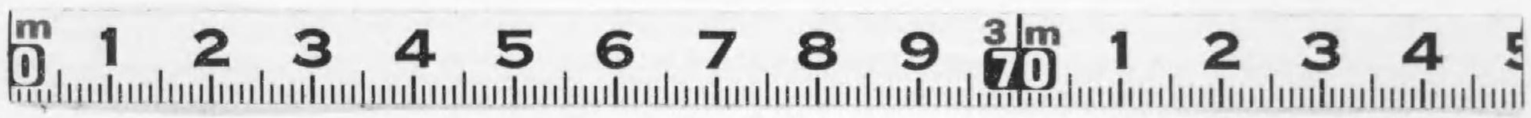

特114
603

特114
603

木村定良編纂

和歌草野集

秋冬之巻

東京　修文館蔵行

大正
2.7.4

秋部上

立秋　なつ衣うすきものともしらさりし袂おほゆる秋のたつかせ　長流

をきの葉のそよくにつけて忍さへうこきそめぬる秋の初風　契冲

この朝けたもとすゝしも秋きぬとかあらす風のふかぬものゆゑ　枝直

わかそてに露そおきける白妙のたもとのくたり秋たたつらむ　土滿

けさみれはのもせに露の玉しきて秋を待えぬかたしもそなき　千蔭

六月立秋　たなはたの秋まちえてもあふ事はなつの日數のなほのこりつゝ　枝直

驚立秋　一年の夢のなかはゝおとろきぬまたねゆるすなをきのうた風　長流

立秋雨　天河けふしもたれかせきくたすゆふたつ涙のあきのはつこゑ　契冲

立秋風　くれ竹のはけしきおとにおとろきぬ秋のいりたつまとの朝かせ　たみ子

立田山よはにや秋のこえぬらんけさは身にしむ木ゝのした風　自寛

西の海のなみよりをちに立そめて風をたよりに秋もきにけり　契冲

立秋露　ふかきよのね覺のまくら露そおく夢のたゝちに秋やきぬらん　蘆庵

朝露のたもとにかゝるけふよりそあふきは袖の外にれきける　長流

立秋朝　朝まだき庭のあさちにおく露のめにさへみえて秋はきにけり　たみ子

立秋夕　けさはまた物れもふ秋のはしめともしられぬほどの風の涼しさ　土滿

立秋雲　はしゐする袖のにはかにすゝしきは此夕風に秋やたつらむ　蘆庵

立秋荻　けふよりのうき秋しるやうき雲もよるへさためす立まかふらむ　千蔭

立秋衣　みそきより人乞かへりてしつまるを荻そ聲する秋やたつらん　契沖

里立秋　ならしつる扇を箱におきかへて衣とりいたす秋のはつ風　長流

野立秋　風のおとときのふを夏と吹かへて衣手すゝし秋しのゝ里　契沖

關路立秋　きのふなてよそにきゝつと秋つのにけふ夏くさをふかす初風　仝

社頭立秋　うきとをなこその關のあなたにも秋立日より秋風そふ　仝

山家立秋　みたらしの岩うつ涙もおとかへつたゝすのもりのあきのはつ風　春海

田家立秋　松の嵐谷のかけひも今朝よりは秋たちぬとやおとかはりゆく　仝

水鳥立秋　けさみれは色つきそむる我門のわさたよりこそ秋はおはゆれ　仝

立秋述懷　うきくさのすゐよりたてる秋風にひと葉おとろくかは柳哉　契沖

早涼　一葉よりさきに我身をさそひなはよに秋風の立もしらしを　たみ子

信樂の外山のあさけすゝしきはよのまの雨や秋をさそへる　春海

早涼知秋　秋きぬとかへぬたもとも初風にけさよりうすきせみの羽衣　宣長

風告秋　それとしもめにみえぬ秋を秋つはの袖にまつしる此あさけかな　千蔭

曉知早涼　夕かけに露吹むすふをさゝ原よは秋なれや風のすゝしき　春海

曉風告秋　白露はいつくの草におきそむる風はをきより秋をつくなり　契沖

海邊秋來　いとはやも秋はたちぬと世につけてけさしも袖にかよふ初風　春道

秋來水邊　よひのまの暑さはいつら涼しさにめさめし秋のわかつきのとこ　蘆庵

閑居秋來　あやにくに身にしむかいのね覺をや尋てつくる秋のはつ風　仝

閑庭秋來　あしの葉もけさ濱荻の聲たてつ難波のみつのあきの初風　長流

幽栖秋來　おきつ風浪路にたちて住吉のきしにむかへる秋はきにけり　契沖

吹かせもこゑうちそへてにし河や秋に入江の涙のすゝしさ　春海

此ゆふへあきゝにけらし庭もせに露の玉しくよもきふのやと　蘆庵

この朝け露こそはれしつけさはとこに秋なるすゝのしのやに　千蔭

しつけさのおのつからなる宿とてや秋乞早くもとめてきぬらむ　仝

跡たえし庭のをさゝの露はかり秋をつけ來て初かせそ吹　春海

清水くむたよりはかりの道とめて淺茅かおくも秋のきぬらん　枝直

閉じてし門のむくらも吹わけて秋は入たつけさの朝かせ　春満

霧わたる苔路しめりてひやゝかにくる秋しるき庭の木かくれ　蘆庵

荒屋秋來

おきそむる露をよすかに秋はけさむくらの門を先そとひける　春海

野ちとなるやとをや秋のとめてこし所せきまておける露かな　千蔭

野亭秋來

秋なれや葎にとちしはしとみをけさうちたゝく風そわやしき　全

萩さかん野へをとなりに住なれていつかとまちし秋はきにけり　枝直

山家秋來　西風飛一葉

わかいほのまかきの萩をみかり人きぬにするへき秋はきにけり　千蔭

今朝はしも竹の林そそよくなる世は秋風のたちやしぬらん　眞淵

秋淺向泉

あへすちる桐の一葉のとわりも身にしるれひの秋のはつかせ　蘆庵

初秋

むかふより殘るあつさもわするゝは泉にのみやわきはきぬらむ　全

ゆふされはをきよりさきに我そまつ聲たてつへき秋のはつかせ　契沖

たれとてか身にしまさらん野も山も色かはるへき秋の初風　蘆庵

初秋天

あきもなはきのふのまゝの秋つはのそてにおほゆる今朝の初風　千蔭

みなせ河有て行水おとかへてさゝなみよする秋のはつかせ　枝直

かきりあれは同し暑さにくるゝよも月はさすかにはつ秋の空　宣長

初秋朝

しら露の玉しきみてゝくる秋をあしたのはらにたれかまちえし　千蔭

初秋夕

きり〳〵す鳴夕かけの山風によわりそめぬるひくらしこゑ　蘆庵

ゆふまくれはのみるからに悲しきは西こそ秋のはつ月の影　長流

初秋夜

秋の來てすゝしきかせも三日月のまたはつかなるよひ〳〵の空　宣長

初秋露

おきそむるみきりの露に心せよ伴のみやつこはるならすとも　千蔭

初秋朝露

くる秋のためとてやとはあらさねと所えかほのけさの露かな　同

初秋雲

吹かはるおとはかりかは風にくる雲のけしきも秋はみえけり　春満

初秋霧

厂金ゐいつきかなかんわか門のわさたのほのへきりわひにけり　春郷

初秋月

弓張のかけをしみれは月にのみ心ひかれむあきはきにけり　千蔭

きのふけふ風のおとにはきく秋をめにみか月のゆふくれの空　宣長

したそめのまた色うすき秋の葉をてらすは月のひかり也けり　枝直

初秋風

露はまたおきあへぬ枝も散そめし一葉にしるきよものあきかせ　春満

秋といへはしけくもおつる涙かな桐はひと葉のけふのはつかせ　宣長

今朝はゐや軒のしたをきうちさやき穂にあらはれて秋風そふく　春海

初秋松風

すゝしさの外にはいかにまさるらん秋くるかたのいきの松かせ　長流

初秋虫　ひくらしのこゑそかすかにきこゆなるひと葉色つく秋の梢に　契冲
初秋待鴈　秋ときく風のつかひはけふたちぬ今いくかあらは初鴈の聲　長流
初秋涙　庭のれもの萩をあき風ふく日よりなみたをかねて露そこぼるゝ　契冲
初秋衣　春かすみ夏のころものころもへす又たちかふるあきのはつかせ　長流
初秋扇　霜雪にみえしあふきも今朝よりそおきまとはせる秋のしら露　仝
初秋木　ちりそむる桐のひと葉に秋來ぬとつくるや風のこゝろなるらん　春海
初秋筏　杣山の秋をいかたにつみくらんくたす河せの風そすゝしき　千蔭
山初秋　あはゝ山たゝにむかへるさやの山木の葉さやかる秋たつらしも　土満
岡初秋　みつくきのをかの松風このねぬるひとよにさひし秋のはつこゑ　契冲
杜初秋　けふよりや草葉も秋とふいそむるかほあらきのゝもりの下かせ　仝
初秋落葉　ひと葉ちる秋や來ぬらん春風のあと河柳又うこくなり　長流
名所初秋　難波かたまくすにあらぬあしの葉もうらみそめたる秋の初風　契冲
都初秋　みやこちや柳櫻にあらぬ木もにしきをいそく秋は來にけり　枝直
浦初秋　秋來ぬとめにはみぬめの浦風もけさよりかはるなみのおと哉　宣長
湖初秋　あきゝぬと海ふくひらの山風もうらめつらしきあまの衣手　仝

山里初秋　山さとのあはれいかにとゝふ人にみせはやけさのあさちふの露　千蔭
田家初秋　小山田乙稲葉吹わけ入たつとめにこそみゆれ秋のはつかせ　春海
田初秋　にほ鳥のかつしかわせ田露ちりてほのへにあきのはつ風そふく　春郷
新秋風　きのふかもとりしさなへのつかのまにふしみの田面あき風そ吹　契冲
　　あき來ぬとれもひもあへす吹風のなとうちつけに悲しかるらん　蒿蹊
新秋露　をさゝ原けさはきそはる白露にあらそひ立る秋のはつかせ　千蔭
　　朝戸出のちふのしら露いちしろく秋の色こそみえわたりけれ　仝
　　とこなつの花にも玉とみし露や秋まちつけておきそはるらん　枝直
新秋曉露　夏たにもひるまはまれのあさちふに秋きぬよるのしのゝめの露　宣長
新秋雨涼　桐の葉のかつちりかゝるおはしまに村雨そゝく夕へすゝしかも　千蔭
早秋　うきものとれもひもいれて秋風をうらめつらしみすくす頃哉　直淵
　　ほにいてぬひとむらすゝきいとはやも秋の心になひく夕かせ　枝直
　　秋たてはものかなしきをうきとはみそきにすつとなに思ひけん　春海
　　みにしみて秋は來にけりうたゝねにまたれしまゝの袖のあさ風　宣長
早秋風　けさよりはみつほの秋のはしめとや稲葉よりまつ風そよくらん　春海

早秋露　聞なれしれとふきかへて軒近き松こそ風のあきはつけゝれ　春満
早秋雲　秋といへとまたひもとかぬ萩かえに露こそはやく結ひそめけれ　千蔭
早秋夕　よひのまはすゝしきをきの上風もしのゝめさむき嶺のよこ雲　契冲
　　夕月のひかりほのめくにし山や秋のこえこしかたにはあるらん　千蔭
早秋荻　荻原やまたほに出ぬほとあからゆふへは秋とはつかせそふく　春海
早秋朝山　あきゝぬと思ひもわかぬ賤かやはのきはの荻そひとりれとろく　契冲
名所早秋　をきの葉に聲きゝそめし朝よりをのへの松も秋風そふく　枝直
原早秋　あはた山ふもとのあはふ色つきて薄霧なひき秋かせそ吹　蘆庵
里早秋　秋たつやまたうらわかき荻原は風のれとのみはにいてにけり　春海
河邊早秋　しらぬひの心つくしのあきくれはこのまにみゆるみかつきの里　契冲
田家早秋　河風にうはもなひきて鴛のねるねくひの柳散そめつはや　長流
山家早秋　きのふけふほに出初て鳴むしも門田のしめの外にやはきく　枝直
濱早秋　秋の來てまたふかゝらぬとやまにも軒端の松乙聲かはりけり　千蔭
浦早秋　なにはかたあしとをきとのならひ濱かたへをわかぬ秋の初かせ　契冲
　　濱松にしは風こしてなにはかたうらさひしけに秋はきにけり　仝

江早秋　ふしみ山松にさわきておほくらの入江にひゝく秋のはつかせ　仝
七夕　七夕のあまついもせのとをたにこちたくたれかいひつたへけん　眞淵
　　天河わたりわたらすよもすからねはつかなくそなかめられける　筑波子
　　秋といへとうつるならひのとのはにかけぬはほしの契りこけり　土満
　　天河涙なたちそとたなはたのいとひて待空しはしるしも　枝直
兼待七夕　棚機のこゝろもそらにくみてみんたちひの水にかけしうつらは　春海
　　天河月のみふねもよそひせよほしのあふよはちかつきにけり　仝
久待七夕　いはは床のちりをはらはぬよはもなし天の河とに秋たちしより　仝
待七夕　いつしかとさくヒくさの花かすをよみてや星の逢夜しのはん　仝
七日待夕　いつしかと思ひし秋はまちつけつ今いくかあらは星合の空　蘆庵
七夕迎夜　入日さすとよはた雲に棚機の心のうらやあふをまつらむ　契冲
　　ひこ星のとしにこかるゝともし妻こよひむかふる船いそくらし　たみ子
　　このゆふへ秋風すゝし天の川いまかひこほしふねこきつらし　土満
七日夜　たなはたのあふよとなれは世の中の人の心もなまめきにけり　眞淵
　　今宵まてこよひを待てこよひあけは又のこよひを待んとすらん　仝

ちきりけん時は來にけりひさかたの天のかはらに船出すらしも　春郷

かきりなき天つみそらの棚機の中さへ名にはたちにける哉　筑波子

七夕惜夜

暁のそらかきくもれ天河あさせたとらは君かへらめや　春海

牛女年々渡

天人のま袖もりてや世間のあかつき露はれきそめぬらん　千蔭

八百よろつよゝにたえめや秋とのの星のわふせのあまの河水　仝

乞巧奠

あふとは天の河瀬の水引のいとうちたへて長くたえせし　長流

たなはたの秋くるからによりあはん心とりてそ糸はたむくる　春海

夜深憶牛女

天河こよひかさぬるいはもたのきぬにもかをれ庭のそらたき　千蔭

天人のなけきをそれもふ手向つる庭のともし火かけふくるにも　仝

月入てよのふけゆけは七夕のこゝろのやみもさそなとそれもふ　蘆庵

暁思牛女

こんとしの秋をはるけく契つゝわかれん袖をおもひこそやれ　千蔭

二星適逢

機ものゝふみ木のはしを一とせに一よとはなとかけてちきりし　仝

うらもなくあふとたすれとたなはたの雲の衣よなとまとはなる　春海

織女契久

ちかゝらはゆきてもみまし棚機のまれのわたりの船のよそひを　たみ子

天なるや安の川水あせはこそあふてふ星のちきりたえせめ　千蔭

二星契久

天地とゝもにつきめやふた星のかけてちかひしやすのかは涙　枝直

七夕契久

あまの川水のなかれて絶ましや神代なからの中のちきりは　契冲

星河秋久

天河とはき神代のむかしより秋をせにこそ名はなかれけれ　春海

二星期秋

こよひより夜長かるらん神の代に秋とちきりし天人のため　千蔭

ひこほしはよの長月も有ものをなとはつ秋とちきりそめけむ　宣長

烏鵲成橋

かさゝきのつはさかさねてやすの河やすらに渡せ其ともしつま　千蔭

星河落簷

天河かいのしつくもたかとのゝのきはにちるとみゆるよはかな　仝

七夕喜晴

あまのかは軒にかたふく空みれは星のわかれもちかくなるらん　宣長

七夕月

たなはたの心もはるゝよはなれや天つみそらに雲たにもねぬ　千蔭

たなはたのこゝろをくみて天の河月もこよひやはれわたるらん　仝

月前二星

こよひこそ心のやみもはれぬらめはしのゆふへの月きよき空　蘆庵

銀河月如船

夕月のひかりはあれとあふ星のかけはさすかにけされさりけり　千蔭

七夕雲

天河つまゝちわふるこよひとてはやくもうかふ月のふねかな　仝

こよひしもたなひく空のうき雲は風のかけたる天のかたゝし　枝直

たなはたのひれふるよひは中空に立まふ雲もなかれられけり　千蔭

織女雲爲衣

雨となる袖のわかれにたなはたの雲のころもゝうしとやはみぬ　春海

七夕風

はつ萩の花すりかさん棚はたの雲の衣ゝやへかさぬとも　千蔭

たなはたに花のかつらをかすとてや天の河風なみを吹らん　契冲

七夕露

ひこほしのこぬ夜つもりし床夏にけふちりはらふ天の河風　長流

七夕霧

あまのかはみつゝしをれは白妙の我ころもてに露そおきにける　眞淵

織女霧爲張

天川へたつる中にいとゝしくなけきのきりそやへにたちける　契冲

七夕雨

天のかは霧のとはりのうすものもこよひ一よやへたてなからん　千蔭

天川水まさりきてこよひたにへたつるせきのやまぬわめ哉　長流

夕月夜空もあやなく降雨にこきなまとひそ天のかはをさ　眞淵

七夕烟

我せこか濡つゝ今や來ますらんあまはせつかひみかさとまをせ　春郷

霧中七夕

月かけのにはふもすゝし星合の空たきものゝうすきけふりに　蘆庵

旅宿七夕

やつるともこよひかさまし秋萩の初花すりのたひのさころも　千蔭

野外七夕

たひまくら星のちきりはめくりあふ今宵もよそのふるさとの空　宣長

海邊七夕

のへ見れは紐ときにけりふみ月のなゝのゆふへのなゝくさの花　千蔭

ひこほしとたなはたつめの二見潟まれのみるめもよるのうら浪　長流

山家七夕

たなはたのかさしやちらふ夕涙にしら玉よするはしあひの濱　千蔭

はしあひの濱のあまひとうちつけにみるめやこよひ先手向らん　春海

家〻七夕

あやにしきあかぬとなきたなはたに麻きぬかさんきその山住　千蔭

七夕催興

身におへる星の手向と山かつもうつらころもやかけてかすらん　枝直

星夕言志

代牛女言志

これも又星どやよそにみねのいはこよひたむくる庭の燈火　宣長

おふな〳〵今宵やはしに手向らしあやもにしきも麻のころもゝ　千蔭

天河とわたる舟の梶の葉にかきもつくさぬ千〻のことの葉　仝

たなはたの心をけふはこゝろにてゆふくれいそくとのはのとも　宣長

神代よりあふよの數をかそへなはまれなる中もなにかゝこたん　千蔭

星夕燈火

天地とたえぬちきりをおもふにはとしにひとよの恨たになし　仝

星夕燈花

かけて又はたのふみ木のふみ月をまちやわふらむあまの河むし　宣長

星夕曝書

ともし火のかけふけにけりあすも又たむけん星の契ならぬに　蘆庵

七夕管絃

棚機にたむくる庭のともし火の花もこよひはたゝならぬかな　千蔭

はつ秋のなゝのゆふへになら人の七代の齡のふみやさらさむ　仝

み空ゆく雲もたゝよふしらへにはわかるゝ星もたちとまるへし　仝

七夕野　糸竹のつま思ふてふしらへさへはしのあふよはわはれそへけり　春海
七夕山　秋はきの花すりころもかすか野の野寺もこよひはしまつるらし　枝直
七夕濱　七夕のつもるおもひをかさねあけはふしも篷のちりひちの山　蘆庵
　　あまのこかかりしみるめの濱つともこよひや星に先たむくらん　春海
七夕川　此ゆふへあまの河原にかよはなんまつらんいもを早見はま風　千蔭
七夕波　筏さすみちこそしらねけふといへはこゝろもかよふ天のかは涙　蒿蹊
七夕瀬　あふとは秋のひとよをまつ山にこゆる世しらぬあまの川波　長流
七夕水　秋の日もけふはなゝせのあまの川我はよとます年にまつ夜を　仝
　　空の色のはなたの帶とみえなから中やはたゆる天の河水　仝
七夕田　神代より星のへたてとわりかよひなかれてひさし天の川水　枝直
七夕舟　天河きしを田にほりかさゝきの行相のわせそうゑぬとしなき　長流
七夕橋　立出て天のかはらのゆふなみに君か御舟のよるをこそまて　宣長
　　今宵あけは紅葉の橋もいたつらにかけそなれてや戀わたらまし　春海
七夕植物　雲島のあやにこひしみはたものゝふみ木を橋にわたしそめけん　千蔭
　　けたれしと庭の梶の葉とり〳〵に光をみかく露の玉つさ　宣長

七夕草　あけは又袖におくへきしら露を草の葉にみるはしあひの空　枝直
　　天河空にはのめく月くさの花にならはぬ中そひさしき　仝
七夕薄　七くさのかすならぬくさもけふにはふ盛を星は手向とそみよ　蒿蹊
　　たなはたのひれふるよひの初風になひきそめたるのへのを薄　千蔭
七夕瓜　こひ〳〵てあふよの星にならへはやを花か袖も露けかるらん　春海
七夕鳥　空にしれ星の手向のこまのうりなりも出ねと子をおもふとは　枝直
七夕鶴　天の戸もあけはわかれん星のあふとこよの鳥とこゝろしてなけ　春滿
七夕雁　此夕へねをなくつるはれのかへんちよをひとよの星にかすとか　蘆庵
七夕獸　たなはたはかりをかとにいひなしてこん春まては君なかへしそ　仝
七夕馬　こよひたに妹かりいそけひこ星のひくや手かひの牛のあゆみも　枝直
　　天河淺瀨ふむらんひこはしに月毛の駒をこよひかさまし　千蔭
七夕虫　こよいしもくもゐにかけるこまもかな舟まちかぬる天の河とに　春海
　　としとにまつそひさしき棚機のあふはこてふの夢のひとよを　蘆庵
七夕蛛　七夕のあふよのてまにかはるとてはたをる虫はあるよなりけり　仝
　　いかならん身のねさとそこよひしもをさゝにかくる蛛の糸すち　千蔭

七夕糸　うちみたれむすほゝれたる棚機の心のいとやこよひとくらん　蘆庵
七夕の手向のいとのくるゝまをいかにひさしとけふやかほゆる　春満
はし合の空に手向のいとせめてひきもとゝめよあすのわかれを　宣長
七夕錦　五百機のにしきのころもこよひしも袂ゆたかに立かさぬらん　千蔭
人もみぬよるのにしきや棚機のもみちをわたすあまのかはゝし　長流
七夕衣　かさねても夢とやおもふたなはたのかへしなれたる天の羽衣　蘆庵
かさしたゝわかひとりねのたひ衣つゆけき袖はほしやわふらん　春満
七夕髪　天川妻むかへ舟うかふてふけふやうれしく花かつらする　契沖
七夕袖　彦星のとひたちぬへきうれしさもこよひやつゝむ羽衣の袖　仝
人なみに今宵かさましうれしさをつゝむはかりの袖ならすとも　千蔭
七夕枕　たなはたの枕のちりをはらふよや世の秋風のはしめなるらん　仝
七夕扇　かさはやなまた秋あつき彦星のこよひあふきも捨もおかしを　春満
たなはたの手ならすよひのあふきより吹やそむらん秋のはつ風　蘆庵
七夕琴　天川つまゝつかせやかよふらんこよひたむくるとのしたひに　千蔭
七夕櫛　いかはかり神さひにけんたなはたの待こしほとの玉のをくしは　仝

七夕のけふのくしけのつま櫛のくしきよかたりたれかつたへし　仝
七夕戀　七夕のこよひとり見んさしくしのさしもたかはし絶ぬちきりは　春海
逢とのまれなるなかよいとせめて天津いもせにだくはましかは　仝
七夕涙　としにまつうきせはあれと天川たえぬちきりそうらやまれける　宣長
天川水なき空にたつ涙はけふまちこひしなみたなりけり　長流
七夕曉　七夕のおもひきゆらんほとみえてかけしらみゆく庭のともし火　千蔭
天川ふけゆくよはをみつゝゐてあかつき露にそてぬらしけり　春海
七夕別　わかれてはこともかよはぬ天川ふみ月の名そ空たのめなる　仝
たなはたの別れをゝしみふるひれやあくるみ空の雲とみゆらん　春郷
きぬ〳〵の天の羽そてのしつくより紅葉のはしや色にいつらむ　枝直
七夕後朝　かさゝきのよりはのはしも別路のそらさそひゆく朝からすかな　長流
あけぬれはきのふのくれを棚機のねかひの糸もとしやかくらん　仝
たなはたのおもひみたるゝ玉かつらけさしも庭の露とおくらん　千蔭
けさは又天の羽衣たちかへりうらみやすらんうすきちきりを　蘆庵
天の川きのふの逢せなか〳〵にけさやたもひのふちとなるらん　春満

七月八日
閏月七夕

棚機のけさのわかれやいかならんあまのかは涙そてにかけつゝ　自寛
たなはたの別れよなとかとしにまつ心なかさにならはさるらん　春海
いたつらにそてぬらせとや棚機のあふよの名のみ立かさぬらむ　仝
いたつらに逢よの名のみかさなりてかさねぬ袖や猶しほるらん　千蔭
天川名のみふたつのそふもうしさらてもとほきとしのわたりに　契冲
たなはたもいはほそためし天津袖いくよかけてもつきぬ契りは　春潮

七夕祝

七夕のひもとくよひやさゝらかたにしきにゝたる萩もさくらん　千蔭
棚機にこよひやかさん秋はきの花すゝ衣いろわせぬまに　春海
たなはたのかさしにをさせむらさきの色なつかしき秋萩の花　蘆庵

萩七草七首

尾花

天川かはへに立てまねくらんひれかとみゆるはつをはなかな　千蔭
あまのかは河へのを花かたよりになひくもほしの心をやとる　春海

葛

いつしかとおもひし秋のはつを花ほにいてゝほしの枕にやかる　蘆庵
彦星のあかぬわかれにまつはりて引もとゝめよ庭のくすはな　千蔭
たなはたの袂れほえて秋風のふきうらかへす庭のくす原　春海
こよひとや花のひもとくくすかつらくる秋との契かはらて　蘆庵

撫子

たなはたのいはつゝとひの白玉のちりかみたるゝなてしこの露　千蔭
七夕の袖のにしきもかくこそとみるめあもやにはふなてしこ　春海
塵つもるたなはたつめの床夏そうちはらふにも袖や露けき　蘆庵

藤袴

天河あかてわかれしうつりかをしはしとゝむるふちはかまかな　千蔭
こよひしもたなはたのてにあえよとて誰たちぬへる藤袴そも　春海

女郎花

秋とにきてもとまらぬたなはたのかたみに匂ふふちはかまかも　蘆庵
棚機のこゝろをくみて此朝け露おもけなるをみなへし哉　千蔭
たなはたのれもかけみせて澤水にすかたをうつす女郎花哉　春海

朝顔

ひさかたの天のかはらの女郎花し人のさかのゝうきはしらしな　蘆庵
たなはたのおもなさみえて霧深きまかきにはふ朝かほの花　千蔭
はしあひのなこりをそれとしのへとや露にしはれし朝かほの花　春海

梶七木七首

棚機の秋まちえても露のまのちきりをいはゝあさかほの花　蘆庵
おもふと梶のなゝはにかきつけて二のほしにけふはたむけん　仝

桐

めつらしな軒はのきりの散そめてかつあらはるゝほしあひの空　仝

桃

さゝかにの糸もたのもし思ふとなるてふもゝをほしにたむけて　仝

梨　棚機にいさねきかけて今よりはうきとなしのみともなりなむ　仝
合歓　こひ〳〵てあふ嬉しさにねふの木のねふたしとしも星は思はし　仝
秋　いく秋そ天の河原のはま楸ひさしきよゝりくちぬちきりは　仝
楓　わかれゆくはしの涙にそめぬへしまた色つかぬおきのかへても　仝
山地儀七首　世ゝかけてたえぬちきりはたなはたのいとかの山のはつ秋の空　蘆庵
岡　我庵にちかきよしたのかくら岡のほりてそみるほし合の空　仝
野　ねきかくるふたつの星もひとすちのふるのゝ道の末てらさなん　仝
里　あふとのときはのさとの名をきかはともにすまゝくはしや思む　仝
河　こよひ逢はしのひかりもにし河にかたふくまてもふけぬなる哉　仝
橋　こよひのみわたしやすちん棚機のたえぬなみたの見なそこの橋　仝
濱　けふとにふたつのはしのならひ濱ならへんかけもいく秋のそら　仝
硯文房百七首　ちりもねぬ硯のうみに今宵あふはしのみかけをうつしてそ見ん　千蔭
筆　棚機のみふてのはやし秋立て妻こふ鹿そよきたくひなる　仝
硯かめ　かちの葉にかきて手向ん硯かめ天の河原の水をえてしか　仝
墨　たなはたの思ひこかれて一とせをまつの烟のすみやかさまし　仝

紙　すみそめの夕へをいそく星なれはかみや紙にやかきてたむけん　仝
文机　もゝとりのかすにもうけよこよひしも星にたむけの庭の文机　仝
書　棚機のめくりあふよそ文車のふみのかす〳〵いさたむけまし　仝
殘暑　秋來てもてる日のあつさかはらねはまたかろからぬせみの羽衣　契冲
　宮城野や秋なほあつき木のもとの露なき草に風をまつ哉　眞淵
　きのふけふあつさにかへすまくす原はつ秋風のすゝしかりしを　枝直
　木本にこゑゝおち來て秋もなほまつかせうとき蟬のは衣　宣長
　夏よりもなはたへまうきあつさ哉すゝしかるへき秋そと思へは　蘆庵
盂蘭盆　いにしへの飛鳥の寺のすみの山よゝのみのりのためしありけり　千蔭
相撲　めしあはすすまひの庭をふみさくみわれはかほにてたつ人や誰　美樹
荻　かた庭をふみはらゝかし立むかふ人こそけふのぬきてなるらめ　仝
　手枕になみたも夢もゝろき哉ねやのしたをき風そよくよは　春滿
　百草のねほかる中にわきてなとうたて吹らむをきのうはかせ　眞淵
　秋かせもうはの空をや過なまし窓のしたをきうつしうゑすは　枝直
　風のおとにくたけてものをおもへとや露ふきむすふ庭の荻原　春海

はる夏はいかにしのひて荻の葉の秋風ふけはまつそよくらむ　土満

荻風

かせのおとをもうしとはきかすしつけさを心にしめしやとの荻原　千蔭

ちきりなく人しもならへ秋といへとぬるよもおちぬ荻のうは風　春海

をきはらやひともとならはよきよともいはるしものを秋の夕風　宣長

荻風寒

ゆふくれも荻の葉ふかぬ秋ならはいとかく風の身にはしまめや　仝

荻告秋

うき秋はさらてもあるを荻のはのいかにせよとか驚かすらん　千蔭

荻知秋

ことくさも吹はすらめと荻そまつしらせそめつる秋のはつ風　蘆庵

初秋荻

袖の上にけさめ〳〵らしき秋風のなとをきの葉にならしかはなる　春海

驚荻

うめかゝにとるおとろきし夢のまにたなし軒はのをきの上風　契冲

萩音高

ふくるよの庭の秋風おと高し月はかたふくのきのしたをき　宣長

關荻

もふくれに庭の荻ふくおとときけはなへて草木のかせと秋かは　仝

栽荻

風のおとを聞む便にうゑし荻おもひのほかに人まねきけり　千蔭

月前荻

をきの葉の風のたえまにおく露の玉のをとかりやとる月影　枝直

風より身にしむ色は月かけのほのめき初るのきのした荻　蘆庵

かつやとりかつこはれつゝ荻原やしつ心なきつゆの月かけ　千蔭

風前荻

おはかたのよの秋風をおのれのみとゑにしめたる庭の荻原　仝

おときけはおのか上葉の露よりも袖にみたるゝ風のをき原　宣長

秋風吹荻

秋風のやとるためとはうゑなくに待とりかほの庭の荻はら　たみ子

秋風吹荻葉

あはれともうしとも人の心よりをきふく風の身にやしむらむ　春海

夕荻

やとりとてゆふへになれは秋風のいとゝふきくる庭のをき原　宣長

夕荻風

夕露をおのかうへにはほしなからをきふく風そそてぬらしける　契冲

夜荻

よもすから軒はのをきの風のおとにおもひくたくるそての露哉　千蔭

よひ〳〵になれていをねぬ妻なれや秋風やとるのきのした荻　春海

深夜荻

さよふけてきけは夕へのさひしさはなほかすならぬ荻のうゑ風　宣長

荻驚夢

おいぬれは秋のはつ夜のはつかなる荻のおとにも夢そさめぬる　蘆庵

荻聲驚夢

夢にのみむかしにかへるよな〳〵のあはれしらすや荻のうは風　千蔭

荻聲近枕

荻のはにやとらはやとれ秋のかせおとなき風そおいのまくらに　枝直

庭荻

聞なれてうき秋かせのおとなからふかぬもさひし庭のをき原　宣長

閑庭荻

やとからか荻ふく庭のゆふ風はいつくの秋もかくやさひしき　仝

山家荻

山さとはいこそねられね松のこゑをやむとすれはをきのうは風　春海

おひしけるやました萩をのきはにてねられむものかよはの秋風　宣長

幽栖萩風

なか〳〵におとなふものゝさひしきはふせやの軒のをきの上風　千蔭

簷萩

をきの葉もおなしのきはの草なからしのふとはなき聲たてつ也　長流

江萩

夕月のいりえの水のくらきよもそよくにしるきかせのしたをき　春満

葛

いそのかみふるのゝまくす風吹と世は昔しにもかへらさりけり　契冲

岡葛

武藏野のつゝきのをかのまくす原秋ふく風のをてはみえけり　千蔭

葛風

われわたるまかきのまくす風吹をうちふれてのみ音のきこゆる　古道

月下葛

葉かくれにはふまくすの花もみんうらふきかへせ月のした風　春海

萩

色かはる下葉はいはしもろしとは風のまはきのをなの上のつゆ　春満

をしかふすのへのわき風吹そめてはころひにけり萩かはな妻　眞淵

おほしたてし庭のはき原咲にけり鹿のねさそふやま風もかな　千蔭

宮人のそてのなこりやとゝむらむいまもにはへりまのゝ萩をら　春海

萩漸盛

秋はきにたもとすらんとわけもけは下葉の露にものすそぬれぬ　土滿

鹿もやゝ戀のさかりとなりぬらし野へのこはきの色まさりゆく　眞淵

たなはたの五百機たつるころしもや萩の錦もおりはしむらん　千蔭

萩盛

風たつな雨もなふりそやま姫の萩のにしきをさらすけふなり　蘆庵

なにとなくしかのねさへておもはゆるまかきの萩の花の盛りは　筑波子

萩盛開

はきはらや花のさかりに風ふけはこきむらさきの浪そたちける　千蔭

萩露

吹わたすをきよりはきにみたれつゝ風もいろなる宮城のゝ露　宣長

萩上露

秋されとそのゝこはきの花の上にこゝろも露もおかぬまそなき　千蔭

萩露深

秋されはわしたもふへのしら露も萩かえにのみおくかとそみる　仝

萩露重

朝ことの露のよすかとうゑし萩をるともよしやはらはてを見ん　仝

萩花露重

わけまよふそてやまつらん眞萩原とをゝにおける露のおもさに　枝直

萩露滋

ふるさとのよもきかもとのこ萩原はらはぬ露をあはれとそみる　春海

萩露如玉

しら露はやなきにのみと見し玉を萩かえたにもぬきとめにけり　たみ子

月前萩

露わくるのちのさをしか心せよ月をやとせるはきか花つま　千蔭

月見にとふ人あれやゆふ庭につゆもみたれて萩か花ちる　春海

風前萩

風ふけとこ萩かこつゆのしら玉にやとれる月のかけもちりけり　たみ子

さをしかの朝ふす野への秋かせにを花なみこす萩かしからみ　長流

雨中萩

雨ふれはこぬ人またぬ萩たにも月夜よりけにわひつゝそぬる　契冲

朝萩　よしさらはころもにはせ眞萩原わけゆくそては雨にぬるとも　春海
夕萩　朝またきしらみてみゆる秋はきはつゆもやふかき花やうつろふ　蘆庵
夜萩　ゆふかせのふかぬすゑ葉もなひくなりおもるか露の秋はきの花　宣長
對萩　山鳥のしたり尾花の長きよをひとりやはきのねてあかすらん　契沖
思萩　はきか花かさねもたわに咲時は野へもれもはぬものにそ有ける　眞淵
遠思秋萩　あき風にしかのねきこゆ高圓の野へのまはきの花やちるらん　蘆庵
愛萩　たれわけてそてぬらすらんふる里のみかきか原の秋萩のつゆ　仝
折萩贈人　おもひやることよひの月にそてぬれてたれみやきの〻秋ちきの露　宣長
萩花移袖　はきの花ひさしくのこれこん秋をまち見るへくもあらぬ我身そ　蘆庵
栽萩　露なからみまくほしくちとへかしと折てそおくるちきの一えた　枝直
萩盛待鹿　秋ちきの花をわけゆくのへの露うちはらふまにすれるそてはも　仝
野萩　今よりはわかやとをとへ秋萩の花つまかなし野へのさをしか　千蔭
　うつしうゑてうつさぬ露も朝夕は野へのまゝなる宿の秋萩　宣長
　さをしかはなそやきあかぬ花妻と名にたつ萩は今さかりなり　蘆庵
　きてかへる物にもかなや故郷にこのみやきの〻はきのにしきを　宣長

野亭夕萩　咲つゝく萩をまかきにゆふ露のなかめえならぬ野へのかりいは　宣長
行路萩　うつら鳴のへのあき萩咲にけり道行ふりの袖にはふまて　枝直
羈中萩　なこりあれやかりねの野へのはきの露ぬき行袖もにはふ曙　宣長
名所萩　一もとのゆかりしもさへ有もものをあまた萩さくむさしの〻原　枝直
　咲しよりをはなか袖もむらさきのむらこにみゆるまの〻うら藪　蘆庵
高圓野萩　高圓の野へのあきはき宮人の袖つけころもふれていくよそ　千蔭
禁中萩　咲ぬれしよもきかゝけもまはゆきをさそむらさきの庭の秋萩　蘆庵
故郷萩　花のみはもとの心にさきにけり野となるさとの庭のはき原　信恭
　なにとなくゆかしき色の深くさやのとなるさとに〻ほふ萩はら　恭忠
　野となりしのちはをしかをあるしにてむかしの庭に萩そ咲ける　春滿
庭萩　咲ぬやとこ萩をとへは故郷はをしかしからむ秋の〻らなる　通恭
　さきしよりなかんをのへの鹿のねもきくこゝちする庭の秋萩　宣長
閑庭萩　わかやとになか花つまは咲にけりあはれを鹿のとめもこよかし　たみ子
　おのか野とおもひなすらん住人もあるかなきかのにはの秋萩　千蔭
　さをしかもとひ來ぬへくそなりにけるあるゝもうれし庭の萩原　春海

山家萩　山さとやとはれぬ庭のまはき原せめてをしかのあとたにもかな　仝
田家萩　さをしかはやまたのひたにおとろけと露さりけなくねたる秋萩　契冲
崎萩　こはささく野しまか崎の朝風によはにむすひし露そこはるゝ　千蔭
花花藏水　秋萩のささのをゝりに山河の水のみとりもみえすなりゆく　春満
萩移水　うつしうゑしひとむら萩のさきしよう花のかけくむ庭のまし水　枝直
秋情寄萩　咲しより下葉うつらふあれまて心にしめるあきはきの花　千蔭
惜萩　朝露に玉おきそへはさてもやはなかめに萩のうつろはゝをし　契冲
萩散風　さをしかのつまとふのへのゆふかせに今やちるらんあき萩の花　春郷
萩花落　白菅のまのゝ萩原ちりにけりまゆ袖にわけてにほはさましを　仝
女郎花　高圓のをのへの秋に宮人のむかしかさしゝ萩か花ちる　春海
　　春日野にいとゝもなまめく女郎花つまかふしかやこゝろまとはむ　契冲
　　移しうゑしちくさの中のをみなへしかよりかくより心よすらん　千蔭
　　人とのさかにたてるをみなへしわたなる秋のかせになひくな　蘆庵
風隔女郎花　をみなへし色のさかりをねたしとや立かくすらんのへの秋霧　仝
霧前女郎花　をみなへしたれをやさしみ秋風の吹はそむきておもかくれする　契冲

女郎花離風　人とのさか野にたてるをみなへし風さそふともなひきたにすな　春海
朝女郎花　なひかぬはあらしふきしく女郎花男山もとの野へにれふるから　春満
　　朝つく日むかひのをかのをみなへし鏡をかけてにほふ色かな　契冲
月前女郎花　ほの〳〵と明ゆく野へのをみなへしたか名殘にか露かけかるらん　土満
女郎花露　をみなへし色なる花の露のうへにわれれちにきとやとる月影　長流
女郎花瓢露　風にのみなひくとすれとをみなへしなまめく色は露にみえけり　春満
女郎花帶露　女郎花かさしにすとかさゝかにのいとゝもてぬけるつゆのしら玉　蘆庵
女郎花帶露　をみなへしさかり過ぬとたをちねとおく白露そうるはしみする　契冲
野女郎花　くちなしの色にさくともをみなへしとゝて過へき秋の野へかは　春海
故郷女郎花　人とやいかにさかのゝをみなへしきりの籬にみえかくれする　蒿蹊
澤女郎花　深くさのわれにしさとのをみなへしうつらとなかぬ花も露けし　契冲
水邊女郎花　をみなへし露のさかりを澤水にうつしておのかかけたのむらし　蘆庵
折女郎花　秋のゝのさはへにさけるをみなへし影みる水にあかぬなるへし　契冲
愛女郎花　をみなへし妹かとかめん花の名としらてそ家のつとに折つる　長流
　　うす霧にすきかけにはふをみなへし心ひかるゝ秋の野へ哉　千蔭

女郎花留人　しら露の玉をよそひてをみなへしなまめくやとは人もとふらん　たみ子
名所女郎花　天川かはへに咲てわふとはあきもかたのゝをみなへしかな　契冲
薄　尾花同　ほにいでゝまねくもあたし花すゝき立よりて見ん人もなきのに　春満
人とはぬすゑのゝはらのしのすゝきしのに乱てたれまねくらん　千蔭
われのみやはさぬたもとゝわひぬれはを花かそてもの露のゆふ暮　長流
あし曳のかた山かけのしのすゝきうらさひしかるあきの夕くれ　土満
なはのこるあつさしられて秋そともほに出かぬる庭のをすゝき　枝直
なはさりにうゑしまかきの糸薄秋をなくさむふしも有けり　仝
薄未出穂　あきのゝのちくさはわれとほに出るを花か袖におはれぬへし　契冲
栽　薄　下葉ちる柳かもとのはつを花はるとあきとをいとによりつゝ　仝
薄出穂　風ふけはすまのうへのゝ花すゝきうらの烟のすゑかとそみる　仝
初尾花　夕月のほのめく野へをみわたせはを花なひきて秋かせそふく　蘆庵
風前薄　ふきよれはこほれてなひく秋かせにぬきあへぬ露の玉のを薄　宣長
薄靡風　を花さへ心ありけにみゆるかな秋としいへはそてのつゆけき　春海
薄露　たひ人はまねくお花のたもとをや草のまくらにゆふくれのゝへ　宣長
夕　薄

月前薄　さをしかの入野の秋の月きよみを花をりしきひとよねてしか　千蔭
　　たれをかもこやのゝ薄くれかけてまねくとおもへは山のはの月　契冲
尾花似涙　むさしのや夕日かけらふ霧の海になみよるを花はてしもそなき　千蔭
薄似袖　わたつみのかさしやいつれ秋かせにを花か涙もなひく野しまは　契冲
名所尾花　あはれとも野守はみすや初を花袖ふるあきのあしたゆふへを　千蔭
野　薄　ぬは玉のゆめのゝを花かせふけはたれをこふとか袖かへすらん　契冲
庭　薄　旅まくらかりねのなこりあとみえているのゝ薄むすはゝれつゝ　春海
閑庭薄　かくなから月をもやとせ庭のおものを花か袖につゆおもるなり　仝
閑居薄　人とはぬにはのを花のほに出てたれをかまねく秋のゆふ暮　蘆庵
岡　薄　とはれしのやとになうゑそ花薄ほにいつるあきは人まねきけり　仝
　　秋風の松をしらふるたひとにをかへのを花そてかへすなり　春満
田　薄　秋かせになひくを花はかくらをかきねかれきふす袖かともみゆ　蘆庵
　　たれしかもまねくとみしは山もとの田くろにたてるを花也けり　仝
行路薄　旅人のうちはらひゆくたもとさへまねくにまかふ露のをすゝき　宣長
故郷薄　名もしらぬくさにましりて故郷のひとむら薄ほにやいてなん　契冲

秋興在尾花

心なき人のさためは秋はきにはぬすゝきおとるとやみん　仝

霜おかん後のかれ野をおもふにもを花にまさる花なかりけり　仝

かるかやの野へふくたひにみたるれは露も心や風におくらん　春滿

みたるへき心しあれはかねてよりあさにましらぬ野への苅萱　長流

秋もなほひとつらさとそみたれあふ薄にましる野ちのかるかや　契冲

風前苅萱

日をへつゝ賤かかるかやつかのまに吹みたしぬる野への秋かせ　蘆庵

苅萱靡風

いつかたになひくとなしにおのつからすにみたるゝのへの苅萱　自寛

苅萱帶露

おきあまる露をおもみや見たるらん風の絶まのゝへのかるかや　蘆庵

寄苅萱述懷

れもふそよひとのこゝろも苅萱のあたなる風にみたれやすきを　蒿蹊

蘭

苅萱のとてもよきなはたゝしとて人見のをかにみたれてそふる　長流

はかなくもぬきすてけりな藤袴ぬしもゆかりもあらぬの原に　春滿

野蘭

さとゝはき野するにたてる藤袴たれになれてし人かなるらむ　千蔭

藤袴きて見る人のあまたあれとたかうつりかとわきてしのはん　枝直

身におとぬ色ともしらてふちはかま秋のゝもりや我ものとみる　春滿

きて見れはうす紫のふちはかまこきかにいかてのへをにはす　蘆庵

籬蘭

花の色は露のまかきのふちはかま匂ひのみこそやつれさりけれ　仝

蘭薫風

ぬきかけしぬしはたれそも藤袴なつかしきまてかせそかをれる　枝直

閑庭蘭

ふちはかまあやなく咲そにほふとてきてみる人もあらぬ垣ねに　蘆庵

名所蘭

つくまのゝわか紫のふちはかまたちて見ねてみあかぬ色哉　契冲

槿花

うつろふはいつれかやすき月草のれなしいろなるあさかほの花　長流

あさかほの花をとかなとおもひしや千年の後の松をみぬほと　蘆庵

葉をしけみ日かけへたつる朝かほ露のひるまも猶のこりけり　蒿蹊

朝顔のうつろひやすき花にしもはかなかる世をたくへてそみる　春海

時しもあれうき世をかりとなく涙けさそつゆけき朝かほの上に　契冲

槿未開

朝かほのさくをまつまの久しさははかなかるへき花としもなし　蘆庵

垣槿花

あたらしき色も有けりあしかきのふりにしさとの朝かほの花　契冲

朝顔珍

まくすはのはへる垣ほとあやまてとうちめつらしき朝かほの花　仝

隣槿

咲ぬやと宿の中垣かいまめはうちそむきたるあさかほの花　蘆庵

中垣のへたてもおかぬ朝かほの花のこゝろのむつましきかな　千蔭

露底槿花

明ぬなりいさとてきゆるしら露にさそはれやすき朝かほの花　契冲

曉更槿花　全
有明の月よりしたしのこれともつれなく見えぬ朝かほの花

かまつかの花　全
秋のたをかりくるときの草なれたうへそ名つけしかまつかの花

きちかうの花　千蔭
七くさにもれし恨やはれやらぬ霧のなかきのきちかうの花

鴨頭草　全
おく露の色こそとにさやかなれ秋をときなる月くさの花

草花　全
おのつから秋の野守となりにけり千くさの花を庭におはして

朝見草花　春海
女郎花なまめくのへにあくかれてたれもこゝろを花になすらん

夕見草花　たみ子
錦ともわれのみ見んはゝえもなしおもふこはきををるひとも哉

月前草花　土滿
朝戸出の衣手さむみのへ見れはを花くす花はなさきにけり

　　全
夕暮をたれとへとかも花すゝきさひしきのへにたちまねくらん

月照草花　千蔭
たくひなき月をまちえてうれしさのほにあらはるゝ初を花かな

　　宣長
よるは又ひかりをそれとちらすのに月も千草のはなのひとくさ

草花映月　千蔭
おしなへて月のひかりになりにけりにはのむら萩露ふかくして

　　春海
すむ月をあらはなりとやをみなへしを花か袖におもかくしせる

　　たみ子
秋の花のいろ〳〵とに見る月はやとれる露のそむるなるらし

　　枝直
をみなへしわたなる露の手枕にこゝろもおかす月そやとれる

風前草花　契冲
花すゝき吹しく風にうちなひき名にこそおへれはたのよこ山

草花靡風　宣長
こきまぜて萩もすゝきもひとかたにいろ〳〵なひくのへの秋風

草花露　全
ささましる花にみたれてちる露も色の千くさの野への夕風

草花帶露　蒿蹊
秋のゝの千くさもゝくさ咲花にあさけは露のおきものこさす

草花露滋　宣長
さま〳〵の色香うつりておく露も花のさかりそさかしなりける

草花色〻　枝直
さそへともあとより露のおきそひてを花かそてによわる秋風

　　蘆庵
秋くさのはなをしみれは色々に露もこゝろをうつしてそおく

　　春海
色〻にかさぬるそてのをとめ子かすかたの野への花のちくさは

草花交色　千蔭
さきとさく花野を見れは世の人のそめなす色とかきり有けり

水邊草花　蘆庵
いろとにこゝろそうつるもゝくさの花のかけゆくしらかはの水

行路草花　千蔭
たなはたのおれるにしきかかたのゝや千くさをうつす天の河水

故郷草花　契冲
萩にすり月草にすりかり衣野をわけゆけはいろもさためす

野　花　全
野となりてふるきみやこはうつろへとありし錦の秋はきの花

　　蘆庵
みとりなるくさのいとをてをみなへし花の錦をおらぬのそなき

野花留客　千蔭
まくす原花さく秋と野へとにひとのこゝろのひかれぬる哉

庭移野花　うつしうゑてのへのちくさの花かすを思ひのこさぬやとの秋哉　春海

野花妨路　まねきとめつなきとゝめて秋のゝのを花くす花みちもゆるさす　長流

野花薫風　咲つゝく花の色々かしこめてひとつにかをる野へのわきかせ　枝直

秋花　いと薄くすはなましる秋のゝに心ひかれぬひとはわらしな　千蔭

秋花逐夜開　ねぬるよのひとまにさきて朝な〳〵みぬ色そふるあき草の花　蘆庵

庭盡秋花　わか袖も草のたもとゝなりにけりにはの千くさの花にましりて　たみ子

秋花催興　からにしきたゝまくをしみ秋の野の萩の遊ひにこの日くらしつ　春海

栽秋花　むしのねもこはきか花もゆふ露をまちえかほなるませのうち哉　仝

老見秋花　庭のおもは千くさの花のいろ〳〵にかきかそへてもつきぬ秋哉　自寛

惜秋花　かいぬれはたをらぬのみそ女郎花なにかはよそに思ひすつへき　蘆庵

寄秋花述懷　夕日こそさして見せけれこかくれてうつろひのこる秋はきの花　仝

露　庭の面にくさははな〳〵匂へともあるしそ何のいろなかりける　契冲

秋露　玉とみて手にはとられぬ白露や月のかつらのしつくなるらん　仝

百くさの花といふとも秋のつゆおかすはかゝるひかりをもみし　蘆庵

色なしといひなくたしそくさも木も千くさにそむる秋のしら露　仝

秋露重　袖かこつ人にとはゝやことわりの秋のさか野のつゆはみきやと　宣長

秋露滋　糸薄きなひくとみしはさゝかにのすかきにつゆのおもるゑけり　春海

朝露　露しけきをはなかそてにかせふけはやとりし月の影もみたれつ　たみ子

朝露如玉　あはれさの心にふかくしむものはあきのあしたの露にさりける　千蔭

夕露　宮木のゝ木のした露そこはれあふ朝たつ鹿のつめひつるまて　契冲

夜露　いろ〳〵の玉ぬきみたる秋のゝは花の千くさにゆらく朝つゆ　仝

露如玉　ゆふくれは風よりさきともとあらのこ萩の露に月をこそまて　宣長

月映露　花さかぬくさ葉に秋をかすかのや月かけきよきよはのしら露　仝

くさの露ふかくおもへはかなしきに玉ゑけりとをらてこそ見め　契冲

萩原や月かけきよみとふかりのなみたの露のかすも見えけり　宣長

月前草露　ふたつなきこよひの月をもゝくさの露にやとして千ゝに染けり　たみ子

野露映月　月にたにとゝれさらまし草の戸のよもきを露のすさめさりせは　枝直

草露映月　むらさきの月はなにそのゆかりとて草葉もあはれむさしのゝ露　宣長

月照草露　心なきくさのたもとのつゆにこそうき事しらぬ月やとりけれ　枝直

むさしのやはてなき草の露とにひかりをわくるあきの夜の月　千蔭

露深　草の葉にかす〳〵むすふしら露はそてのうへにもしけき秋かな　たみ子
露脆　深艸は野となりはて〵しけりにききのふの露もきえぬはかりに　契冲
悲露　白露をぬかんとおもひてむらさきの糸よるはとにきゆる朝つゆ　仝
憐露　むすふよりけやすきくさの露の上をかもへは袖そ先しほれける　蘆庵
風前露　心なき人しもとは〵わはれさはいさしら露といひてこたへん　千蔭
庭前露　秋かせにまくすはかへるいなわれは花の〵露に月まちてみむ　契冲
閑庭露滋　わひ人のをすのやつれのひまとめて露吹いる〵をきの上風　千蔭
苔路露　おはかたの露をあはれとみし人にみせはや秋のあさちふの庭　仝
秋田露　露ふかし雨のなこりの野へよりもはらゑぬにはのむくら蓬生　蘆庵
田上露　人とはぬ庭のこけちにしく玉は秋くるよひの露にそ有ける　仝
故郷露　色つかぬいなはか上にみるはとやたのもの露のさかりなるらん　春海
　かりのこす山田のいな葉あすしらぬやと〵やつゆも心おくらん　宣長
　山はまたそめもあへぬにしらつゆのおけるかとたは色付にけり　枝直
　故郷はうつらのとこのおきふしに人のはらはぬ露そみたる〵　仝
　ひまもなく軒のしのふの露落てくもらぬ雨のふるさとの空　宣長

野露　すみすてし宿をもとひてみるへきはあさちか露の秋にさりける　千蔭
野露如玉　秋にさくのもせの花のいろ〳〵に露そこゝろをおきものこさぬ　春満
野草帶露　花に〵ほひ月をやとして秋の〵のあはれそへとおけるしら露　春海
草上露　秋の〵におくやしら露緒をよわみたえてみたる〵玉とみるまて　土満
　おもふにはいらふ野風もまけぬらしを花か袖のなはそ露けき　宣長
草露如玉　風をまつ草葉の露よいつまてか我身のうへにおもひおくへき　春海
　はく〵みてうるふを見れは置露や秋のこくさのちかしなるらん　蘆庵
　ゆふくれの心はそさを糸によりて玉にかぬかん草のうへの露　枝直
　さとはあれてうつら鳴の〵ふか草にやつれぬ露そ玉はなしける　契冲
社露　なきさはのもりの木の葉におきそめて秋くる露の袖ぬらすらん　土満
笹露　花さかぬをさ〵かうへもおきとほく露こそ秋の色をみせけれ　千蔭
浅茅露　萩もちり人まつむしも聲かれてつゆのみしけきさきちふのやと　たみ子
袖露　おきそめてかわかぬ袖の秋の露くさ葉かうへは風もこそふけ　春満
袂露　さま〳〵の花になれにし袂にはかわかぬ露をあはれとそみる　春海
露世人涙　かりの世をおもふ涙かかへにれふるいつまて草にむすふしら露　蘆庵

寄露祝　あたものとたれかいひけん庭ひろみ露も千とせの數にとるへく　千蔭
寄露懐舊　老てしる月のあはれやこれならん昔かゝちぬ袖のうへのつゆ　長流
秋風　いかにせん軒はの萩をかりすてゝきかしと思へはよものあき風　契冲
我せこかとさあらひきぬもぬはなくにをきのはそよき秋風の吹　筑波子
聞秋風　ねやちかき萩の葉過る風のおとは身にしむものゝ友とこそきけ　たみ子
秋風涼　いつしかに又秋かせとなりにけりきのふそ萩をそよきそめしを　契冲
秋風漸寒　なつ衣かもひしまゝのすゝしさはけふそてにたつ秋のはつかせ　長流
秋風寒　このゆふへ萩の葉そよき吹風や秋の身にしむはしめなるらん　土滿
夕秋風　ふしのねの雪をあふきて行人も秋かせさむしむさしのゝ原　蒿蹊
吹風乙いつとなけれと萩の葉のゆふへそわきてこたへかはなる　春海
まくす原露吹秋のゆふ風にあやかる袖はさらにぬれつゝ　契冲
夜秋風　まはきちりを花みたれて吹風のやゝはた寒きあきのゆふくれ　蘆庵
明秋風　松のひゝき萩のさやきのさま〳〵にきこえてたえぬよはの秋風　眞淵
ねさめつゝまくらもそよになけゝとや軒端の萩のよはの秋風　契冲
玉とちる露さへ手にはとられねはましてめにみえぬのへの秋風　長流

野分　あらましきのわきにちらふ花薄おのかふゝきに袖さむけなり　千蔭
よもすから野わき吹しくしのゝめにしをれて咲る朝かほの花　契冲
野分せしあかたの宿はあれにけり月見にこよとたれにつけまし　眞淵
もゝくさの花はさらてもうつりゆく秋のする野にのわき吹なり　春海
野分せしみすゝ高かや影ふして下葉にましる秋はきの花　仝
松かせのとちをせめていとゝしく秋のしらへのたかさこのやま　契冲
山秋風　あきかせはたちにけらしなさらしなやをはすて山のゆふ月の空　眞淵
名所秋風　わたの原あきのかせこそたちぬらめひゝきとなるおきつしら浪　古道
海邊秋風　立わたるうらわのきりのひま見えて蘆の葉なひく秋の汝風　蘆庵
やしほちの秋吹かせを百舟のまほにみせたるうみつらのやと　千蔭
浦秋風　大伴のみつのうらなみ吹よせて松原こゆるあきのゆふかせ　眞淵
江秋風　くさかえの入江のみさひかたよりて蘆のふる葉に秋かせそふく　契冲
關路秋風　旅人のせきちこえゆく鈴鹿山すゝろに秋の風そ身にしむ　千蔭
行路秋風　行秋のこするをさそふ山風にもみち吹こすあしからの關　春海
東路はころもてさむしし雲のあはゝかたけの秋のとつ風　眞淵

故郷秋風　うつら鳴ふりにしさとの飛鳥風を花かそてやふきかへすらむ　千蔭
山家秋風　松のおとはなれしいほりの軒はにも荻の葉かなし秋のゆふ風　宣長
田家秋風　穂なみよる秋のたつちにかりほしてかせの姿はみるへかりけり　たみ子
遠近秋風　吹おとは窓にきかせて秋風のすかたはにはに見するなりけり　仝
岡秋風　さわきにしのへの眞葛は吹過てをかへにかへる松かせのこゑ　契沖
松上秋風　松蔭のやとには秋もなさものをあなさかしらの風のおと哉　枝直
庭前秋風　いこまやままたみえそめてわかやとのこすゑ色つく秋かせそ吹　契沖
秋風入簾　難波かたとまやの秋のあしすたれなれし入えのかせかよふらむ　千蔭
秋風催興　秋風にふきかへされて小山田のはなみをよそにすくるむら鳥　蘆庵
秋風歎老　いつまてかくさ木のうゑに聞つらん我身をしをる秋風の聲　仝
虫　夕まくれ野山のむしの聲々はひくらしにこそもよほされけれ　長流
　ねにたてゝなかぬはかゝそきり〳〵す秋の恨はわれやおとれる　春満
　霜またて草のたもとは色つきぬよな〳〵わふるむしのなみたに　枝直
　露はらや霜となるまて秋ふけてわひしらになくきり〳〵す哉　千蔭
　さよふけてたれすみよしの岸もせんとはさとをの〵松むしの聲　契沖

聞虫　露やうきおもひやしけきゆふされは草ねのむしのみたれてそ鳴　蘆庵
虫聲　ほのかなるすゑの〵月になくむしはいつたにくさの枕をかとふ　春海
夕虫　秋の〵はくれゆく花の下葉よりなくも千くさのむしのこゑ〳〵　宣長
　夕つくよほのかにむしの鳴こゑを秋のあはれのもしめとそきく　土満
夜虫　秋のよはねられさりけりあはれともうしとも虫の聲をきゝつゝ　筑波子
　秋のよはむしのねをさへかけそへていく度月に袖しほるらむ　宣長
寒夜虫　きり〳〵す秋の夜寒の床ちかみわかまとろまぬかへになくなり　契沖
霜夜虫　ねさめする霜夜の床のきり〳〵す有かなきかのねそあはれなる　春海
深夜聞虫　さよふけぬねさめよとてや鈴虫のふり出る聲のおとろかすらん　契沖
終夜聞虫　いかにうき秋のよなれはきり〳〵すこゑ絶もせす鳴あかすらん　蘆庵
曉虫　虫のねのたえ〳〵になるあさちふに月そかすそふしの〵めの露　宣長
寝覺聞虫　いつまてかかくてもきかん鳴よわる霜よのむしのあかつきの聲　蘆庵
月前虫　虫のねのいつれはあれとねさむれはきり〳〵すこそ先聞えけれ　契沖
　聲たえす鳴やつまとのきり〳〵すこよひの月にたれかいをねん　枝直
　秋のよのふけゆくなへに虫の音も月とゝもにそすみわたりける　土満

待月聞虫聲

雨中虫　むしのねかいつれにれつるあはれともなみたわかれぬ秋の夜月　宣長

はしゐして月まつ庭の夕くれにまつなきいつるむしのこゑ〳〵　仝

月くらき雨夜の窓のきり〳〵すおのかつゝりもさしやわふらん　蘆庵

よもすから窓うつ雨にこたへつゝしめやかになくきり〳〵す哉　春海

雨夜虫　雨はれぬ軒の玉水つふ〳〵とさゝめくよはのきり〳〵すかな　蘆庵

風前虫聲　秋風にを花ちるのゝきり〳〵すいたくな鳴そ物おもふ頃に　春郷

虫聲隨風　秋風にたくふやしらん松むしのすたくをかへのねこそことなれ　春満

露底虫　ひさもなき露の下葉にすむむしも鳴ねたぬれぬ庭の浅茅生　宣長

虫聲非一　時しもあれつまゝつむしもはたおりも星の逢てふ秋にこそなけ　千蔭

虫聲滋　色みえぬよるの千種と秋のゝになくさま〳〵のむしの聲哉　宣長

虫聲幽　露おもるむくらよもきの夕かけにところせきまて虫の音そする　春海

野分せしまかきかもとのやちくさとともに枯行むしのこゑ哉　千蔭

相思夕上松臺立蓋思蟬聲滿耳秋

野虫　こぬ人をまつのうてなの夕くれにうたても鳴かむしの聲〳〵　仝

野外夕虫　萩の露かはる涙のいろかともおもふまてなく野へのむし哉　宣長

わけまきもかへる野末のゆふかせにたれまつむしの乱てやなく　たみ子

寒野虫　名のみして秋のすゑのゝはつ霜にうらかれゆくか松むしのこゑ　宣長

いはしろの野へのゆふ露さむけれはむすはゝれ行まつ虫の聲　契冲

満野虫聲　いつのよのあゆひの小鈴野へとにみたれてむしの音に殘るらん　千蔭

叢端虫　あさち原こほるゝ露をこの頃の涙にかりてむしやなくらむ　常樹

草虫　秋のゝの草のたもとにれく露と音になくむしの涙なるらん　土満

浅茅虫　月かけもこほるゝ野への秋かせにむしのねきえぬあさちふの露　宣長

原虫　あき風のふくるよさむにまくす原恨なれてやよわるむしのね　春満

虫啼草花　鷹すゑてかへるかたのゝゆふまくれを花かもとに鈴虫そなく　千蔭

ゆきふりにきくもかなしな秋はきの花ちるのへのまつむしの聲　春郷

萩の露はらはまはしくおもけれとおのれも風やまつ虫のこゑ　契冲

河音にまきれもすへきむしのねのなとかねさめをせに聞ゆらん　仝

川邊虫　こはた山夕きりたちぬしかはあれとまこそわるしくつわ虫なく　仝

山中虫　宮人のかよひし道も野となりておちしわゆひのすゝむしのこゑ　仝

古宮虫　白露のわれをおきてはふるさとのあるしやたれと鈴むしのなく　仝

故郷虫　あはれさのいつれはあれと故郷にひとまつむしの月になくこゑ　春海

幽居虫　たのめつゝこぬよかさなるよもきふにさてもよわらぬ松虫の聲　千蔭

庭虫　初霜のおきゐてきけはむしのねもよな〳〵かるゝ庭のあさちふ　宣長

庭夜虫　風もなくふけゆくまゝに松むしのこゑすむにはの月そ身にしむ　春満

暁庭虫　もとゆひの霜のねさめも有物を露ならうらみそ庭の松むし　枝直

荒庭虫　住われしむくらのかとに聲たてゝ人まつむしそあるしかはなる　春海

籬下虫　秋もやゝかきぬの草の露しもにむしのねよりそかれそめにける　枝直

庵虫　夜をさむみ野寺かはほの草の戸もさせてふむしの聲そうらむる　春満

徑虫　露わけてわれかとゝへはねを絶てわけこしあとに松むしのなく　蘆庵

閨虫　きり〳〵すたのむかけとて鳴よるもおなしよもきか閨のさむしろ　仝

床蓑　にきそはる霜のよ床になくこゑもむすはゝれゆくきり〳〵す哉　春海

壁間虫　月さゆるかへのあれまのきり〳〵すうちとゝもわかぬ霜夜とそ鳴　蘆庵

枕邊虫　きり〳〵す夜深きねやの枕よりくゝゝるなみたの露やとめこし　千蔭

虫聲近枕　野やはなきいさめの里のきり〳〵す枕のしたのこゝにしもなく　契冲

旅宿虫　ひとりぬるわかたまくらをなくさめて鳴やすゝむし松むしの聲　古道

秋ふけて草枕ゆふうまやちにふりゆくものゝ鈴虫のこゑ　千蔭

蟲聲入琴　名にしれへは松虫のねもつまとのよはのしらへに通ひきにけり　仝

寺靜聞虫　秋風のそれにはあらてひくことのしらへそかよふ松むしの聲　自寛

虫聲枯　とはれぬを心とすめるむろのとに人まつ虫やたれにならへる　春海

暮秋虫　まつむしもこゑうらかれぬ秋もはやすゑの〻草は色かはるらむ　春満

松虫　秋もいますゑの〻原のゆふ露にむすはゝれたるはたおりの聲　たみ子

ゆふくれの風におはへる松むしはたかつまとのねにかよふらん　千蔭

はてしなきためしにそきく武藏のや千代をわまたの松むしの聲　枝直

鈴虫　ゆふされは露ちるをの〻秋風にふりいてゝなくすゝむしのこゑ　春海

秋さむくなりゆくまゝにひるまのみ聲ふり立る野へのすゝむし　蘆庵

ふりいてゝ鳴虫のねやおのか名のすゝろに秋のわはれそふらん　千蔭

蛬　おく露も霜になりゆく淺茅生をかれなてもなくきり〳〵すかな　仝

秋さむみ我きぬつゝる窓にきていそかしたつるきり〳〵すかな　蘆庵

促織　女郎花たかかり衣いそけはかはたおるむしのよるかけてなく　仝

蟋蟀　秋されとかるかやましる淺ちふにれのれみたれてこはろきの鳴　千蔭

寄虫述懷　常うとき老のみゝをゝへたてぬはかきねの野への虫のこゑ〳〵　蘆庵

鹿

あらちをのかるやはもれて今さらに戀にしぬへきさをしかの聲　長流

むしのねもかなしと聞し秋のゝの分けるまゝにさをしかのこゑ　契冲

たくひこしあらしと松にやすらひて軒端すきゆくさをしかの聲　宣長

聞鹿

秋ふけて下葉うつろふはなつまになは枯やらぬのへのさをしか　千蔭

夕風にま萩ちる野のかりまくらしかのねきけはいこそねられね　春海

松風はたえす吹ともたかさこのをのへのしかはまれにこそきけ　蘆庵

朝鹿

あはれなり山もとくらき朝霧につまかふしかのよをのこすこゑ　春滿

朝霧にたちかくれつゝさをしかのなはかけのこる月になくらし　たみ子

夕鹿

心なきさつをにとはんもふくれのしかの鳴音をいかにきくやと　枝直

妻こふるしかのなけきの夕霧にまよふ野原のおのか通路　契冲

曉鹿

深からぬ外山のいはのねさめさへさひしき秋のさをしかの聲　枝直

夜聞鹿

たつた山妻とひかぬるさをしかも鳴てやひとりよはにこゆらん　契冲

深夜聞鹿

さよふけて月はいりにし山のはにつまこふ鹿のこゑのさやけさ　千蔭

寢覺聞鹿

夜をなかみねさめて聞はよふこゑかわかるゝ聲か鹿のなくなる　菅根子

毎夜聞鹿

こはささく野へなつかしみ白露のひとよもおちす鹿そねにける　契冲

終夜鹿聲

つまこひの逢よわはぬよ聞わかすものかなしらに鹿そなくなる　仝

月前鹿

きゝまとふ妻やうらみんよもすからところさためぬさを鹿の聲　たみ子

高砂のをのへのしかも秋のよの月にはたへぬおもひもやそふ　千蔭

月下鹿

つまとへは月もすむ野の萩の露あたなる色にしかそなくなる　宣長

風前鹿

さ夜中とふけゆくみねの月影にいやすみわたるさをしかの聲　千蔭

わひしらにしかそなくなるあし引のみねの秋かせさむく吹らし　春郷

鹿聲比風

吹こもるせきのあらしもすこきよに須广のうへのゝさを鹿の聲　宣長

山ふかみ嵐のつてもゝ峯こえてすそ野によわるさをしかの聲　仝

鹿聲比嵐

しと見山あらしにたくふしかのねも暮るよりこそ吹おろしけれ　契冲

雨中鹿

雨過るやまのしつくにたちぬれて妻や待らんさをしかのこゑ　千蔭

鹿隱霧

かくてれもなくねあやあしさをしかのつまとふやまの嶺の夕霧　宣長

霧中鹿

をちかたやしけきゝ山の五百さりや八百霧かくりさを鹿なくも　土滿

つまこひのしかのなけきのれきそ山空もひとつの秋の夕きり　契冲

妻こふるおのかなけきの夕きりを分まよふらん野路のさをしか　千蔭

みるめなくくれゆく山のゆふ霧にのこるもさひしさをしかの聲　宣長

原鹿　よもすがらつれなき妻やこひかねてあしたの原にをしか鳴らん　春海

野鹿　さをしかのつまにこよひやまくす原恨なれにしこゑのきこえぬ　契沖

　　さをしかのしからむのへの小萩原いまそ妻とふさかりなりける　仝

野夜鹿　色かはる秋のさかのゝ花すゝきほにいでゝ鹿のつまこふるこゑ　枝直

　　風さむみつまこふ野への千草にやかもひみたれてしかの鳴らん　宣長

　　萩原やうつろふ露の月をさへしからみふせてをしかなくなり　千蔭

野鹿交萩　はきか花ちりて野風のさむきよにうつりもゆかて鹿のなくらん　宣長

　　あきのゝのはきのにしきのたてぬきに霧わけまよふさを鹿の聲　枝直

鹿鳴秋萩　眞萩原花ちる頃はさをしかのなくねさそはぬゆふかせもなし　春海

　　風ふけはつまとしめのゝ萩か花うつろふ色にをしかなくなり　宣長

鹿交草花　こゑせすはそれともしらし咲萩にみえす見えすみさをしかの鳴　自寛

　　咲萩の下にかくるゝさをしかはにしきのふすまきてやふすらん　仝

田鹿　高圓の野原の露にふすしかもかのこまたらの萩か花すり　契沖

　　秋のゝにすめるかひよとしかそなく花のにしきにたち交りつゝ　千蔭

　　秋ふかみをかへのわさたほに出てつまよふよはのさをしかの聲　宣長

田上鹿　なく鹿のわけゆく稻のほのかには姿もみゆる小田のゆふ霧　仝

田家聞鹿　かりのこす小田のたぬしの心をや妻まつしかのうれしみてなく　蘆庵

　　秋ふかみ山田のかけひ水たえてかよひかはるはさをしかの聲　契沖

岡鹿　吹おくるをしかの聲そたゆむなるつまや今來のをかのまつ風　宣長

　　おもふにはしのふの岡にたつしかもまくるかよはの妻戀の聲　仝

樹間鹿　秋かせに木陰の霧も吹はれて鹿のたちとの月にかくれぬ　蘆庵

名所鹿　かすか野に秋來てみれはさをしかの角はみかさの林なりけり　長流

　　明ぬとておのかいるさの山のはに月をもさそふさをしかのこゑ　宣長

　　さをしかのあふをかきりの妻戀もむなしき空のむさしのゝ原　契沖

　　あさもよし紀の川きりやへたつらん鹿そなくなる妹と背の山　土滿

旅宿鹿　さをしかのつまとふ宵の岡のへに眞萩かたしきひとりかもねん　眞淵

　　いとゝしく都こひしもさをしかの入野の草のまくらゆふ夜は　千蔭

　　さをしかもなほをかひよと夢をたにむすはぬ草の枕とふらん　蒿蹊

旅宿聞鹿　都にてよそにおもひしゝかのねをたひにしあれは枕にそきく　枝直

　　おなし野につまこふ鹿のたくひかは千さとの外に旅ぬする身は　千蔭

海邊鹿　たひ衣わかつまならぬ萩原にしかのねきかてひとりかもねん　眞淵

ちとりにはあらぬをしかも妻こひに身をうみへまて鳴わたる哉　たみ子

山ちかき涙のゆきねはしかのねも枕にかゝるあきのうちかせ　宣長

旅泊鹿　秋さむきいそ山れろし海ふけは波のうきねにをしかをそきく　蘆庵

夜泊鹿　たかさこのしかのねきゝてわかしかたうきねの床に涙おとしつ　千蔭

關路鹿　おとは山しかのねきこゆあふ坂のせきのこなたに妻やこふらん　宣長

遠聞鹿　さをしかのこゑはる〳〵とさそひ來て風こそ秋の袖ぬらしけれ　枝直

鹿聲遙　をきのはの風のたえまにきこゆるは嶺をへたつるさをしかの聲　仝

鹿聲近　花つまもうらかれぬとや山ふかく遠さかりゆくさをしかのこゑ　たみ子

鹿聲両方　わかやとのものときくこそあはれなれ枕のやまになく鹿の聲　春郷

鹿聲繁　筑波山このもかのもに鹿そなく神のいさむる妻ならなくに　土滿

山鹿　戀くさにおのかゆきゝもまとへはや野にも山にもさをしかの聲　契冲

つまこひに身をもをしまぬさをしかや神垣山をこえて鳴らん　長流

をくら山秋かせさむくなるまゝに峯のをしかやよたゝなくらん　自寛

さをしかの聲を薄のほにあけてふなをか山に今やなくらん　契冲

夜聞山鹿　秋されはをしかつまこふあはゝ山あはてやぬらん長きこのよを　土滿

山中夕鹿　霧ふかきゆふへの山のしかの聲なれてもそてのたゝならぬかな　千蔭

山家鹿　わか山のをしかのこゑを秋かせのさそゑんさとも袖しはるらし　仝

山家聞鹿　鹿の聲きけはかなしなかゝらんとおもひ入にしてゝろつからも　仝

深山鹿　おく山のなか花つまはかれぬらしをしかの聲のとにとよむる　たみ子

深山聞鹿　ほとゝはしすそのゝ秋の妻とひもをのへのよそのさをしかの聲　宣長

杣山にこるやつまてのおとやみて妻こふしかのこゑきこゆなり　千蔭

ぬれてやときく鹿のねにたくひ來て山の雫も袖におちけり　宣長

遠山鹿　山深く入にしつまやしたふらんをしかのこゑのとはさかりゆく　たみ子

外山鹿　やまとはみへたつとなしにさをしかのなく音の色もうす霧の空　宣長

峯鹿　秋しのやと山の雨のかさやとりしかのなくねに袖ぬらしけり　千蔭

鹿聲何方　山彦のかすかにつたふ鹿のねはいくへのみねのおくに鳴らん　春海

鹿聲夜友　とよみしも聞まとふまてなり行はいつこにしかの聲よわるらん　たみ子

鹿聲驚夢　露しものおくての山田もる庵にねぬよの友とをしかなく也　春滿

みしゆめのをしさはあれと手枕に聞すてかたきさをしかの聲　枝直

寄鹿述懷　いさをしか涙くらへんうき秋につまこひならてものおもふ身は　春満

晩秋鹿　眞萩ちりもみちみたるゝ山里に秋をゝしかのねにたてゝなく　春海

暮秋鹿　秋ふかく草葉しをるゝのへのしかあらしれて鳴こゑのかなしさ　枝直

秋望　遠方や千町のわせた色つきて霧まにうすきかりの一つら　千蔭

うちわたすとは山もとは霧こめて門田のおもにをしねかるみゆ　土満

ゆふつく日を花かすゑにはのめきて薄きりかすむ秋の山もと　契冲

秋眺望　鴈かねのつはさにわけし霧まより島山とほきもみちをそみる　千蔭

高圓の野へのうき霧とたえしてを花につゝくまつのむらたち　春海

水郷秋望　わしろ木におりゐる鷺のみのけのみひとむらしろきうちの川霧　千蔭

海邊秋望　秋の日の入江さむけきしほ風にひゝきのなたのあまのよひこゑ　契冲

水邊秋望　都人みぬ海山のねもかけも月にうかへるひろさはのいけ　眞淵

山邊秋望　かりかねのつはさの風に霧はれてたえ〳〵みゆる嶺のもみちは　千蔭

野秋望　のへ見れは花色〳〵にさきみたれむしこゑ〳〵に今そなくなる　契冲

山路秋行　さをしかの妻こふ山を秋ゆけは袖に先しるはつしくれ哉　千蔭

もみちなつ秋の山路のはつしくれえもふりすてゝすきぬ山もと　宣長

秋興　うすくこくこのもかのもに色みえてもみちあらそふ秋の山かな　土満

行てみんくれなはなけのやとりかはまつてふ虫の花になく野を　契冲

うき時とたれかいひけん秋されは先さきにほふはきのはつ花　千蔭

野外秋興　おもふとち秋野の花にたちましりくれなはむしのねをも尋ん　春海

野秋興　秋の野はにはふ糸はき葛の花たれもこゝろのひかれてそくる　千蔭

仙家秋興　月草に色とりきつるかり衣うつれはかはる萩か花すり　長流

山中秋興　仙人のやとにもさくときくの花きくよりみるをまさるとやせん　契冲

河邊秋興　山も海もおなしみとりと思ひしをもみつる秋そことにも有ける　土満

田家秋興　川上の岩かきもみち散ぬまに又もきてみんいはかきもみち　契冲

月きよきあら田の原のふせいほにしかのね聞てこよひあかさん　仝

山家秋興　み山へはもみちすらしもはしりての門田のわさ田色つきにけり　春海

秋夕　山さとにまくらからすは村もみちきのふにまさる色をみましや　土満

なとてかく身にはしむらんかけよわる入日をつゝむ薄きりの色　春海

野へやとき袖やれそきとくらふれは涙も露もおなしゆふくれ　千蔭

なかむれは心の外のあはれさへそらにかすそふあきの夕くれ　たみ子

遠山は入日のなこりなはみえてのは霧わたる秋のゆふくれ　蘆庵

いかにせんいつくもおなしさひしさときゝてもたへぬ秋の夕暮　宣長

秋といへはうしとあはれとふたしへに夕の空をなかむるやなそ　たみ子

くれはてゝ日かけに月のかはるはと秋はよろつの物そ悲しき　長流

秋といへは夕の風のなにすとかこひせぬ人の身にもしむらん　たみ子

わか袖にかゝれとてしも夕風はふかしを庭のをきのうは露　宣長

雨になる空とはみえぬ雲の色も秋はゆふへの袖ぬらしけり　蒿蹊

を花さへ秋のゆふへは物やおもふわか袖ならぬそての露けき　契沖

うしとてもいかゝはすへき心もて入にし山のあきのゆふくれ　蘆庵

松かせはふけとふかねと身にそしむ山のとかけの秋のゆふ暮　仝

さひしさは住やとからのならひかと立出るのへもあきの夕くれ　仝

なにはかたなにか秋なる芦の葉にゆふきり立てあまのもしほひ　契沖

ゆふ霧にとわたる鴈をしるへにて都へのはるみこしちの舟　千蔭

をちかたの河邊にみえしらさきもねくらにかへる秋の夕暮　蘆庵

秋夕天
秋夕月
秋夕風
秋夕雲
秋夕露
山中秋夕
深山秋夕
野外秋夕
海邊秋夕
海路秋夕
河邊秋夕

ゆふ風にきよるなきさのさゝら浪水にも秋のこゝろはありけり　千蔭

むしひめの袖のゆふつゆいかならん霧たちわたるうち川のつら　仝

を花のみはのかにみえて霧わたるやまたのくろの秋の夕暮　蘆庵

ゆふまくれ秋はみやこのなかめたにさひしきものを山かけの庵　宣長

山かせの軒の松ふくさひしさは我身ひとつのあきのゆふくれ　仝

くれぬまはむしのねうときあさちふに月待はとそ秋はさひしき　春海

故郷になかめすてしも草枕こゝそつゆけき秋のゆふくれ　自寛

軒はあれて庭は野となるふる寺のふりていくよの秋の夕くれ　蘆庵

心あれとなにおもひけんなくてたにかなしきものを秋の夕くれ　宣長

こゝろさへふけはしをるゝ夕風を木草の秋とおもひけるかな　仝

おほかたに秋をしらするゆふ露のなとわか袖をれきところなる　春海

いつとても秋のならひはかなしきをゆふへはわきて涙くましも　士滿

なかめつゝ人のためさへかなしきはこゝろにあまる秋のゆふ暮　契沖

かりそめに草葉の露を吹かせもなみたすゝむる秋の夕くれ　宣長

なへてよのあはれと人やおもふらんふりまさる身の秋の夕くれ　蘆庵

水邊秋夕
水郷秋夕
田家秋夕
山家秋夕
閑居秋夕
閑庭秋夕
旅宿秋夕
古寺秋夕
秋夕情
秋夕思
秋夕傷心
秋夕催涙
老後秋夕

稲妻　ひこばしは又もわたらぬ天河なほよひ〳〵にかよふいなつま　契冲

露のまに露をみなからもらさしとしつ心なくかよふ稲妻　千蔭

いなつまのひかりにもみよ宿るまはたゝしはしなる露の此世を　春海

くるゝよにわさたの穂なみなほみえて葉のほる露にうつる稲妻　蒿蹊

風にちるくさ葉の露を尋來てあたくらへする稲妻のかけ　宣長

田上稲妻　かきわたす露のいなはに稲妻のひかりもなひく小田の秋風　仝

秋田　ゆふやみのあやなき小田をもる賤か心なくさやかよふいなつま　蘆庵

秋のたのたりほの露の玉ゆらもやとりさためぬいなつまのかけ　枝直

郭公とはたのおもにきのふこそさなへとりしかとつ鴈の聲　長流

濱風になひくたのもそかきりなきいなみの海を末のはなみに　契冲

心とてかりしわさたのひつちさへ穂に出ぬへくみゆるあきかな　春海

我も世をあきたのそほつ露しもにれのれのみやは立つかるへき　蘆庵

うゑしより秋田かるまていくたひか稲葉の露に袖ぬらすらん　土滿

秋山田　小山田をしからみふせてしかなはみそいつか苅んと日を待物を　契冲

夕日さすはしのもみちの枝たわに山田のをしねかけはしてけり　千蔭

秋田風　かたそきの行あひわさたうちなひき秋風すゝし住よしの松　長流

朝あ〳〵小鳥さわたる秋風にかとたをみれは色つきにけり　古道

木のまよりみゆるわさたの稲の香をほのかにおくる山おくの風　契冲

秋田庵　山田もる賤のかりほにおくかひの烟とゝもにたちあかすらむ　春海

秋のたに鹿をなこその關すゑてかりほの庵はもるにそ有ける　長流

稲　をちこちのしつかたか垣うつもれぬ千町のをしねかりてはす頃　千蔭

稲舟　みなとたに朝夕かよふいなふねはたゝ苅しはにまかせてそこく　春海

檜田　ひつちおふる苅田の面の今さらにさなへにかへる色そさひしき　契冲

穂に出ぬをたのひつちや憂とみんれろかれひなる身の類ひとて　春海

枯るたにおふるひつちは我なれやはにいつるともなくて枯ぬる　蘆庵

秋夜　此ころのよるはきぬたのれとす也かりの聲もたうちそはりつゝ　筑波子

夕くれに秋の心はつくしにきねさめはなにのものおもふらむ　契冲

しら露のおくとはぬとはたゝならす月みぬよはも鳴むしのこゑ　枝直

秋夜深　ともし火をかゝけつくして窓のとにほのめく秋の有あけの月　千蔭

秋夜思　ともし火はかゝけつくせと殘る夜にはてなき秋の思ひをそしる　春海

秋夜長　秋のよもぬれは時のまおきねつゝなかむれはこそ長月のそら　契冲
とりのねにまたおとろきつ秋のよのいくむすひせし夢の名殘を　春海
時守かおもひたゆみてぬるはかり秋は夜長くやゝなりにけり　千蔭
遲々鐘漏初長夜
秋夜寒　夏衣ころもへぬれは秋かせのすゝしさすきてよさむにそなる　契冲
月清く秋かせ寒し今よりはいかてか老のいをやすくねむ　蘆庵
秋夜嵐　あきのよの長き天路を行月にあらしよ雲のつゝみあらすな　契冲
秋夜露　ふくるよとしらて月をはみつれともいつしか袖は露にぬれぬる　春海
閑中秋夜　よを深くおきいてゝ見れは庵のとの月こそひとり澄わたりけれ　蘆庵
惜秋夜　こはろきのまちよろこへる長月の清き月夜はふけすもあらなん　眞淵
秋寢覺　秋さむみ床のへさらすむし鳴てね覺かちにそよはなりにける　蘆庵
秋夢　むらさめのおとにねさむる秋のよは幾たひ夢をむすひかへけん　春海
秋雨　袖ぬらすこのゆふくれの心をは空にもしるやあきのむらさめ　宣長
桐の葉のつもるかうへにうちそゝくあしたの雨そ秋のこゑなる　千蔭
ちりのよの人としらしなはせを葉に雨のおとさく秋のわはれを　春海
秋時雨　しくれつゝふかくなりゆく山里の秋のけしきそわはれなりける　蘆庵

小鷹狩　あたしよと思はゝたれもうつらふす花野をのみやかりに見へき　仝
眞萩ちりを花みたれてかり人の袖ふきかへす秋のゆふかせ　春海
くるす野やあしたの風もえやふさの手むなれにちる秋萩の花　千蔭
朝露にむかはきぬれてうつら鳴うたのおほのをわくるかり人　仝
かりころも萩にするまて日くらしに鶉ふす野をあさる宮人　契冲
駒迎　からにしきたちの〻駒乙東路の千さとの秋の花やわけこし　千蔭
ふみならすせたの長橋霧はれてなみのうへゆく望月の駒　春海
立まちの月にはひて花薄はさかのみうまひきのはるみゆ　蘆庵
駒引　あふさかのせきのはしりゐいとはやもかけみえそむる望月の駒　契冲
ことのねは關のわらやに絶ぬれと今もひかるゝきりはらのこま　長流
八束穗のはさかの駒をゆたかなる御代の千秋のためしにそひく　千蔭
雲のうへにみまきのこまをむかへ來てけふ引わけの使たつらし　春海
關駒迎　むかふとて關こえくれは望月のこまよりもるゝかけそさやけき　蘆庵
ひくこまもおなしこよひの望月にあまのとさゝぬあふ坂のせき　契冲
あふ坂をけふこそこゆれ都までいくへゝたてしきりたらの駒　千蔭

秋部下

月

心ある人とむかしにいてはてゝひとりのこれるあきのよの月　契冲
大舟に小舟ひきそへますかゝみすみたかはらに月をみる哉　眞淵
上津ふさの海よりいてゝゆく月のとまりとふしの高ね也けり　枝直
なかめきて老となりにしらちみさへわするゝ秋のよはの月哉　千蔭
おのつからすまも明石もれもかけにうかふは月のよころとけり　春海

秋月明

くもをこそあらしもはらへ天原はしさへきえてすめる月かけ　契冲
うす墨にかけるもしすら老のめにみゆはかりなる秋のよの月　蘆庵
雲つきてこよひの月のすみたる河よろつ代かけてにこるせそなき　枝直

秋月添光

秋の水天の川より先すみてあらふか月のひかりまされる　長流
あつめきて秋にやてらす月ゝのよひあかつきにかけし光を　蘆庵
おは空のみとりとていつもかはらぬを月のひかりそ秋はかなしき　土満

待月

花にあかてうちむかひしも出かての月にはかこつ秋の山のは　たみ子
いつる月いかにすむらん雲はみなはらふ高間の山のあらしに　春満

對山待月

久方のあめのやへ雲はれなゝん今宵よりをちはよしくもるとも　春郷

高山待月

いてやらぬ月まつとては月よりもまつ山のゑそなかめられける　宣長

海上待月

かつらきや心にかゝるくもきえてたかまの峯に月そまたるゝ　春満

對水待月

夕れまくれしほさしるは大淀のまつにつへなき月のかけ哉　宣長

待見月

いつしかと月まつほとの池水にまつすむものゑこゝろなりけり　春海

見月

住よしの松のこのまにまちかねていてみのはまの秋の夜の月　契冲
なかしとて秋をはたれかいとひけん月に心もなくさむ物を　春海
てる月ゑあやしきものかかなしとも面白しとも人にみえつゝ　千蔭
てりわたる月をしみれは心さへいたりいたらぬうみ山もなし　筑波子

秋見月

秋の月れもふ人にもあらなくにあひみそめてはいこそねられね　長流

年〻見月

をゑすての山にはかけしよもきふの月になくさむ秋のこゝろを　枝直

毎秋見月

なからへて又此秋の月見れは月にみらるゝこゝちこそすれ　仝

深夜見月

秋ゑにおもなれにける月といへといつもうひなる心地こそすれ　筑波子

夜〻見月

心ある人いかならん秋の月しらぬあはれもふかき夜の空　宣長
てるをめてくもるをゝしみよひ〳〵の月に心をつくすころ哉　春海

連夜見月　入山のよひ〳〵とはくなるかうへに光さへそふゆふ月のそら　蘆庵
毎夜見月　いねかてにいくよを眺めなれぬらん物おもふ身そ月にしたしき　長流
終夜見月　むさしの海おきよりいて〻秩父嶺にわたらふ月のあかすも有哉　千蔭
閑見月　物おもふ袖ならなくにおのつからあかつき露を月そとひける　仝
獨見月　ひとりねていりかたちかき月見れはよひのあはれは數ならぬ哉　宣長
夜よしとて人まつへくもあらなくにひとりそみつる山かけの月　蘆庵
庭のおもにかきしくまさこ新らしきこよひの月も我のみや見む　契冲
思月　哀れとは月もしらなんしるへなき闇にいくよかたとも來し身を　春海
翫月　秋の月あくへきものか朝かほのさくまてこよひおきあかすとも　枝直
てにはなほとられぬものゝ玉とみてもてあそふへき秋のよの月　契冲
なかむれは空に心のうつるかなくもらぬ月やかゝみなるらむ　宣長
秋の月さてもやかけのさやけきと木下露にうつしてそみる　蘆庵
秋のよの月のひかりにみかゝれて心さへこそすみわたりけれ　千蔭
杯も千たひめくるやいつるよりかたふくまての月をうかへて　仝
まちをしむこゝろ〳〵をよもすから月にいひつゝめてあかす哉　たみ子
終夜翫月

嶺上翫月　かたふかて有明の月の月かけを山のつかさにかくみてしかな　仝
翫明月　木〻の葉のきはみきはまぬ色々もわきてそみゆる秋のよの月　蘆庵
池上翫月　おほ空にひかりみちぬる月をしもわかものにみる池のおも哉　千蔭
馴月　いつの秋もおもひくまあき我身とはなれみし月そ空にしるらん　蘆庵
夜〻馴月　おきそむる露に待えしゆふへより霜となるまてなる〻月かも　千蔭
毎秋馴月　秋をあまた馴てむかへはうきふしも嬉しきふしも月そしるらん　仝
未出月　いてかての月まつたひにれもひそふ山のわなたの里にすまゝし　春滿
月初出　かけうすき入日の岡の木のまよりひかりをつきていつる月かけ　契冲
むさしの〻を花か露にかけみえて月もはにいつる秋のよはかな　千蔭
月初昇　まちもあへす月や高ねをとなるらんくるれはまとに影そさし入　枝直
初昇月　たちのほる雲におくれて山のはにかつみえそむる秋のよの月　春海
漸昇月　立ならふしつえをくまとみるかうちに松をわかる〻みねの月影　枝直
停午月　空の海みをのしるしもあらなくになかたをこゝとすめる月かけ　仝
たつ杉のかけへさもなし中空によとめるほとの月のさかりは　千蔭
花ならは今をさかりといひてまし秋のもなかの中空の月　仝

漸傾月　ましら鳴なしをのへの月かけもやゝこつたひてさよ更にけり　契冲
傾月　にはとりのかつしかわせのにひしほり汲つゝをれは月傾ふきぬ　眞淵
　なかめして物おもふまに白たへの袖に露おき月かたふきぬ　土滿
欲入月　みかのよのほのかに見しかけはかり山のはつかにのこる月はも　千蔭
惜入月　をしとおもふわか袖すてゝ山のはに心つよくもいる月のかけ　宣長
　まねくとも月はかへらて山のはにいるのゝすゝき袖そかひなき　契冲
　恋のみにしの山へに關すゑてをしみもとめぬ月そあけゆく　仝
入後暮月　すむ月のいりにし後も山松のこすゑにのこるかけをしそおもふ　千蔭
二日月　にしとはくとれたるいはにすめはこそ二日の月の影をしもみれ　蘆庵
三日月　村雲をつなけるいとゝみるはかりはそくかゝれる三日月の影　仝
　三日月のあるかなきかのかけさへも恋つかしや秋はことなる　千蔭
新月　みすもあらすみもせぬ程の三日月に秋のあはれを思ひそめつる　土滿
落梧新月　ちりそめし桐のひとはのひまみせて秋をことわる三日月のかけ　蘆庵
夕月夜　くれぬまはむらちる空のしら雲にまかひてみゆるゆふ月の色　仝
弓弦月　あかなくに弓張月はいりにけりいつこの山のかけやたつねん　たみ子

月盛　としといひおそしとまたん秋もなし月のかつらの花のさかりは　春海
十五夜　めなるれは心おとりのする世にもこよひの月はあかすも有哉　仝
　一とせに一よのみゝる月見れはひたすらにこそむかはれにけれ　筑波子
　秋きぬと風のつけてしわしたよりまちしこよひの月のさやけさ　枝直
　なへてよの人の心もすむ月も空にみちぬるよはにも有哉　千蔭
十五夜月　かねてよりくもりなかれと思ひこしねかひもみつる望月の影　宣長
　老か身は又こん秋もたのまれすこよひの月そいのちなりける　自寛
　わかことく今宵の月にあくかれていくさと人かいをねさるらん　春海
　ふたつなき月のみ影をわたつみのとつ國かけてこよひめつらし　千蔭
閏八月十五夜　ひるみれとあかぬ玉河清きせの涙にも中の月すみわたる　美樹
　山のはゝたゝよのつねの夕へにてこよひの月そとしにまちける　契冲
　玉くしけあくるまてみんまそ鏡みかけるあきの望の月かけ　千蔭
　こよひともしらてこよひの月見は驚かるへき影にやはあらぬ　春海
　あたなりと身をはおもはし澄月の秋の一夜を千よとおもひて　枝直
　ひとゝせの月のさかりは秋の空秋はもなかにしくかけそなき　庵庵

十五夜翫月

めくりあふ秋のなかはの空の月てりみつひかりいつにくらへん　仝

八月十五夜翫月

をすまけは月のかつらのおひ風もまほにかをるとおもふよは哉　千蔭

くもりなきこよひなからにいく千秋みるともあかし望月のかけ　仝

よのつねのもちをもゝちの光にも秋のひとよの月やまさらん　蘆庵

此世にてあかれやはする八十ちまて秋のなかはの月はみつれと　枝直

かきりなき千〻の秋にもあかれしと一夜を分て月のすむらん　春海

三五月正圓　閏八月十五夜

まさか木にかけし鏡の神よゝりくもるともなきもち月のかけ　千蔭

かけふれは秋のなかはゝ過ぬれとこよひをいつの月とかゝみん　契沖

立待月

さかさまにとしやはゆく天河秋のなかはにかへる月かな　仝

居待月

あかすみし花はくれぬる秋のゝになほたちまちの月も出けり　宣長

臥待月

妹とわかならひねまちのいにしへをおもひいつれは月も出けり　蘆庵

廿日月

月やすむくもりやすると笛竹のふしまつほともねかたかりけり　仝

有明月

杉立る山のはつかの月かけのさしのほるほとそしつけかりける　千蔭

朝かはのやゝ咲出し露のうへにしはしはやとるありあけの月　仝

朝鳥の羽風にはるゝ薄きりのたえまにみゆる在明の月　仝

下弦月

過ぬるもなほおよはぬに似たる哉ゆみはり月のありあけの空　長流

十三夜

こんとしのも中ならては長月のこよひはかりのかけをみましや　たみ子

異國の人にみせはやたくひなきわかうらやすの長月の月　枝直

久かたの月のかつらの花みれはうつろふあきにならゝさりけり　春海

名に高き望にはくもる年もあれとすめるはみよの長月の影　蘆庵

古へのはくやの山にめてませし月もかくこそさやけかりけめ　千蔭

十三夜月

くれはてぬ空に待えてよはさへも長月の月のかけそのとけき　仝

こよひはともろこし人もあふきみんとよ秋つすの長月のかけ　蘆庵

長月やもちに一よをへたてゝもさやけきかけは世にみちにけり　枝直

をりしもあれ月にしらふるとのをの數もこよひの空にかよひて　自寛

九月十三夜

まちもあへす夕くれかけて長月の月もおくあるかけのゝとけさ　枝直

おちくりをひろひてみれは十あまりみつのこよひの月そ隈なき　自寛

あふきても猶あまてらす日のもとに今宵名におふ月よみのかけ　春満

秋のよのはから〳〵と天の原てる月かけにかりなきわたる　眞淵

長月のこよひの月もあるものをたくひなかはとおもひける哉　宣長

十三夜翫月

一とせの花のとちめとさく菊にこよひの月をたくへてそみる　春海

九月十三夜翫月

花さかりふゝめるもかつ残れりといはんはかりの長月の月　枝直

閏九月十五夜

思ふとちまかきの菊を折かさし月みるよとゝふけすもあらなん　春海

月前星

おもひのこす心のくまもなよ竹のよを長月のあかぬまとゐか　枝直

秋の日をかそへそへつゝいとゝよの長きにあかぬ月のさやけさ　仝

月明星稀

秋の日のくるゝもまたて澄のはる月におもなきゆふつゝのかけ　仝

雲間月

さしのはる月にはさすかあらそはてやかてきえゆく夕つゝの影　千蔭

千さとまてくまなかれとやすむ月に星の林のしけらさるらん　枝直

すむ月にいとはぬほとのうき雲はかせのゆくへにまかせすも哉　仝

雲間微月

行雲も秋のさかとてはやけれはしは〳〵みする月のかけ哉　千蔭

見月厭雲

雲間よりはつかにみるもおはかたの月にまされる秋のよの月　枝直

見月遇雲

天の原八重棚雲を吹わくるいふきもかもな月のかけみん　眞淵

狂雲妬佳月

村松のこのまの月をあやにくに立へたてたるうき雲の空　蘆庵

月はまた箱のうちなる鏡山あらしにくものひらくをそまつ　契沖

なかめつゝ月をねたしとみる人のこゝろやうける雲となりけん　千蔭

月前雲

月清し風なたゆみそかゝるよはかならす雲のねたしとそたつ　蘆庵

たかさとの月のくまとかいとはれんと山のすゑにかゝる白雲　枝直

さためなき秋のみ空の雲さへもこよひは月にこゝろありけり　千蔭

心あれや月のゆくへのうき雲もさゝらぬかたにはらふあき風　蘆庵

雲収月明

むら雲のちりのうかひの殘りなくひかりをつくす秋の夜の月　契沖

雲もなくはれたるよはの風の上に月はありかをさためてそすむ　長流

夜雲収盡月行遇

ちりはかり雲の涙なきおはの空の月のみふねはこくとしもなし　千蔭

雨後月

ふる雨はあとなくはれて庭はたゝ月のひかりにぬるゝわさちふ　宣長

もりかはる月をみよとやさよしくれふるさ軒はに音つれてゆく　蘆庵

月前時雨

風はやみしくれなからにゆく月の空さためなきむら雲の影　仝

すむ月のあたりをよきて一しくれ露おきわたすよひの浮雲　千蔭

霧間月

枝かはすみねの桑子のまゆこもり霧まの月もいふせくそみる　契沖

霧中月

深きよのあはれはそへつうすき霧にひかりをさまる山のゑの月　春海

きりの海を出來る月や水底にしつめる玉のかけとみゆらん　仝

月前霧

はれのこるくまをたつねて木隱の霧にゝはへる秋のよの月　蘆庵

風前月　空の海によはのあらしはにしふけと月のみ舟はさはらてそゆく　契冲

月前風　露はらふくさ葉の風を山のはと月影をしむ武蔵野の原　宣長

　　おのつから月のひかりとなりにけり雲吹はらふよはの秋かせ　春海

　　吹みたる露のゆかりに月かけもあたの大野のよはの秋風　宣長

　　ふくからにいとひし雲の跡もなし風こそ月のひかりなりけれ　契冲

月前松風　ふくろふの聲の外なるおとつれや月にすみぬるのきの松かせ　蘆庵

野分後月　さよふけてさやけき月をみつゝをれはのきはの松に秋かせそ吹　春郷

月前露　よもすからあれし野分の雲間にも月はしをれぬ有明の庭　宣長

　　山のはゝまたとはきよもいく度かあらしにをしむ露の月かけ　仝

　　こよひしも月やとれとやかやか軒草のまかきも露おもるらむ　春海

暁月　玉すたれかゝくるやともなにかせんのきはのつたの露の月かけ　千蔭

　　山のはにあかつき月をまちつけてねさめかひある秋のよの空　春満

　　暁のはねかく鳴のたちとさへはのかにみゆる月のあはれさ　千蔭

暁月帰雲　さやかなる暁月にうかれ鳥つけすはかゝるかけをみましや　蘆庵

　　雲たにもこゝろあらなん山のはにいりかたちかきもちのよの月　千蔭

暁更月　かたふける影をあはれとみつる哉身のたくひなる山のはの月　春海

　　遠方のふもとのさとの鳥のねにあらそひのこるやまのはの月　千蔭

深山暁月　たひならてみるよしもかなわしからや八重山てらす有明の月　仝

遠山暁月　まちとはくむかひし山のかひもなくいつれはしらむ東雲の月　蘆庵

嶺上暁月　はてなしとなにおふのへも秩父ねにかくるゝ月のをしくも有哉　千蔭

海邊暁月　わたつみのはてなき波も秋のよのかきりをみせてしらむ月影　蘆庵

海上暁月　いにしへもかくや有けん波にいるむろつのおきの有明の月　千蔭

海路暁月　こきいてゝ涙のまくらに有明のかけもひとよの月のわかれち　宣長

舟中暁月　ゆく舟はきりたちこむる波のうへにはの〳〵のこるる有明の月　春海

河上暁月　夜やふかきなかれやはやき有明の月もおちゆくよとの河舟　仝

霧間暁月　秋きりにゝほへるかけのうすらくはしらみやすらん有明の月　蘆庵

田家暁月　さをしかのおとろかさすはわか門の稲葉に落る月をみましや　千蔭

社頭暁月　ます鏡神にたむけて住吉のきしにむかへるありあけの月　契冲

暁月入窓　有明の月さすかたに窓をあけてねさめうからぬやとゝなしつる　蘆庵

明月如晝　かくはかりてる月のよをひるとしもまかはぬ人やめて明すらん　春満

秋月如畫　かきわたすかすもあらはにしら露のひるまとみゆる秋の夜の月　宣長

秋夜月　あしひきのとは山鳥もひるとみてわかれぬはかりすめる月哉　契冲

世のとはわかぬならひのはにふにもみちたらはせる秋のよの月　春海

すむ月の入をかきりとおもはすは秋こいをぬるよはやなからん　千蔭

晴夜月　霧もはれ雲もきえつゝ心さへかよひてみてるよはの月かな　契冲

陰夜月　おほ空をやへ立こむる霧の海に月のみふねの行へしらすも　千蔭

深夜月　もれいつる月やいつことゆく雲にあからめもせぬ秋の空かな　春海

いと竹のこゑしつまりてよをふかみ都のそらに月のみそすむ　千蔭

深更月　ふけゆけはてりこそまされ秋の月なと宵のまにともまたれけん　枝直

夕月　ふくるよのしけき葎のひまをとめてさしいる窓の月そ露けき　千蔭

暮天月　萩原や庭のゆふ露うつろひてくれあへぬかけは月にそ有ける　眞淵

山月　にし山やみねのもみちのゆふこえにてりかはしたる月のかけ哉　千蔭

ねくらとふ鳥のはかせに霧これてほのみえそむる夕月の影　仝

木の間よりもるゝゆふへの月見れは先心こそときめきにけれ　春海

塵ひちのなれる山より出てなとかはかり月のかけはすむらん　仝

秋山月　みたからのはらふ荷前の箱根山よるもこえあん月のさやけさ　枝直

開山見月　月夜よしよゝしとこゆる旅人むくらふの山のなをやたとらん　蘆庵

外山月　すみまさるこゝろも空も時は秋ところはやまのおくの月かけ　宣長

深山秋月　秋の夜はよしのゝ山もさくらとはいはてこすゑに月をみる哉　仝

山端月　立まよふ雲ははやまにをさまりてみ山の月にくまたにもなし　千蔭

山月明　やと近きとやまの杉をしるへにてまたれしかたに月こ出にけり　枝直

嶺月　山のおくは松の嵐も瀧のおとともひかりとなりて月そさやけき　宣長

やまのはゝ雲もかゝらて松はかりさはる木のまの月のさやけさ　仝

から人もふりさけみらん有明のねの雪にさえたる秋のよの月　枝直

うき雲のれりしつまれる時まちてやゝすみのほるみねの月かけ　仝

月出山　たちまよふ高ねの雲も心してれりしつまれるよはの月かな　千蔭

床の上にかたしく霜とかつみれはまくらの山に月そいてぬる　春海

山のはをかつ出そめし月かけのみやこのよもにはやみちにけり　蘆庵

嶺月照松　千よのかけよるもくもらすからさきの松のかゝみの山のはの月　仝

谷月　すむとたにさしもしられぬかけなれや谷のとはその秋のよの月　春満

淵底月　千尋ある谷のしたゆく水底もてらしのこさぬ月のひとゝき　枝直

杜月　あふきみれはいやすみまさる月よみのてりくる影も秋やとなる　春満

松間月　みる人の心もちゝにみたれけりしけきしのたのもりの月かけ　たみ子

枝しけみさはる月みて月のよはさくらをいとふみよしのゝ山　宣長

松間月　吹風に木のまの月はみたるれとわれこそくたけ秋のこゝろは　契冲

都にも松の木のまの月みれはみ山のあきのこゝちこそすれ　眞淵

霧はれて松の葉とにおく露を玉とみせつゝ月そもりくる　千蔭

武隈の二木の松にかけさはる月はみきともいかてかたらん　宣長

月照松　山松のしつえよりまつほのめきてこすゑをのぼる月そさやけき　千蔭

色かへぬかつらやえたをかはすらん月もたかねの松のこすゑに　枝直

松かえにかゝれる月のかゝみには君か千とせのかけそみえける　たみ子

月前松　陰たかみさはるものからみる月のけしきをそふる庭のまつかえ　宣長

てる月のくまともならす峯高みさやかにみゆるまつのむら立　古道

くるとのみいつしか月にいとふらん木高かれとてうゑし小松を　枝直

松月幽　くまなくてみしはものかは松陰にひかりともしき月のあはれさ　仝

松月夜深　山松の枝をはなれてすむ月に秋のよふかきほとそしらるゝ　自寛

月前苔　故郷のかやかのきはのこけの露あはれいくよの月やとるらむ　千蔭

月前木　三日月も桐のひと葉のゆふ風にきはひてれつる初秋の空　宣長

いりかたになる月かけはさしなから片枝をくらきをふの浦なし　仝

月前杉　三輪山をしかもてらせる月影にかくさふへしや杉たてるかと　たみ子

月前柞　かけやとすはゝその宮のうすきこそ中〻月のにはひなりけれ　仝

竹間月　くれ竹のよゝのしら露風こえて葉分の月のかけそこはるゝ　宣長

野月　くれたけのはすゑにおける露なからうつろふ月の影そこはるゝ　千蔭

さをしかの鳴ている野の霧はれてを花も月もはのみえにけり　枝直

よのつねのたくひとゝみし名にしあふ玉のよこのにすめる夜月　春海

秋の月あくまてみつゝむさしのゝ廣き惠をあふくたみくさ　千蔭

秋のゝの月かけきよしいさこともみくさかりふきやとりて行ん　春郷

やまのはに夕ゐる雲とたちはなれすそのゝ原にすめるかけ　古道

野外月　月にふすつけのゝしかのよゝの夢さめても霜とみゆるかけかな　契冲

こ萩さく野をなつかしみこかくれて月もうつろふ花すりの袖　枝直

枯野月　天つたふはとともはるけきむさしのにみてたにあかぬ秋の夜の月　仝

野月明　秋のゝの千くさの花の露よりもやとかる月のかけそ身にしむ　自寛

野月露深　さやけさとひるのにしきとみやきのゝ萩かえてらす秋のよの月　宣長

野徑月　むさしのや露わけゆかんかたもなし草はみなから月になりつゝ　千蔭

千くさ咲野路の露原分くれて袖にともなふよはの月かけ　仝

野亭月　のへのつゆわけすはしらし心なき袖にもかゝる月のあはれを　宣長

野宿見月　ねさめするすゝのしのやのしのゝめに露れく袖を月そとひくる　仝

行路月　秋のゝにを花さかふき一よねて千くさにゝはふ月をこそみれ　千蔭

月夜よしひるまとゆかし露分て袖にかけみるのへのかよひち　宣長

徑月　くまとみし蔭もまはらに月そすむ筒ゐにかよふ桐のした道　枝直

原月　露しけみ草葉みなからすむ月のやとりのこさぬむさしのゝ原　千蔭

はりまちやゆふ霧はれて久かたの月をしてれりいなみのゝ原　眞淵

岡月　むさしのゝむかひのをかへ秋更てちるやを花に月そかすめる　千蔭

岡の名のゆきゝそしけきさと人もさやかなるよは月みかてらに　宣長

樵夫歸月　秋ふかみゆふ露おもるしひしはに月かけそへてくたるやま人　千蔭

杣月　しからきやまきの杣人くれまちてくたれはのはる嶺の月かけ　仝

橋月　すむ月のよとの繼乙し百よつさかくてもみはや波にてる影　春海

たとへけるそのれもかけの戀しきに月や昔のまゝのつきはし　宣長

東路やひく駒ならぬもち月も長きよわたるせたの長はし　仝

月照古橋　橋乙しらくちにしのちも月のみそ昔なからにすみわたりぬる　自寛

水中月　しら涙に玉もかりけん人はいさ月すみわたるまゝのつきはし　枝直

水上月　ひさこもてくまとくみてん濁なきせかゐの水にうかふ月かけ　千蔭

うき霧はあとなくはれてふくるよの月かけけふる水のをちこち　蒿蹊

水邊月　たつしきのかけはかりをやくまとみん野澤の水のふかきよの月　眞淵

水鄕秋月　おは空にすむかけよりもめに近き水にて月はみるへかりけり　たみ子

月照流水　玉しまやくもりなきよは水の面に川の名うかふ秋の月かけ　宣長

月照水　とね川のそこはにこるると名には立としつめる月の蔭はすみけり　枝直

河月　秋の水空もひとつにひろさはゝとわりにこそ月も澄けれ　長流

行水のいつこはれとかつら河なをむつましみ月やとるらむ　千蔭

久かたのなかなる河にさをさしてゆくや空行月のともふね　宣長

大空に舟もゆくかとれもふまて月にさしのぼる秋のかはつら　古道

あひにあひてひかりも秋のにし河や流るゝ月のかけのさやけさ　枝直

くまなしと空にみしよりさやけさはさよき河瀬をてらす月影　自寛

河上月

さゝれ石もひらふはかりそ玉とちる千くまの河のあきのよの月　契冲

河邊月

みよしのゝさゝ山風に雲たれてかはかときよくすめる月かな　仝

月照河水

むさしのにくもをさまりてさゝれ石も月にみかける玉河の水　仝

月光似氷

すはのうみの氷のはしも秋はまたれもひかけぬを渡す月かけ　契冲

河月似氷

みなれさをさせとくたけぬ氷こそ河瀬をてらす月には有はれ　千蔭

瀧月

はつせ川はやみ早瀬もこほるかなみなそこかけてすめる月かけ　蘆庵

瀧邊月

たつねてもよるこそはみめ木間より月もれちくる瀧のしらいと　宣長

月照瀧

いくちゝの玉かちるらん秋のよの清瀧川のなみにみる月　千蔭

月照瀧水

御幸せしふるの瀧つせふりぬれと月のみかけは今もやとれり　仝

池月

石はしる瀧つしら涙はやけれと月のかゝみはかけとめてけり　たみ子

てる月もかけみる池もいくそ秋かたみにかくてすみかはすらん　千蔭

いとゝしくつるさのいけの草葉には秋のしもかとみゆる月かけ　宣長

池月明

池水のそこのさゝれもかすみえてよとめる月のかけそさやけき　千蔭

池月久明

としふれとくもらぬ池の鏡には月のおもわもれいせさりけり　仝

澤月

くもりなき月をやとして廣澤の水のこゝろも秋やすむらむ　春満

江月

もく月にさはらぬはとはうき雲のかけさへきよきのへのさは水　宣長

あたひなき玉江のあきのなかめ哉くもらぬよはの月をやとして　仝

江上月

波にあらふひかりを霜とみつるかな太刀つくり江の秋のよの月　春海

都鳥うきねのかすもあらはなる難波ほりえの秋のよの月　千蔭

江山夜月明

ほり江にはよりくる涙の玉敷てくもらぬ秋の月をまちけり　枝直

山かけもくまなくてらす江の月にのこりかねたる水のうき霧　蘆庵

海月

まつらかた山なきにしに行月をはるかにひたす冲つしらなみ　仝

海上月

しら涙のたつもいとはてありそ海をわたるゝ月のみふねゝけり　たみ子

海邊月

わたの原山のはならていつるようこすゑのくまもなみの上の月　宣長

入日さすとよとた雲もあかしかた心のうちにかなふ月かけ　契冲

みつしはのひるとやいはんをしか鳴かしまか崎の秋の夜の月　枝直

月滿海上　春海

あし火たくけふりを空に吹けちて月をみせたるうらの秋風

沖月　蒿蹊

海原やかけも千さとにみつしほの月をよせくる涙のさやけさ

濱月　長流

とほつ人まつらのおきの月の舟ひれふりとめぬかけそわけゆく

こゝを世に月もすむちん在明の濱のまさこのかすみゆるまて　枝直

磯月　春満

おきつかせよせくる涙の月かけにいとゝしくらの濱そくもちぬ

島月　宣長

うちよせてゐるゝいそへの眞砂にも殘してかへる涙の月かけ

雲ゐるゝよるは出るをまつしまや入をゝしまのなみの月かけ　春海

てる月のあかしのとなみをさまりて夜舟こき出るかこの島人　蔭庵

松しまのこすゑを月の出るよりなみにきえゆくあまのいさり火　仝

崎月　千蔭

海人ならぬ袖もひちけり玉もかるいらこかさきの秋のよの月

湊月　仝

あはれとてよな〳〵月もやとるらんたか涙せく袖のみなとに

みなといりのあしわけ小舟たとらしな雲もさはらぬ月の光に　宣長

梓弓いるさの月にまとかたのみなとのすとりたちさわくみゆ　蘆庵

湊邊月　枝直

おは舟のよするみなとの秋のよはまほにそ月もすみわたりける

浦月　仝

いくへかもつもれる雪とみくまのや月おもしろき浦の濱ゆふ

浦秋月　宣長

あまの子かみぬめは浦の名のみして月にれきゐる涙のよる〳〵

波間月　千蔭

繼はしの百よつきてもみてしかなまゝのうらわのなみにてる月

舟中月　春海

月みつゝ難波のあしをかりそめのあまとなるまて浦なれにけり

あしかちるなにゑれもはす難波なるみつの浦わの月をみつれは　たみ子

月夜舟　宣長

あかしかた雲もなみちのすゑかけて浦の名ひろし秋のよの月

海路月　千蔭

うらちかきすまの關守すまぬよも涙まの月そ人をとゝむる

海路見月　仝

さをさせゑともになかるゝ月のかけ入をかきりに舟ははてまし

水路月　宣長

てる月のかつらのかけを行舟にちるゑ花かもさをのしつくか

河なみに月のゆくへをしたふよはつなかぬ舟もうれしかりけり　春海

あこかれてよはにや出しみなと舟からろのおとの月にきこゆる　蘆庵

はるゝよの涙にうかふる河舟は月のゆくへにまかせたらなん　春海

わたのはら傾くかたにさえてゆく舟うらやましふくるよの月　宣長

あかしかた夜舟こき出てこゝろさへつなくかたなき月をみる哉　長流

よとゝもにさをさすかたへ流つゝとむれはよとむ水の月かけ　千蔭

月やとる此川水にふねうけてさをもとりあへすゆくこゝろかな　枝直

湖上月　かたゝ舟いさこきいたせいさなとりあふみの海のなみの月みむ　仝

湖邊月　みる人もうち出の濱のゆふなみにひかりはのめく秋のよの月　宣長

湖上月明　あふみのうみ人十の湊もてる月の一つひかりのうちにこそみれ　蘆庵

海人見月　もしほくむ手まうちやめてあま人も先さやかなる月をこそうれ　仝

海人詠月　あま人も空に心やひくあみの先めにかゝるなみの月かけ　枝直

花洛月　みかきなす玉のうてなもつりとのも月のためなる都なりけり　千蔭

月にとひ月にとはれてこよひしもすさひれはかる都人かな　春海

都月　やちまたにすみもく月の玉すたれこよひかゝけぬ高殿もなし　仝

山さとは雲きりふかし秋のよの月もみやこそすみまさりける　宣長

すむかけも世にみる人もところえて月のみやこやこゝろとなる　春滿

禁中月　あらし吹おとにかよはぬ雲の上はいかにしつけく月のすむらん　仝

禁庭月　はきのとの露をたつねて玉たれのをすのひまもる秋のよの月　枝直

社頭月　うめつはに春のかをりやのこるらんこすゑにゝほふ秋のよの月　仝

玉みかく月のひかりも神さひて神代おほゆるもりの榊葉　宣長

秋の月ことうらよりもすみのえはかみの御かけや空にそふらん　仝

古寺月　鐘のおとにくもねにすみてをはつせの山風ふくる秋の夜の月　仝

人すまてあれ行寺の軒はもる月のひかりや法のともし火　蘆庵

よそよりもふけゆくかねの聲すむや月のいるさのにしのおほ寺　千蔭

ねさめしてとよらの鐘におとろけはかつらき寺にかゝる月かけ　契冲

蕭寺月　いらかくちとはりやふれて御佛のみかけあらはに月そさし入　蘆庵

山家月　秋のよの月きよけれはなほもあらす出てこそみれ杉たてるかと　眞淵

たのみつる身の隱れかの松さへも月のためにはいとはれにけり　枝直

松杉のこのまをもりて山まとにかつ〳〵月のかけそさしいる　蘆庵

さをしかの籬になるゝやとの月かくみんとてそ世をはのかれし　千蔭

山家秋月　かくてよを秋のすさひと人やみん月ゆゑ山にすみなれにけり　春海

山のおくにたゝわれこそと思ひしになほすみまさる秋のよの月　宣長

山居月　さひしさにたへてはよもと思へとも月すむころの秋のやまさと　蘆庵

花のゝちとちてにける柴の戸をふたゝひあけて月をみる哉　たみ子

かくてのみ月をも友と住なれんふもとのちりの世をとのかれて　春海

山館見月　人とはぬみ山のいほの秋はたゝ月こそともとすみならひけれ　仝

田月　みわたせはさやかなりけりを花ちるしつくの田ゐの秋のよの月　春郷

おきわたすたのもの露もふかきよの稻葉にれもる秋の月影　宣長

白露のおくてのはなみよる〳〵は月のかけこそもりあかしけれ　千蔭

田家月　かけきよみたのものすゑに庵みえてともし火くらき秋のよの月　宣長

かりてほすかとたのいねをそのまゝに敷てや月をめて明すらん　枝直

田家見月　山田もるかりほにかくるこもすたれおろすよもなく月をみる哉　契冲

雞聲茅月　秋月　をしねかるたふせの秋の月のよにみやこの人をとゝめてしかな　千蔭

閑居月　かやか軒にかたふくよはの月さえてとりのね寒し霜やれくらん　枝直

閑居見月　つたかつらはひゝろこれる軒はよりさす月かけも紅葉にけり　千蔭

閑中月　たれかしるはらはぬ苔のゆふ露にうつろふ月をよたゝみんとは　仝

閑閨月　木のまよりはの見えそめて山かけの覓をつたふ月のかけ哉　仝

幽栖秋月　おきあまるつゆをよすかに月そとふ蓬かねやのあれまもとめて　枝直

れもふ友なしとないひそむくらにもさゝらす月の影はとひけり　春海

荒屋月　あまたとし月を我のみなれきつゝよその秋をはとはんともせす　千蔭

いにしへをしのふの露にかけとめて月のみすめるならの故郷　仝

草庵月　露しけきくさのいほりにさし入てわかすむ影も月にみえけり　宣長

庭上月　みるまゝに庭のあさちのよはの露袖にもかゝる月のかけかな　仝

月影滿屋　なかむとて立ゐにそはるかけならてくまこそなけれ月のした庵　枝直

秋月入簾　月清みをすのうちとのへたてなくふたへに松のかけそうつろふ　蘆庵

かすむよのはるれはえつゝ玉たれのをすもる秋の月はのとけし　千蔭

くまなくてみるにまされる哀れさにわさともおろすをすの月影　枝直

山月入簾　山はまた出もはなれぬ月かけをすこしにうつす松のむらたち　蘆庵

ふる雪にかゝけしときく玉すたれさなから嶺の月をみる哉　たみ子

をすのうちの空たき物や山のはの月を待とるくまには有らん　千蔭

窓中月　よをふかみまとのともし火消はてゝさしいる月をみそめつる哉　仝

井月　くむ袖にくたけもはてす月かけのあとよりうかふ玉のゐのみつ　蘆庵

故郷月　すたれたえまきのとさゝぬ故郷はすみところともみゆる月哉　契云

ふるさとは月のかけさへやつれけりみる人からの秋のなみたに　宣長

日にそひてさとはふるえの萩の露もとのこゝろに月はすめとも　枝直

故郷はいたゐのしみつうつもれてしのふか露に月やとりけり　春海

里　月　ふるさとの月にとひきてみ草ゐし板ゐのし水さしくまれけり　千蔭
遠郷月　さとのいぬの聲のみ月の空にすみて人はしつまる宇治の山かけ　蘆庵
關　月　たちへたつ霧もけふりもはるゝよは月にみなせの里やとふへき　春滿
　　今もなほし水に月やゝとるらん名のみのこれるあふさかのせき　千蔭
關路月　涙のうへにかたふくかけをすまの關とめてもみはや秋のよの月　宣長
關屋月　相坂や杉むらつゝく關の戸は月のひかりももりあかすかな　仝
名所月　かけとめて月はいく秋すみきけんあれてよをふるふはの關やに　春滿
　　大原やをしほのし水名のみして秋は月こそすみわたりけれ　千蔭
　　はりまかたゐしまか崎にすむ月は影を波間にうつしてそみる　春海
　　こよひはも月の夜よしとよしの山はるのしをりを尋いりけり　たみ子
名所秋月　ぬは玉のくろ髪山は秋のよの月みぬほとの名にこそ有けれ　蘆庵
　　あかさりし春の海へもわすれ草かりなく秋のすみよしの月　仝
嵐山月　飛鳥川あすもきてみん秋の月七瀬のよとにかけやとる頃　春海
野宮月　山の名のあらしにはるゝ月みれはとなせの波に影そくたくる　仝
　　今もなほ神代おほゆる小柴垣月もむかしをしのひてやとふ　千蔭

住吉月　秋のよの空ゆく月もすみのえのあらゝまつはらさやにみえけり　仝
更科里月　秋ふけて月もひかりをさらしなやいく千町田にかけをわくらむ　仝
末松山月　松山やみねのこすゑの秋の月いくとし涙をかけてすむらむ　仝
難波浦月　たちかへりなにはのとを人とはゝ月のみゝつのうらとこたへむ　春海
櫻河月　みし春のをもかけかへてさくらかは秋はかつらの花そなかるゝ　仝
須磨浦月　秋の月とはにしすまはすまの浦に佗とはいはしもしほたるとも　枝直
旅宿月　行くれてやとかるくさのまくらかのこかのわたりの月をみる哉　仝
　　たひねする野山も月の都にてよるはかはらぬかけをこそみれ　宣長
旅宿見月　おくれゐてこふる袖にもやとるらんくさの枕のあきの月かけ　千蔭
月前旅　分ぬれてうかりし野路のゆふ露もくれてうれしき袖の月かけ　宣長
月前旅行　ふるさとの人にみせはやを花ふく宇治のかりほの秋のよの月　千蔭
　　あけてこそやとりとめとよもすから月みつゝゆく秋のたひ人　宣長
旅泊月　かちまくら都こひすはなほいかにわかしの月のさやけからまし　仝
月下旅泊　みし月もそれかあらぬか浦山のおもかけかはるなみのよる〳〵　仝
　　袖のうへに笘もる月をかたしきていくよあかしのいそ枕せし　春海

月不撰處　かはらめやしつかきぬたもいとたけも月に聲すむ秋のしらへは　枝直

月似雪　いつことも月の光はわかなくにみる人からやとれくもるらん　たみ子

月似鏡　なにしかもねぬよは人につもらせて光りを月の雪とみゆらん　契冲

秋月勝春花　ます鏡かけしはかりに照月のかけをうつさぬうみ山もなし　たみ子

みし花のみやこの春のにしきにもたちまさりぬるあきの月かけ　枝直

秋といへはいくよ友とみる月をあたなる花になにたくへまし　春海

紹素見月　神代よりかはらぬ秋の月をしもあたなる花のたくひとはみし　千蔭

貴賤憐月　花すりの袖につらなるつゝりさへあはれへたてぬ露の月かけ　仝

月前鶴　のかるゝものかれえぬ身も塵の世をわすれてむかふ秋のよの月　春海

浦鶴鳴月　ちまたにもよゝしとうたふ聲すゑ雲ゐに月をめつるのみかは　仝

月夜興　いとたけも砧の音もれのかしゝ月にいをねぬすさひなるらん　千蔭

まさこちの霜とみるまてゝる月に子をおもふ鶴の聲そさやけき　仝

すみのえの浦わにたちて月みれはなにはのかたにたつそ鳴なる　眞淵

あしの葉にゆふしほのほる難波かたうらわのたつも月に鳴なり　春海

ともむれてまとゐするよの月かけはとに光のそふかとそおもふ　蘆庵

月前待人　たかさともすむらんものを月ゆゑにとふやと人を待そわやなき　千蔭

うけれとも雲はとれまも有ぬへし待かひなしや月にこぬ人　蘆庵

對月待友　こはろきの鳴やあかたのわかやとに月かけ清しとふひとをかも　眞淵

秋はきの露にうつろふ月かけのかたふかぬまにとふ人もかな　千蔭

月前思友　のかれても心へたてぬ友かきはみやまの月におもひいてつゝ　春滿

客依月來　あかたゐのちふの露原かきわけて月見にきつるみやこ人かも　眞淵

里わかぬ月のたよりといひなからうとかる人のよはにとはめや　蘆庵

客伴月來　秋の夜を月にまかせてすむやとはたのめぬ人にとはれもそする　枝直

月夜訪友　松風のおとをしるへにとひきつゝくまなき月をともにみるかな　千蔭

月夜逢友　照月にわれもうかれてうとかりし友にさへこそめくりあひぬれ　蘆庵

會友見月　うきくものへたてもれかす思ふとちむかへはすめる秋のよの月　枝直

月下交友　へたてしとゝもにまとゐをすかむしろくまなき月を忍にはして　春海

月下交遊　なか月の天の足夜の月見つゝおもふともとちあそふたのしさ　千蔭

月秋友　おは空にあひもおよはぬ月をのみ友とたゝみて秋もへにけり　蒿蹊

寄月友　うるとしき友をさそひて月そとふ散こそあるしよもきふのやと　千は

月多秋友　くまもなき心のともとみる月はこゝらの秋にあかすも有かな　たみ子

月毎秋友　月はかりわれにそむかぬ友はなしくる秋とにうちむかへとも　仝

月夜聞琴　たれをまつすさひなるらん月すめるわさちかおくの露の玉と　千蔭

月前管絃　かけやとす月をさそひて松風のかよふかことのこゑのすみもく　仝

月前鐘　澄のほるかけにうかれていと竹のしらへにあかす月のこのころ　たみ子

月前遠鐘　おとろかすかひやなからん秋のよの月にねよてふ鐘のひゝきは　枝直

月前燈　吹風はねよとのかねやさそふらんさのみかたふく月はみせしと　仝

月前筏　はるかなる鐘もなにゝかまきれまし月も心もすみわたるよと　春海

夢後見月　すむ月にあはれをそへて心ある遠山寺のかねのこゑかな　千蔭

老後見月　そむくへきくまものこらぬあはらやは月にけちぬる秋の燈火　蘆庵

見月傷老　いかたしも秋行水の河よとにさをさしとめて月やみるらん　枝直

庭つ鳥犬もこゑせぬ山さとにねさめてみれは松のうへの月　契冲

昔みし月やあらぬとかこつかなれいの涙にくもるよのかけ　蘆庵

秋をへて月のあはれもます鏡わかよふけゆく影をみるにも　宣長

おいそうきうかりけるよの秋とても涙のひまは有し月夜を　仝

惜月　とひなれし袖の中にはいりもせて山のたいそく月のかけかな　仝

いつのまにかたふきぬらん出るよりめかれねものを望月の影　枝直

あはれとてをしみもあへす山松のしつえにのこるあり明の月　千蔭

獨惜月　をしとおもふれなし心の袖もかなかたふく月をわけてやとさん　枝直

殘月　朝日影さしもさやかにみし月もあるかなきかに殘る山のは　宣長

古寺殘月　あかつきをまつのとさゝてたれかみる高野のおくの有明の月　千蔭

路明殘月在月向白波沈　み草ゐしあかゐの水にうつろふもおはつかなしやありあけの月　仝

夜をこめてわれより先に朝立し人のもくへもみゆる月かけ　蘆庵

山のたをなとかこちけん西の海やさはりなみにも月はいりけり　仝

殘月掛岑　かくるへき月をゝしとやたちさへていれしとすまふ沖つしら浪　仝

暮秋月　やまとはき松にかゝりて殘る夜をしたしとてらすみねの月影　仝

暮秋殘月　霜のうへにかけはとゝめよ秋の月馴こし露のなこりおもはゝ　千蔭

月前眺望　一葉たにちりものこらぬ桐かえに在明のかけそ秋ふけにける　仝

秋の月かけしく海のしまく〳〵は鏡にうかふちりかとそみる　蘆庵

玉河や千むらいはむら手作をさらしそふるとみゆる月哉　千蔭

月前遠望　わたつみのかさしの玉かあゝちゝ島涙にかけさす秋のよの月　宣長

月前情　六田川きしねのやなきちりそめてなゝせのよゝに月もへたてす　春海

寄月情　しら鷺のつゝさゝとみしは月夜よみあはの遠山かけてこくふね　千蔭

月前幽情　とはゝやなものゝあはれをしる人に月みる秋のよはのこゝろを　宣長

ともすれは月のみかけそまもらるゝ憂をかたらふ人しなけれは　千蔭

なからへは今をむかしとしのふへきわすれかたみの秋のよの月　枝直

あゝれとやうしとやみましあはらやのしのふか露にやとる月影　春海

月前遠情　月にこそおもかけうかへ昔みしまゝの入江の秋のうらなみ　仝

象かたや秋すむ水の月かけをあまのいそやにたれかみるらん　千蔭

月前思　こよひたれ枕もとらてみわか崎さのゝわたりを月にゆくらん　蘆庵

かけはれてなにゝみすらん秋の月やみにゝものを思ひけりやは　たみ子

月添秋思　くもりなき月の鏡にうつるらんむかへはうかふ千ゝのねもひも　千蔭

對月言志　秋のよのとりあつめたるあはれさをとふにもにたる月のかけ哉　仝

月催涙　秋とにしつけき月のかけみてもくもりなき世の惠をそしる　仝

心からぬらしけるかな月みすは秋とて袖のかゝらましやは　宣長

月如舊　なに事の思ひもわかぬ袖のうへにわれやゝとせる月やゝとれる　枝直

月思古　しる人もありしにかはる老の世のむかしの友はたゝ秋の月　宣長

月前懷舊　いにしへもひとりなかめし月なれとかくやゝ袖の露けかりける　蘆庵

月かけによわたる鴈のつらみてもわか數たらぬ友そ悲しき　長流

人しれすあはれなりしもうかりしも思ひそかへす袖の月影　枝直

月契千秋　月をれもふ友こそまれに成にけれむかしの秋をたれとかたらん　春海

月前祝　ちきりおく千とせの秋のあらましも心の松にうつる月かけ　枝直

月前祝言　くもりなきためしにひくや月弓のやす國てらす萬代の秋　仝

寄月祝言　八束穂の瑞穂のうへに千五百秋國のはみせてゝれる月かも　千蔭

寄月祝國　しら菊の露よりなれし月かけの千尋の淵にやとるをもみん　枝直

月前祝君　くもりなき月のみかけに千五百秋みつはの國の名こそしるけれ　千蔭

月前神祇　つくは山千秋くもらぬ月をしも君かみ陰にたくふへらなり　仝

をとこ山神のみゆきの事はてゝ嶺さし出る月そしつけき　仝

月前述懷　くもりなき天つみ空を渡會や神代の秋の月よみのもり　枝直

ともすれは秋の露をそへてけりかたふく老を月にたくへて　春海

雁

秋なから秋の月みるよはもなし袖の露のみ時しれる身は　宣長
みる人の心なりけり秋の月ものおもへとてすめる影かは　たみ子
見わたせはほのへきりわふさくらたへかり鳴わたる秋のゆふ暮　眞淵
なかめつゝすゝろにものをおもふ哉かりなきわたる夕暮の空　筑波子
秋風に海山こえてにほとりのかつしかわせをかりそ鳴なる　枝直
やま風のさそふ木の葉とみる斗ふもとのを田に落る雁かね　春海
たかためにおのか住へき常世出てうきよをかりと鳴わたるらん　春満
秋はきのうつろふころはをしけれとかへてまたるゝ初かりの聲　契冲
月夜よしよゝしとさそふ秋風にまたすしもあらぬ初雁の聲　長流
雲のゐる山のはつかにみえそめてやかて落くるむつ厂のこゑ　千蔭
ほり江なるあしへやゝとゝさして行いまたたひなる初厂のこゑ　契冲
ゆふ霧のたえまもりくる初厂のはつかなるねもめつらしき哉　春海
故郷を秋しもかりのわかれけんくるをきくたにかなしき物を　宣長
おのかねに秋を知てやいつはとはわかねとこよの厂もきぬらん　契冲
天の海にかちのおとすゑゆふはふる風のまに〳〵厂きぬらしも　土満

待雁

雁未來

初雁

雁知秋

風前雁來

風前初雁

霧中初雁

聞初雁

曉初雁

薄暮初雁

夜初雁

嶺初雁

毎秋雁來

旅雁

旅雁連雲

雲外雁

雲間雁

風前聞雁

秋風にみねのくすはのかへる山かへるとみれはきぬるかりかね　長流
いくつちそつはさもみえぬ夕霧にきむかふかりの聲そみたるゝ　蘆庵
聲きけは先そうれしきみよしの〻田のもの厂のよりもよらすも　千蔭
きけは先老のねさめの身にしむをしらて夜寒の衣かりかね　春満
夕附日入間のかたのいはしろのほのへにねつるはつかりのこゑ　千蔭
秋風のわきて身にしむゆふへ哉はつかりかねの聲き〻しより　春海
わたりくるあはれもとに深きよの月なき空のはつかりのこゑ　春満
とひこえて今やきぬらんはつかりのこゑしの〻めの嶺の秋霧　宣長
いかにしてた〻年とのふるこゑをはつかりかねと聞はなすらん　契冲
空にゆふ草の枕もはつしものあかつきおきやわたるかりかね　長流
都をはなほたひちとやしら雲にはねうちかはしわたるかりかね　春満
空のうみやたな引くもをすさきにて沖こく舟とみゆる厂かね　蘆庵
天とふやかりの羽風にはらはれてよそのの高ねにかゝるしら雲　古道
久かたの天の八重雲かきわけて秋つしまへにかりは來にけり　土満
此の頃の秋かせさむみさをしかのつまとふなへにかり鳴わたる　枝直

雨中鴈　ふる雨にぬれぬ心もしほるゝをつはさやいかにわたる鴈かね　宣長

霧中雁　聲はして山立かくす夕きりにおもかけおつるかりのひとつら　仝

霧間鴈　かみや紙にかけるあしてと見ゆるかな夕への霧をわくる鴈かね　千蔭

山れろしとゝもにおち來てふもとたの秋霧のへにかり鳴わたる　春郷

聞鴈　忍ふらんたか玉章かゝけてこし霧たつ空にわたるかりかね　契冲

深夜聞鴈　秋のきる霧の衣の薄けれとかりかねさむく猶きこゆらし　美枝

夜〻聞雁　ぬは玉のよふけてきなくかりかねは物おもひをる我そきゝける　仝

月前鴈來　わき風の寒さよとにつれもなく人をたのむのかりは來にけり　長瀧

塵はかり雲もかゝらぬ山のはにおちくる鴈そ月のくまなる　春海

雲霧を翅の風にうちはらひ月みよとてやかりわたるらん　千蔭

望月のくまなき空に三つふたつみたれてわたる鴈もめつらし　たみ子

月夜よし夜よしとこよひかたりつきいひつきわたる鴈や幾つら　古道

月前雁　澄月にわさたかりつむ鎌くらの里わにおつるかりのひとつら　枝直

すむ月を心にしめて千〻の秋ちきりかれせぬ天津かりかね　千蔭

なはさりにたゝ一つらもみすてめや月のよころにわたる鴈かね　春満

曉聞　すみわたる月のみ舟におくれしと聲をはにあけて鴈はきにけり　春海

あくかれしかりのとこよの秋やいかに都の月もあれなるよを　宣長

有明の月まつほとをなくさめて雲ゐのかりも鳴てすくらん　千蔭

江月聞鴈　今こんといひしちきりや有明の月にきはひてわたるかりかね　蒿蹊

旅中聞鴈　おほくらの入江とよもしくる鴈の翅のかせに月すみわたる　千蔭

旅宿聞雁　なには江や浦浪かけてすむ月にかりかね遠しあはち島山　枝直

旅行聞鴈　たひの空ひとつ心にいさなかんわれもよさむの衣かりかね　長流

馬上聞雁　たひにして故郷しのふさ夜中におなしおもひか鴈もあくなる　たみ子

海上鴈飛　あかたみに朝立ゆけはとはつ人はつかりかねも空になく也　千蔭

海上雁　秋のゝにを花あしけのこまとめて空行かりの聲をきく哉　仝

海邊雁　海こしの山よりいつる白雲にはねうちかはしわたるかりかね　仝

湖上雁　海原やれき行舟のをちこちに聲をはにあけて鴈わたるみゆ　仝

水郷鴈　しほくまぬあまつみ空のかりかねもつはさしはるゝ浦の夕霧　宣長

玉つさをかけてやきつる水くきのをかのみなとのはつかりの聲　自寛

雲路行天つかりかね澄月の桂のさとになかやとりせよ　千蔭

田上雁　れちてなはいなはの雲に聲するは空にまたれし天つかりかも　枝直
田家雁　露さむき門田のをしね月てりて雁なきわたる秋のよな〳〵　眞淵
暮秋聞雁　たひにして秋もくれぬとなきわたるかりの涙やうちしくるらむ　蘆庵
霧　このまよりもり來る月も立こめて心つくしの秋のもふきり　宣長
初霧　雁の舟わたる頃とや朝なきに霧しも空の海とみゆらん　契沖
朝霧　はつきりのたちそめしより草も木も色とになる秋のやま〳〵　蘆庵
河朝霧　朝あらしのはけしき山のふもと川となせは霧ものほりかねつゝ　長流
海邊朝霧　みねはれてふもとの川と山の名のあらしおよはぬ瀬〻の朝霧　宣長
山朝霧　難波江や入江のあしのほの〳〵とあけゆく空にきりたちわたる　土滿
曉霧　朝きりにわけてくらふの山人はくれぬにかへる道いそくらし　春滿
夕霧　あさ霧のたゝよふ空にかつかくれかつあらはるゝ有明の月　千蔭
海邊夕霧　夕きりは物おもふ人のなになれやたつより袖のぬれまさるらん　蘆庵
瀧邊霧　みくまのやふけ行秋の夕霧も百重へたつるうちの濱ゆふ　千蔭
橋邊霧　霧の海おきつしはさゐ鳴ひゝき山よりおつる瀧川のこゑ　契沖
　きりこむる峰のかけはし未消て繪によく似たる夕くれの山　春海

川霧　吹しをるまきのを山の朝風にたちものはらぬ宇治の川霧　春滿
秋霧隔河　百くまや千くまの河ときりこめぬ舟わたせをと呼聲はして　千蔭
水路霧　ゆく舟はなのかにみえて朝河のあけぬや霧のまよひなるらん　春海
湖上曉霧　松かせもかきりあれとや霧こめて有明くらきしかのから崎　千蔭
霧底筏　せきこえてうちての濱にけさみれはあふみは霧の海にそ有ける　長流
海邊霧　あすか川ふちせもみえす立霧にくたす筏やいかにたとれる　春海
古渡秋霧　きりたちて空さへ海となる秋やあまのしわさのめをまとふらん　契沖
野霧　こはいかゝありそのの渡こく舟のうへにも霧の海なしてみゆ　たみ子
　百くさの花とひとつにかをりあひてこれも色あるのへの薄霧　春滿
山霧　へたてゝもあくるひかりは花すゝきはの〳〵みゆる野への朝霧　宣長
　秋といへは神のいふきの名もしるく先立そむる峰のうき霧　春海
遠山霧　海をなすきりまはのかに山みれはなも小島の松そさひしき　契沖
霧籠山　とは山の殘るなかめもあやにくにまたきくれ行秋のゆふ霧　宣長
山路霧　たちこめてうつゝのやみやたとるらんくらふの山のゆふ霧の空　春滿
　ましら鳴み谷は霧にうつもれてそはのかけ橋あやふけもなし　枝直

行路霧　いつくにか宿はすへき霧こめてやにはもみぢぬかつぬのわたり　土満
關霧　相坂やへたては山のよそめにてゆきとゝめぬ關の秋霧　宣長
關路霧深　分まよふ朝けのきりのふかみとりそれともみぢすせきの杉村　枝直
鶉中霧　もろともに立出る山の朝きりにのほりおくるゝ秋の旅人　宣長
堤霧　河そひの堤をこめて立きりにかきりもみぢぬ秋のゆふなみ　蘆庵
遠村霧　衣うつこゑはのこりて夕きりにやゝかくれゆく山もとのさと　仝
名所霧　あれはてし野へのあゝれはたちこめてたゝ夕きりの深草の里　宣長
山家霧　秋されはすみわ河へをすみそめのゆふへのきりの立そかくせる　常樹
秋宮霧　軒はよりきりたちこめて都へはいとゝむるけき秋のやま里　千蔭
霧籬　いく秋をふるきよしのゝ宮所きりのとはりにかけてしぬひつ　蒿蹊
搗衣　いかにして身のうき秋をわすれまし霧の籬は世をへたつとも　春海
あさちふやたか秋風を身にしめてひとり夜寒の衣うつらむ　宣長
谷ふかみ住さとあれや衣うつつちのむらきの峯にきこゆる　蘆庵
うつりゆく人の心をかこちつゝ月草すりのころもうつらむ　千蔭
あし曳の山こしの風おとよりも衣うつこゑそ身にはしみける　土満

聞搗衣　よもすから麻のさころも手もすまにうつや秋をまきの島人　春海
遠聞搗衣　ことなしといふめる賤かつるはみのきぬ打音もきけはかなしな　千蔭
秋來搗衣　月きよみなきゆく鴈にうちつれてきぬたの聲も高きよの空　宣長
遠搗衣　なか〳〵に哀はそひてうちもねす音はとほちの里のきぬたも　仝
夕搗衣　秋風のさむく吹ぬるゆふへよりひとよもおちす衣うつなり　蘆庵
夜搗衣　をちかたのおとものしはしは聞ゆ也近きぬたのうちたゆむまに　宣長
深夜搗衣　たひ人の身にやしむらん秋かせのさむきゆふへに衣うつこゑ　蘆庵
終夜搗衣　おと高みきくわれさへにねぬよとはしらてやひとり衣うつらん　宣長
連夜搗衣　時そとや衣うつなりくり返し賤かをた巻長きよころを　春滿
月夜聞砧　さよふけてきけゝさひしないめ人のふしみの田居に衣うつ聲　春海
よもすから萩吹かせにねぬ人をいかにさめよと衣うつらむ　契冲
きり〳〵す鳴よわり行よひ〳〵に又かしかましころもうつこゑ　仝
さよ砧ひゝきは空にかよへとや月にあはれのうちそはるらん　春海
物おもふすさひときけは月きよみたゆむきぬたもあはれ也けり　千蔭
千萬のきぬたの聲そきこゆなる都の空の秋のよの月　仝

から衣玉のこゑしてさやけきは月のひかりをうてはなりけり　契冲
つくはねのすそわの田ゐに月澄てにひくはまゆの衣うつなり　千蔭
うちかるゝ薄かるかや吹かせによそのきぬたの音そみにしむ　仝

月下擣衣

秋風のしき〳〵吹はしつのめかてもすまにこそ衣うちけれ　蘆庵

風前擣衣

擣衣郷音風

みやきの丶野分の風にひゝくらん花すり衣うちすさふ聲　千蔭

擣衣窓

手をたゆみさてもねすしてから衣たれにいそくとうち明すらん　契冲

擣衣聲幽

むしのねにまきるゝはかりさよふけてたゆみにけりな衣うつ聲　仝

擣衣寒

ふけぬるかいとゝ夜さむの袖せはきはそぬの衣うちもたゆまぬ　枝直

曉擣衣

露霜のおくらんものをあさち原曉かけてころもうつこゑ　筑波子

寐覺擣衣

あかつきの鐘にましりておとすこなほうちやまぬさとの砧も　宣長

不眠聞擣衣

旅人のね覺のさとの秋かせにきその麻きぬ今やうつらむ　自寛

擣衣驚眠

から衣ねぬよのともとうつ聲もとはすかたりのたれうらむらん　契冲

擣衣驚夢

わひ人のきぬたのおとのかよへはやさむる枕の露けかるらむ　千蔭

荒屋擣衣

夢のわた百舟人やねさむらんよしの丶さとにころもうつ頃　仝

ふるさと丶やはあれぬるよもきふにまつ人あれや衣うつこゑ　宣長

閨中擣衣

かけくらき閨のともし火さよふけてたれたか爲の衣うつらむ　契冲

隣擣衣

夜をかさねいこそぬられぬあし垣のま近き宿に衣うつ頃　春満

近擣衣

こゝもとにすまの浦浪よる〳〵はうつやきぬたも枕かみなり　枝直

里擣衣

深くさやうつらのこゑもうきよはをいかにきけとか衣うつらむ　宣長

水郷擣衣

よひつきの濱風とはくさそふらしさとも夜さむの衣うつこゑ　蒿蹊

海邊擣衣

秋ふけて月のかつらのさと人のうつやきぬたも空にすみゆく　千蔭

すまのあまのしはやき衣うちすさふ聲もまとはに聞えくるかも　土滿

あま人の涙かけ衣うつはとやめかりしはやくいとまなるらん　蘆庵

海人のすむ磯山風におとたてゝしはなれ衣今やうつらむ　自寛

島擣衣

世をうちの河風さむくふくるよにころもうつなりまきの島人　春海

浦擣衣

すまの浦やしはやき衣うつつちのれともまとはにはよは更にけり　枝直

ふくるよのとはよる涙に聲そへて衣うつなりすまのうちひと　春海

故郷擣衣

故郷とちかきよしの丶山風にひとよもころもうたぬよはなし　宣長

山家擣衣

あはれさはにひさもりかゝ妻ならしかた山里にころもうつこゑ　たみ子

瀧川に山さと人はみ丶なれてまくらやゝすき衣うつこゑ　契冲

山さとはひとのいへゐのまれなれは砧のおともめつらしき哉　古道
しつのめかかとたもるとはうたねとも砧の音に鹿そおとろく　契冲
もりあかすをたのかりほのさよ衣露まとろまぬすさひにやうつ　春海
まつ人はたひをたよりにわするとも我はたか爲衣うたまし　契冲

田家擣衣

ひんかしになかるゝ水のかなたこなた衣うつなりたま河の里　千蔭
ふけぬるか月はと山に入間路のさとのきぬたの聲たゆみゆく　仝

待人擣衣

いこま山あらし吹そふ秋しのゝさとは夜寒の衣うつなり　宣長
あしのやのなたのしほやきいとまあれやよるもすからに衣打之　土満

南北擣衣

たれきけと夜寒の衣うつたへにあはれそふらんさらしなの里　枝直
千鳥なく河風さむみ秋更てさほの山もとろもうつなり　契冲

名所擣衣

いねかねて長きをかこつ秋のよにおもひ數そふしきのはねかき　春満
かりはてゝひたもおとせぬ夕くれに田つらの鴨のとひ立なくも　土満
たひまくら夢も結はてあかさましものこひしきの聲をきゝつゝ　春海
よもすから秋の野風にちる露のかすかきあへぬ鴨のはねかき　宣長

暮秋擣衣

きけとなほものこひしきのはねかきにあはれ數そふ曉のそら　春満

鳴

曉鴨

なれてしも賤か門田のいねかてにきくやわひしきしきの羽かき　仝

田鳴

かりつくす山田のひたの繩たえて友なきしきの羽ねとさひしき　枝直

田家鴨

深草のみねのよこ雲まよふなりふしみの田ゐにしきそゑねかく　契冲
露深きゐなのふしはらたつしきの羽風に月のかけそこほるゝ　千蔭
千草さくのへのうつらの聲たてゝなくなるかたに露そみたるゝ　仝

月前鴨

かもに來て過もやられすうつら鳴のへのむかしの妹か垣ねを　蘆庵
すか原やあれしふしみのさとの名もうつらのとこにかなふ秋哉　契冲
うらかなし秋の末野そあはれなるしもをうつらの鴨音のみかは　春海
さつ人のいる野の草の夕露はなくやうつらのなみたなるらん　千蔭

野鶉

秋もやゝふけゆくのへの床さむみおのれうつらのあけはのゝ聲　枝直
たへてやは我もふしみの野への庵あらしも露もうつらなく夜を　宣長
はれやらて霧さへ秋は深くさのさとをうつらのゆふくれの聲　仝
あれまさるさとはうつらのとことはにさひしきものを夕暮の聲　枝直
涙かゝるとこやうつらと秋風の吹るのゝ江にこゑそうらむる　春満
あはれなるうつらのこゑも立そひていとゝさひしき野への夕霧　宣長

野外鶉

野亭鶉

里鶉

故郷鶉

江鶉

霧中鶉

百舌鳥　はしもみち風にみたれて散にしを枝にかへるはもすにそ有ける　契冲

九日　かたをかのそはの立木の霧はれて梢あらはにもすそ鳴なる　枝直

長月のけふのためとやきのふよりつくろひたてし菊のきせわた　蘆庵

諸人のたかきにのぼるけふにあひて垣根の菊もかさられにけり　契冲

仙人のなかれをくみて秋ことのけふ折かさすきくのひとえた　千蔭

重陽宴　さかつきはくむともあかし今日をしも待えし菊の花のむしろは　春海

宮人のかさきの菊の花の色もかよひてにほふ袖のむらさき　仝

かさねつゝくみかはすらし都にはけふ九重のきくのさかつき　たみ子

千代ふへしかさしの花の露おちてのむさかつきも菊のした水　宣長

九日菊　長月もけふにあはすはなにせんと雨をしのきてさくやこの花　契冲

くす玉のそのをぬきかへ菊の花かつらに作るけふもきにけり　長流

菊　わたつみのかさしを菊にさしそへて波を秋かせ吹上のゝま　契冲

此後の花やはあらぬきくの花うつろふからの色をたのまは　長流

けふにあふ露のこの身もいつまての契かゝけし白菊のはな　蘆庵

あたら代のたひらの宮にめてそめて菊は千卿になりにけるかも　眞淵

栽菊　おはしたゝまかきの菊になれぬれはわれ仙人のこゝちこそすれ　千蔭

菊花待開　世をいとふ人のたくひときくの花うゑて心のともとしもみむ　春海

菊有新花　下露もかをるはかりにさきなはと心をきくのうへにこそおけ　仝

菊花盛　園にまためなれぬきくのにはへるや此あきよりの千代のはつ花　蘆庵

菊久盛　ひかりなき谷ともいとしきくの花天津星かとまかふさかりは　宣長

白菊　咲しより日數はあまた過しかとうつろふへくもみえぬ菊かな　春郷

置まよふ霜はあやなしかりとてかやはかくるゝしらきくの花　契冲

初霜にきくうる市の朝からすおのれまかはぬ花の色哉　長流

紫菊　一もとをあはれとゝみよむらさきのゆかりわすれぬ菊の匂ひを　春海

菊花色〻　いつれをかあはれといはん色ことにおのか光をみするむら菊　蘆庵

菊の花千種の後のひとくさに又色〻のはなそさきける　宣長

さま〳〵の色に匂へるむらきくはよるさへみよと月やてらせる　春海

折菊　うつろはん例もさらに白菊は折ともかさへあせすやあらまし　仝

挿頭菊　世〻をへて淵となるてふ露なからをりてかさゝんませのむら菊　千蔭

なつさへは老もわかゆとくの花いさき心みにをりてかさゝむ　春海

菊露

たれもみな袖ふれてみるむら菊の露にいくらの千代かこもれる　千蔭

仙人の松のは過す谷水によはひくはふるきくのしたつゆ　長流

ぬれぬともはさし袂のきくの露かゝれはこそは香もうつりけめ　蘆庵

菊帶露

きくの露ふちを昔にかへしてやあひこしけふのかすにれくへき　契冲

籬菊露芳

仙人のうゑしまかきの菊の露わくるたもとも千とせかをらむ　千蔭

菊上霜

仙人はをりもまとはし菊の花めならふ霜はいろことにして　長流

翫菊花

此秋やかきりとおもへはいとゝしくもてはやさるゝしら菊の花　蘆庵

一とせの花のなこりとをしむまにうつろひかねて日數へにけり　契冲

愛菊

はるたては先さく梅の花よりも秋のすゑのにはふしら菊　蘆庵

きくの花おくれてさくそあはれなる秋はいつれの草とわかねと　契冲

朝菊

折のこす枝にやとかるてふのはもおきまとはせるきくの朝しも　長流

夕菊

たそかれの妹か垣ねの菊の花われをまつらん袖かとそみる　千蔭

對菊待露

菊の花さくやまかきの露のうへに月待はとも千代はへぬへし　仝

月前菊

花にあかて千代の秋をや菊の露やとかる月も契りおくらん　宣長

月さえてまれなるはしのかす〳〵にかそへそふへきしら菊の花　枝直

月夜見菊

月清み空にはまれになる星のひかりあまたにさけるしらきく　蘆庵

月照菊花

みれとあかぬにはひやけり長月のひかりそへたるしらきくの花　春海

てる月のひかりはしもとみえなから老せすにはふしらきくの花　仝

淵となる行すゑかけて秋の月やとりなれなん菊のうへのつゆ　千蔭

菊籬月

長月の月をいく秋やとすらん千代をしめゆふませのむら菊　仝

菊薫枕

かをるかを枕にしめてよるも猶夢にみそのゝ秋のしらきく　高蹊

夜やふけぬ霜やおくらんとおもひねの枕にかをる庭の白菊　枝直

籬菊

日かすへてにはふもあかぬこゝろには露のまかきのしら菊の花　宣長

くまもなき月にけたるゝゆふつゝの光をのこすませのしら菊　千蔭

庭菊

わかやとのよもきにましる白菊をいとおはよそにおもひける哉　蘆庵

閑庭菊

おのつからしつけき宿の手すさひにつくろひ添つ菊のきせわた　春海

閑居菊

さえしよりひとりなかめてうつろふもたれとをしまん庭の白菊　契冲

菊閑中友

このやとに千代をもちきれ世のうさはいさ白菊の花になれつゝ　春海

おきわたす露もしつけき白菊の花やあるしのおもふとちなる　千蔭

菊交薄

花すゝきまねく袂にしらきくも立よるひとの袖かとそみる　宣長

山路菊

むら菊の露分衣ひもいりぬけふや山路に千とせへにけむ　千蔭

名所菊

きくの花さける山路にやすらはゝおもひの外の世をやへなまし　枝直

菊映水

おほゐ川千代もすめとや龜山の東にきくの露をそふらん　契冲

岸頭白菊

かくてこそおいはせくらめ影みれはやへにしからむ菊のした水　仝

澤畔菊

秋も又吹谷風にうち出るなみかとまがふきしのしらきく　宣長

谷菊

あかすみんみきとの菊の露おちて淺澤水も淵となるまて　仝

河邊菊

うもれ水かけこそみえぬ露おちてにはひはうつる谷のしらきく　仝

水邊菊

大ゐ河きしの白菊ふく風にしもはかつらの香にやまがはん　契冲

旅宿翫菊

にてるともきくのしつくは千代かけてわくまて汲ん谷のした水　宣長

菊花盛久

故郷のおとつれをたにきくの花名もなつかしみをりてけるかな　千蔭

菊契多秋

霜となる露もむすひて菊のうへにおける心そ花とひさしき　契冲

菊契千秋

仙人のすむてふやとの菊の花千秋もいろはかはらさらまし　春海

伴菊延齢

千世ふれと老をもしらぬしら菊の花のおもてに君あゐぬへし　仝

老人對菊

あし引の山路のきくや仙人の千代のさかゆくしをりなるらん　千蔭

つみつれは今やわかゆと待ほとにおいの歟そふけふの白菊　蘆庵

寄菊祝

つむとにわかゆとは身をおもはねとあかぬはけふの白きくの花　仝

長月の長くにはへる菊をうゑておほくの秋をあかすかさゝん　たみ子

仙人のたをれる菊はおいぬまに千とせの坂やともにこゆらん　契冲

寄菊述懷

なにとも人におくれし我やとは秋のくれにはきくも咲ける　蘆庵

秋をへて老となるまて色もなきとはの露を菊にかけつゝ　仝

楓紅葉

秋ふけぬすゝまぬ馬にいひなしておくれしこゝろ菊やならへる　契冲

もすのゐるしるへはあれと故郷のはしの立枝とふ人もなし　長流

はしもみち薄きはゝそにましれはやわきて立枝の色こかるらん　蘆庵

柞紅葉

もみち葉とおほかる中によそめにもわきて立枝のはしのひと本　宣長

時雨てもうすきはゝそを白露の一しほそめとおもひけるかな　蘆庵

檀紅葉

をしねかるくろの柞の薄もみちしくれぬさきに染てみせけり　自寛

楓紅葉

はゝそ原かつちりそめて露霜の心あさゝや色にしみすちむ　春海

秋ふけて色こきいねの中にしもたてるはゝそのうすくも有哉　千蔭

いつしかとなかは過行としのやのはやまのまゆみ色つきにけり　枝直

はつしほを秋のあはれのはしめにて千しほもわかぬ歸るての色　千蔭

櫻紅葉　全

山さくらむれても人のとひこねはもみちの秋そあはれふかゝる

蔦　宣長

山さとの軒はに秋のいろみえて人めにかゝるつたのもみち葉

染わたす梢のつたの村もみち秋は松さへいろになりつゝ　春海

さひしさを色に出にけりつたかつらくる人もなき軒にかゝりて　枝直

うき秋にかわかぬ露をかなしともいはねのつたの色に出ぬる　春滿

蔦懸松

つれなさの松にならはて秋の色のあはれをみするつたかつら哉　千蔭

ささ

ともすれは下もみちするまささつら秋なき物の秋そみせける　筑波子

紅葉

よのつねの色ならめやはさかの山もみつる秋のいてましとみつ　眞淵

とき花のへのさかりは時過て山のにしきにうつるあきかな　長流

露霜にあらそひかねてもみちはの今はと深き色をみすらん　土滿

秋されは先そかなしき外山なるはゝその色に人やならふと　千蔭

染ゝてぬはとにをみゝや紅葉はの千しほをまたは散もこそすれ　蘆庵

尋紅葉

朝霧のはるゝもまたて心あてに尋ねつゝいる山のもみち葉　宣長

初紅葉

心とくきてもみしかな山しなの石田のもりのもみちそめしを　眞淵

日にそひて心そ染ん秋の色のまたはつしほのよものもみちは　自寛

黄葉　枝直

時雨ふる山の梢のいかならんさとわのまゆみそめはしめけり

紅葉淺　春海

露をたにもらさぬ松のしたもみちうすきなからに秋をみせけり

一枝は先こそたをれうすもみち青きをおきて歸る山路に　全

林葉漸紅　古道

あすよりゝ出て木の實もひろふへき外山のもみちやゝ染てけり

林葉漸變　春海

くれなゐに匂ふはやしも下かけはみとりをのこす秋のこのころ

遠村漸紅　枝直

秋のこし道こそみえね月のいるみねのはやしの先そいろつく

紅葉未遍　千蔭

しくれゆく雲の絶間にはつしほのこすゑの秋をみする山里

紅葉淺深　全

もみち葉の染はつくさぬはとみえてなほむらこなるよもの薄霧

紅葉深　春海

一むらの高ねのもみち先そめてふもとそあきにおくれかはなる

紅葉遍　全

檜原さへにほふはかりになりにけりもみち色こきをはつせの山

紅葉色〻　千蔭

此頃はもみちぬ山もなけれはやくれなゐにはふよもの朝きり

紅葉處〻　長流

夏木立ひとつみとりとみし山も秋ゝ色〻のみねのもみち葉

紅葉盛　自寛

をちこちにそめしもみちの薄くこく山や錦のとはりかくらん

そめ〳〵し色も千しほの限とやけさはきのふのまゝの紅葉ゝ　宣長

たつた彦風なふかせそかきろひの岩垣もみち今さかりなり　千蔭

山紅葉　この頃の朝露さむみ鳴かりのはかひの山やもみちそむらん　長流

神無月ちかつく秋のはつしくれふりさけみれは山もいろつく　契冲

しくれするみふねの山はもみちはの色こき秋に先こかれけり　春海

山路紅葉　木〻の色も山路もふかく成にけりはゝそにつゝくはしのむら立　仝

もみち葉のにしきにしける色もなし花にもこえし志賀の山みち　たみ子

深山紅葉　つたかへて下照あきは陰しけきうつの山路もたれかたとらん　千蔭

山ふかみしもおくものはやけれと外のまたしきもみちをそみる　契冲

遠山紅葉　先そむる谷の小柴をしをりにて猶山深きもみちをそとふ　蘆庵

けさみれは都の外の露しものふかさしくるゝ嶺のもみち葉　千蔭

山皆紅葉　夕日さすをのへの松のしたもみちそめすはしらし遠きよそめに　蘆庵

紅葉滿山　山は皆そめぬこのはもなきものをしくれの雲のなにのこるらん　枝直

嶺上紅葉　わたつみもかゝこそしほのみちにしかから紅ゐの山のもみちは　長流

しら雲の絶間色こきたつた山峯の梢やもみちしぬらむ　宣長

山姫の袖のしくれやそめつらんくもらぬ嶺の木〻のもみちは　枝直

岡紅葉　そめのこす千しほの岡の薄もみち秋もおくゐるこゝちこそすれ　春海

林紅葉　そめわたすかた山はやししけゝれと露もゝらさぬ秋のいろかな　仝

森紅葉　秋の色はあさかのもりのむらもみち時雨の後そ又もきてみむ　仝

杜間紅葉　もみちにはいはたのもりの神はあく秋こそなけれ住吉の松　契冲

夕紅葉　夕附日さやかにみゆる山もとにあるしゆかしきはしもみち哉　仝

夕見紅葉　朝露のそめてしはしの秋の日にゆふくれなゐのもみちをそみる　長流

暮山紅葉　もみち葉の下てる山の夕こえは月またすとも道はたとらし　仝

夜紅葉　くれにけりこつたふましら心あらはわか山つとにもみち折なん　契冲

月前紅葉　さし出るかけに千しほの色みえてよるのもみちは月そそめける　宣長

梢よりもりくるかけの霜なれは月ももみちをそむるとそみる　春海

秋深き月に色そふもみちはをしくれにのみとおもひける哉　千蔭

月照紅葉　月の舟さすにまかせてよるさへもこかるとみゆるもみち葉の色　仝

てりまさる月のかつらの散くるもおもふは木〻のもみちとけり　たみ子

雨染紅葉　かさとりの山のもみち葉色そこきいつかしくれの雨ともらせし　春海

あらそはぬもみちや色のまさるらんまきたつ山の秋のしくれに　契冲

雨中紅葉　しくれする雲にくもれる鏡山下てる色はもみちなりけり　春海

雨後紅葉

かく染るほとはふるともみえさりき時雨のあとのみねの紅葉　たみ子

我山のこすゑをはやくそめすてゝふもとにかよふ初しくれかな　千蔭

霧中紅葉

秋山の薄きりこもりむらゝにそむるもみちの色わきてみゆ　蘆庵

ゆくまゝに山ちかつきて霧間よりまつみしもみち色そさやけき　契冲

紅葉隠霧

そめしよりちらまくをしむよの人のおきその霧や山かくすらむ　枝直

紅葉待霜

露しくれやしは染なすもみちはのなほあかぬとや霜をまつらん　仝

紅葉霜

おのか色もはてはもみちにそめられて薄くれなゐに匂ふ朝しも　蘆庵

霜間紅葉多

ふるさとはそのゝ山柿蔦楓そめものこさぬしものひところ　仝

閑居紅葉

かくこそは山のこのはもいろつかめくさのいほりも秋は有けり　契冲

山家紅葉

もみち葉のちらぬかさりは山里に秋はつましきこゝちこそすれ　春海

田家紅葉

花の時山里人にちきりおきしもみちやすらんいさ行てみむ　契冲

翫紅葉

をしねかる田つらのいろの薄もみちいろ付秋になりにける哉　千蔭

折紅葉

秋ふけて思ひしつめるこゝろさへさらにうかるゝはつもみち哉　仝

見紅葉忘歸

ちらぬまを折てかさゝん村もみち松のあらしのうしろめたさに　春海

家路をもなにかいそかんもみちはの下照陰はくれぬともよし　仝

紅葉前待人

露霜のひとしほそめの薄もみち千しほもこゝにみてをかへらん　千蔭

紅葉留客

とへかしなそめ盡しては花よりもゝろきもみちの露のさかりを　蘆庵

いへちをもたれかおもむんもみちはに心をそめぬ人しなけれは　春海

紅葉勝花

心さへ色にそみぬる木のもとをたれかへるてとなつけそめけん　千蔭

遠村紅葉

花よりもあはれはふかしみ山木のおのかいろ〳〵もみちする頃　春海

野紅葉

中たえしにしきとやみん一すちのけふりへたてし里のもみち葉　枝直

故郷紅葉

霜かれんのちこそあらめ秋のゝを今しもやくとみゆるもみちは　契冲

あれにける志賀の都のむらもみちにしきたにはれ昔しゝのはん　春海

隣家紅葉

みる人もなきもみちはの色染てなにゝしくれのふるさとの庭　宣長

松間紅葉

垣こえてゆるさぬを引をとめ子かたもとの色に似たるもみちは　長流

そめわたす色をもみちにゆつりてや松は聲のみ猶しくるらん　春海

わかさりし木〻の梢はもみちして時雨そ松の色とみせける　宣長

薄けれと松にはあらぬ秋の色を木の間にみせてそむるもみちは　蘆庵

紅葉交松

立田山もみつる頃の松の葉もにしきのうへのあやとみえける　契冲

紅葉透松

たちならふ松の煙のしたもみちいかにこかるゝ色をみすらん　枝直

たこの浦や秋はもみちそこかれけるふしの烟のたゝすなるよも　千蔭

行路紅葉

みゆきせし昔の秋のあとゝめてもみちを分る千代のふる道　春海

樵路紅葉

散しけるそはのもみちにあとつけて霜のうへゆくみねの柴人　仝

社頭紅葉

それならてねきともなし龍田彦風なふかせそもみちする頃　枝直

立田山風まもるてふ神垣のもみちはちらしあきすきぬとも　宣長

社邊紅葉

朝くまや鏡の宮のむらもみちしたてるかけそ世にはことなる　春海

露しものいかにもりてか神のますみかさの山はもみちしぬらん　仝

古寺紅葉

風たにもよきて吹らんとふりこかしめ引はへしもりのもみちは　千蔭

秋深みかけみる木〻のもみちはのあかねの水はとしふりにけり　仝

紅葉幣

山寺の鐘はきこえてもみち葉に入日のかけはなほのこりけり　枝直

旅中紅葉

とりあへすもみちをぬさとたむけ山神の心を神やうけゝん　契沖

河邊紅葉

箱根路はもみちしにけりたひ人の山わけ衣そてにはふまて　春海

百舟のかよふ川へのもみちはゝこかるはかりに染てけるかな　千蔭

隔河見紅葉

船とめてしたしはみはや河涙にかけもこかるゝきしのもみちは　宣長

木からしのふくや河とのわたし守ちるもみはもこゝらつまなむ　千蔭

水邊紅葉

そめつくすもみちのかけも川霧のはれまや水の秋のはつしほ　宣長

岸紅葉

ことさらに下行水もあきすみてうつるもみちのかけをまちけり　千蔭

水郷紅葉

山河のきしのもみちはかけ清み水のこゝろもあかくみえけり　土滿

池邊紅葉

かつら人散をやいかにいそくらんあらしの山のみねのもみちは　千蔭

江紅葉

秋深きみきはのもみちうつろひてにしきをたゝむ池のゑゝ涙　仝

海邊紅葉

大ゐ河入江にゝほふもみちはのこかるゝかたにふねはとゝめん　春海

浦紅葉

山陰やあゐよりもこき江の水に色そめまさてうつるもみちは　蘆庵

瀧紅葉

わたの底ありてふ玉の枝にしもいそ山もみちけふはかはらし　長流

あかしかた浦こく舟のはにいてゝにほふ紅葉はあかすも有かも　千蔭

瀧邊紅葉

ぬのひきのたきの白糸それをたにむらこに染てちるもみち哉　春海

紅葉映水

おちゝ瀧津もみちをわくる白糸はなに山姫のそめのこしけむ　枝直

紅葉浮水

おとまかふ瀧のあたりの紅葉はゝ染ぬしくれもそめやしつらん　宣長

水上紅葉

舟よせてたれもみよとや中島のもみちも涙にこかれいつらむ　春海

さゝらかた錦の帶とみるもかり細谷川にもみちなかるゝ　千蔭

みなの川もみち葉なかるつくはねの山もとゝろに時雨ふるらし　契沖

紅葉染水　瀧のとのおのれ時雨のたとはしてもみちのかけそ色をそめける　宣長

紅葉滿涙　よも山の秋をうつしてから錦たつたは水のいろものこらす　蘆庵

紅葉滿網代　水上のもみちはよせてあしろ木になほもいさよふ秋のいろかな　千蔭

紅葉欲散　あすはまたちりやそめなんそめ〳〵て色の千入の秋のもみち葉　宣長

思紅葉　ゆふされはをしか妻とふ秋しのやと山のもみちゝらまくもをし　土滿

紅葉易散　そめはてゝさそはれやすき紅葉乙の千しほの後はしくれすも哉　枝直

惜紅葉　たつをたにをしといひけんから錦野山にすつる秋のもみち葉　長流

風前紅葉　もみちはを風と水とにまかせおきてみる人そなき山陰のあき　蘆庵

紅葉厭風　としのうちに秋はいくかも嵐山いたくな吹そのこるもみちに　契冲

紅葉隨風　立田山ふりにし關も秋はかりもみちをさそふ風にすゑはや　仝

暮秋紅葉　山風にみねの梢を吹わけてにしきたちえのはしのもみち葉　宣長

紅葉送秋　立田姫秋のわかれの涙もやしくれとなりて木ゝをそむらん　蘆庵

惜秋　しくるとも露もちらすなもみちはにけふ行秋をかけてとゝめん　春海

いかにせんさきたつ秋をゝしむまにもみちもそらや木枯の風　宣長

おのつからもろき木のはの秋なれは暮るを何にかこちたにせん　員淵

老惜秋　一とせのくるれは春にあふものを秋のなこりそやるかたそなき　千蔭

秋徐暮　うき秋といひしはありのすさひにてけふと暮なは何こゝちせむ　枝直

秋欲暮　行秋のなこりのみかはふりし身はみるものとになこりなりけり　仝

秋不留　日にそひて近つく秋の別路もよな〳〵ほそき月にこそしれ　蘆庵

暮秋　よる〳〵は水鳥さわきしくれふり秋としもなき秋そのこれる　枝直

まくす原うらかれはてゝ行秋をひきとゝむへきたよりたになし　千蔭

今はとてのへのむしのね鹿の聲いさなひたてゝ秋そくれゆく　枝直

草も木もうつろひはてゝ日かすより野くれ山くれ秋そ過行　長流

秋はつる木の葉と冬の初しくれいつれかさきにふらんとすらん　契冲

あかすみし千くさの花もうつり行てもみちになけく秋の暮哉　たみ子

こを鹿も聲なをしみそ花つまにわかれん秋はけふにやはあらぬ　春海

暮秋風　秋風はしかなくのへの萩か花ちりゆくころそ身にはしみける　筑波子

秋をのみをしむとすれとけふさらに山のにしきを風のたつらん　長流

暮秋雨　山のはゝしくれ降らし長月の有明の空に雲のかゝれる　枝直

けふのみとおもはぬ秋のゆふへたにさひしき物を小雨そはふる　古道

暮秋雲　風きはふ雲のゆくへもゆく秋のあはれをみする夕くれの空　宣長

暮秋霜　くれてゆく秋をゝしかの聲かれてたゝすむ嶺に雲そおりゐる　枝直

暮秋朝　おくしもにしられぬ秋の日數さへのこりすくなき庭のあさちふ　宣長

暮秋夕　秋もはや老にけらしな草むらの露もいつしか霜となりつゝ　千蔭

暮秋曉　のこりなくそむる梢の朝しもにふけゆく秋のほどをこそしれ　春海

野暮秋　露むかふゆふへの霜をなこりにて野なる草木も秋にわかるゝ　枝直

暮秋森　まはき原鹿のねうとくなりにけりなか花妻をあきはてぬとか　千蔭

山家暮秋　まくす原露よりなれて霜のうへに猶まつはるゝありあけの月　春海

田家暮秋　朝しものひかりや月にそへてみんあきもなこりの有明のころ　仝

暮秋庭　秋はけふいくたの森の木からしにとゝめんよしもなきもみち哉　契冲

暮秋鳥　うちしくれ木の葉みたれてかなしさは冬ちかくなる秋の山里　蘆庵

河上秋暮　霜まよふ山田のいねのおくてなる長月しもそくれてはとなき　契冲

ゆく秋のふるさとゝなる我やとにもみちも菊もみてやしのはん　仝

友よふや霜のおくての稻すゝめいまいくほどの秋をたのめる　枝直

たつた河くれなゐなかす秋の色をとゝむるかせのしからみも哉　たみ子

羇旅暮秋　故郷を別れし袖に置そめしあしたのつゆそ霜となりける　千蔭

暮秋旅　ひもとける花よりなれし草枕うらかるゝまて日かすへにけり　仝

山寺秋暮　時雨つゝ秋も過める山寺にうつふしいろのそゝそさむけき　仝

鐘聲送秋　うらかるゝ野寺のかねの入相のひとこゑとにあきそくれゆく　仝

故郷秋蘭　きりゝゝす鳴よるかへもわれはてゝたのむかけなき秋のふる里　蘆庵

惜暮秋　つれもなく暮ても行かうき秋といひしはありのすさひなりしを　千蔭

暮秋懷　身ひとつの袖の露やはかゝるへきなへてくれゆく秋のわかれを　春満

暮秋興　はやふさの羽風にもろきもみちはを袖にかけつゝかへるかり人　千蔭

暮秋傷老　わくよなき山路の菊の花もみつもみちをつとにをれるのみかは　春海

秋のむて　くれて行秋のかたみは消殘る霜のおきなのみにこそ有けれ　蘆庵

九月盡　さをしかのたちのゝ原に秋くれて今いくよとかつまをこふらん　眞淵

惜九月盡　わかるゝをあひもをしまぬとわりのなをさへ立て秋のゆくらむ　長流

長月の名にたつ秋もつきぬるをゝしむこゝろのなとのこるらん　蘆庵

秋むけふつくしち遠くしら雲のたなひく山の西にいぬらむ　契冲

別るてふことさへそへてうき秋のかきりをもみはてつるかも　枝直

けふをそのかきりとをしむ秋の日はなほ短くや暮んとすらん　長流

九月夜夕

あすか河あすの氷の關ゑあれとけふ行秋にしからみそなき　契沖

花すゝき日の入かたに袖ふりてわかるゝ秋をかへせとそおもふ　仝

月まちてとたにいはれすゆやみの道ならてゆく秋のわかれは　長流

九月盡夜

ねられねは夜を長しとてかこちてし秋も別のけふそわひしき　枝直

ねてあかす我をや秋のをしむらんけふの今宵と人はいふ夜を　契沖

九月夜曉

ゆく秋を聲のうちともさをしかのしらてなくらんしのゝめの空　宣長

九月盡風

いかにせんあすはもみちもあらし吹木末の秋のけふのわかれを　長流

山家九月盡

山さとに秋をみゑてゝあすよりゑいかにたへなんよあらしの聲　枝直

閏九月盡

やまさとは秋のなこりそあはれなる落葉ましりにを花ちる頃　春海

秋天

山鳥のしたりをたのむ長月のくはゝる秋もくるゝけふかな　契沖

秋天象

朝くもりこさめそゝきて花田色のそめてかわかぬ秋の空哉　仝

おほかたの空さへすめる秋なれや星月夜しもさやけかるらん　長流

秋日

一とせにふたゝひゆかぬ久方の天の川路そ涙たつなゆめ　蘆庵

山とほくたなひく雲にうつる日もやゝうすくなる秋のゆふ暮　仝

秋雲

なかめつるきのふの夕へほとなきに又秋の日のくれかゝりつゝ　契沖

此頃はしくるゝ空にたゝよひてもみちをさけふ雲のたちまひ　自寛

秋嵐

あしからや關のむら山秋更てしくれもよはす嶺のうきくも　千蔭

初風の身にしむさへも堪さりし秋さりころもあらしたつなり　長流

秋畑

吹おろすあらしをさむみまたきより冬かまへする秋の山さと　蘆庵

秋霜

かりすてし山田にのこるもくすひのけふりさひしき秋の夕くれ　春海

おくしもにうちかれわたる草の原かくていくよの秋かすくせし　仝

秋もやゝうつろふ花に色みえて草のはつかに霜そおきける　土滿

秋寒

秋深きおく山寺の松の露かちてこけちの霜となりけん　千蔭

秋さむみまたきに霜やふるさとのはつもみちゑも色こかりけり　蘆庵

秋曉

またさらに雁の羽風をさきたてゝ夜寒の秋のきたる頃かな　長流

露さむき草のうへ白くかけみちてみかさか原に月そかたふく　蘆庵

秋曙

山とほく夜きりのこりてしらむのゝむしのね高き秋のあけはの　仝

秋朝

朝つく日出るにむかふ有明のかけときえぬる月くけのはな　長流

しりなから世のはかなさをまとふまて昨日に似たるけふの朝貞　契沖

秋地儀　草の原きえてふりなん露をさへかけてそおもふあきのゆふくれ　蘆庵

秋山　朝霧の八重たつ山を分て來て夕日にゝほふもみちをそみる　千蔭

秋山そわれはといひし昔しへもあかぬもみちやかくこそ有けめ　春海

秋山路　時雨ふる秋の山路のあたれさに心をさへもそめんとすらむ　千蔭

秋野　秋のゝむ千くさの花のからにしきおりたちて行人そおほかる　仝

秋の〻の花はさかりにゝほふまもむや下葉よりうつろひにけり　土滿

小草さく秋のをみれは露ならぬこゝろもうつる花のいろ〳〵　蘆庵

秋野遊　きぬにすりつとにをりつゝ秋のゝむ人の心もちくさなりけり　千蔭

秋野忘歸　あきのゝにとまる心はさをしかにわれかとらめや萩か花つま　春海

秋野草　朝なゆふな露の玉まくまくす原くる人たえぬ秋の野へ哉　千蔭

風前秋草　わけゆけは秋のゝすゑの夕風に露もちくさのいろにちりつゝ　仝

野色混秋光　おきわたす露も千草にほひつゝいつらを花とわきそかねつる　仝

秋水　秋のよの月もひかりをさらすらん水底きよき玉かはの水　仝

秋水鄕　かけみえてこすゑなからのもみちにもくれなゐふかき立田川哉　宣長

秋池　あしかちる難波のさとの夕くれはいつくもおなし秋風そふく　眞淵

秋河　眞菅おふるいなさ細江のみをつくし秋きりのみそ深くみえける　土滿

月みれは都のうちもうみやまのありけるものを廣澤のいけ　眞淵

ふなやかたもみち吹そへあけふ日む河せの風もこゝろあらなん　千蔭

海邊秋　鷺のとふふもとの霧のひとなひき吹かたみゆるをちの河かせ　蘆庵

すみよしとあまのつけこし里の名を空にたかへぬ秋のよの月　長流

浦秋　あかしかた有明の月をしたふまにあはれをそふる涙の朝霧　眞淵

松たてる入江のとまや朝戸明て霧よりいつるあまの釣ふね　契沖

秋泊　なにむかたあし火たくやに宿らすゑ涙間にしつむ月をみましや　千蔭

秋舟　舟とめてこよひはこゝにあかしかた名たゝる浦の月をこそみめ　春海

秋里　霧ふかみをしかの聲をしるへにて磯山ちかくを舟よせけり　千蔭

から衣うつおとすゑゆくすゑの雲よりをちのさともしられて　枝直

石上ふるさと寒き秋かせに道しむかくれうつらなくなり　契沖

都人とむゝたからん有明の月にふしみのさとのかりねを　春海

秋山家　松のとにもろき一葉のおとつれはなか〳〵さひし秋のやまさと　枝直

いさといはゝ又もきてみんもみちはも菊もえならぬ秋のやま里　春海

山家秋　あはれさをくみてもしるやおとかはるみ谷の水の末のさと人　千蔭
山家秋深　はけしさもまさ木の末葉かつ散て嵐色つく秋のやまさと　宣長
秋田家　にはとりのかつしかわせやにへすらんけふとさらに烟たつみゆ　枝直
秋ふかく成にけるかなせきいれし河田のおくて霜むすふ也　蘆庵
田家秋暁　人かへる夕へをおのか時とてや落穂たつぬるを田のかしとり　春海
田家秋暁　有明にもるおくて田の露もさそ霜となるこの風すこき影　蘆庵
秋庭　くすかつらくる人なしにけふも又ゆふ日かくるゝ山かけのには　仝
秋故郷　ふるさとのかるゝひとめに立かはる高かやかくれうつら鳴なり　契冲
　　葬ふのやとにも露の玉しきて月のためにはふるもさとなし　枝直
社頭秋　行秋を引とゝめたるしめのうちにはふもみちはあかすも有哉　春海
秋神祇　秋風のたつたの使たちしより世はゆたかなる穂なみこそよれ　眞淵
秋古寺　先そむるこすゑの色にしられけり秋こしかたやにしのおほてら　枝直
古寺秋鐘　秋深みこゑのけふりに立かへし霧にうもるゝみねのふる寺　千蔭
　　山寺のかねのひゝきに秋のよの月のひかりそ花とちりける　枝直
秋植物　まさきはひつたもかゝれる山松は風にもからぬもみちをそみる　契冲

秋木　かしは木の葉もりの神のうらさひてあれ行枝に月そもりくる　土満
秋動物　はしもみち色にやもすのうつるらんなれしを花の袖をかれゆく　長流
秋獸　を花ちるあらの〻末の秋のしもふすゐのとこやいかにさゆらん　千蔭
秋鳥　稻からにすたく雀ははかくれてまれにのこれるほをやわらそふ　蘆庵
秋蟲　庭草における朝露きえぬまにはや秋の日はひくらしのこゑ　長流
秋香　くさ〳〵のなかにも分て藤袴菊こそ秋の香はつくしけれ　蘆庵
秋色　とつしほをはゝけにみせてかへるての千入そ秋のかきりゝける　千蔭
秋聲　あしの葉もこゑうちかへて難波かた夕しほさわく浦の秋かせ　春海
秋旅　とはさかるほともしられて秋きりのはれてもみえぬ故郷のやま　枝直
　　春霞たつを待まの雁すらもうしとそ旅の空になくなる　土滿
秋旅行　故郷をおもふ頃しもくるかりに旅ゆくわれに聲なきかせそ　たみ子
秋羈旅　あさ衣立出しよりなか〳〵にしきかたしくのちの旅人　千蔭
旅宿秋暁　夢さむるさゝのしのやのかり枕あかつき露にぬれぬよもなし　春海
秋雜　厂はなきもみちは色にあらはれて秋のこゝろをみする頃かも　土滿
　　時わかぬ峰のいはほもはふつたのもみつる色にわきはみえけり　千蔭

秋思　物おもふ秋のならひのたもとにもあまりあやしきゆふくれの露　宣長
衣うつこなたかなたのあはれまてとりかさねてそ秋はかなしき　土満
秋述懷　鳴しかはこふる妻たに有ものをおいてともなき秋のゆふくれ　蘆庵
秋手向　わか袖にあやしく露のみたるゝは世をあき風の吹はなりけり　たみ子
秋苞　もみち葉もあすは手向ん神無月けふ行秋のぬさにをしむな　長流
秋形見　風ふけはこきいれぬ袖もつゝむまて都のつとにちるもみち哉　契冲
秋祝　夜嵐にもろくもつもる木のはのみ明なは秋のかたみならまし　枝直
かりつみし秋の山田の稻つかのかすあるとしをいはふみたから　たみ子
かりてほすやつかたりはの稻かつらかけてつきせし萬代の秋　枝直
七月　さをさか千町八千町つくる田の穂とに千〻の秋はこもれり　古道
八月　きのふまてあやしき峰とみし雲もたなひきそめて秋風そふく　蘆庵
九月　池水に千代もかけみん中島の松の葉月のもちの夜の月　千蔭
閏九月　長月のよさむしらするかからの聲きくのまかきのけさの初霜　長流
嵯峨野秋以下同　なか月にとしのあまりもそひぬれは散とも紅葉あくまてそみん　契冲
月ゑいまをくらの山にかけおちてさかの〻むしの聲そのこれる　蘆庵

名所岡　波よするなきさのをかの花ず〻きなき名をたて〻秋かせそ吹　仝
竹田里　秋のよのふしみの夢もさむるまて竹田のさとにうつころもかな　仝
栗栖野　草のいとたれくるそのにうちはへてあきおく露を玉にぬくらん　仝
藤井原　分わひぬふちゐか原の大みかとふりていく世の秋のしらつゆ　仝
御幣島　白妙のを花や川のみなかみに秋のたむくるみてくらのしま　仝
高野　秋風によや寒からし鹿のねのふけてたかの〻かたに聞ゆる　仝
大島峰　立こめてふもとの霧は海に似て大島峯の名こそかくれね　仝
安濃　しほ風のあの〻みなとた吹なへにほなみかたよりなひく秋きり　仝
三香野橋　ゐはれなる老のみかの〻橋はしらたつ月とにふりまさりつゝ　仝
桂潟　あま人はをるともみえすかつらかたかたふく月の影のみそすむ　仝
玉河　うつら鳴野路の秋萩散過てひかりかくるゝたま河の水　仝
宇良古山　松陰に染るもみちはから衣うらこの山の名におひにけり　仝
衣崎　吹まよふころもか崎の秋風に立もつゝかぬなみのうきゝり　仝
曾登濱　都にて聞しよりけにかなしきはあきたつころのそとの濱風　仝
戸絶橋　波にして影のとたえとなりにけりよわたる月をはしにへたてゝ　仝

有明浦　なみとはくかたふくまゝにしらむよの月かけをしき有あけの浦　仝
神南備山　千早振神なひ山の櫛葉をいかにせんとかうちしくるらん　仝
長田村　行末のなかたのいなはかりつみてゆたかなる世の程をこそしれ　仝
長尾村　八束穂のなかをの村の秋をさめたのみおほかる御代けたのしき　仝
假寢岡　露のまも夢やはむすふ草枕かりねの岡の松のあきかせ　仝
衣浦　秋寒きころもの浦に立浪をいくへか風のたゝみよすらむ　仝
昧鎌　てる月にあこかれぬらし昧鎌の鹽津をさして夜舟こくみゆ　仝

○冬部

初冬　神無月雪の山口うちしくれけふこそふゆのふもとなりけれ　契冲
もろかみのぬれてやつとふけさよりは時雨の雲の出雲やへかき　長流
都にはころもかへする神無月やまさと人や冬こもるらむ　筑波子
もみちゝり鹿のねたゆる山さとゝ秋をきのふとおもはさりけり　春海
十月更衣　かみな月又もはるとしいふめれは櫻色なるそてやかさねむ　眞淵
さま〳〵にけふはかさぬる袖もあれとなほあかさりし萩の花摺　よの子

初冬天　しろたへにかさぬるきぬや霜雪のあはれをみする初なるらん　千蔭
初冬雲　秋つはの袖ぬきかへてけふよりやくち葉の色のころもかさねむ　仝
初冬風　きならし〻露分衣ぬきかへてけふより霜のしらかさねせむ　春海
初冬嵐　木の葉ちる空はしくれて都たに物のさひしき冬ゝ來にけり　契冲
初冬時雨　山さとの雲の行かひいとなきはみやこもけさやしくれゆくらむ　千蔭
行すゑのはけしさいかに冬になる今朝はや風のきのふにもにぬ　春滿
秋くれて殘る木のはもあるものをうたてはけしき峰のあらしか　千蔭
きのふしも月にうかりしうき雲の行へやけさのしくれなるらむ　仝
むらもみちなほちりのこるかけとめて今一しほと時雨ふるなり　春海
初冬霜　をしかりし秋にわかれし袂よりけふのしくれはふりそめにけむ　枝直
初冬木枯　しくれにゝもみちぬ庭の常磐木に霜の花さく冬は來にけり　春滿
をきの葉に哀れなりしはきのふにてなつかしからぬ木枯のおと　枝直
初冬曉　たちこめしきのふのくれの霧はれて嶺あらはなる木からしの風　千蔭
霜もはや空にみつへてあかつきのかねの音さえて冬はきにけり　春滿
ね覺する涙の枕霜とちてあかつき寒し冬やきぬらむ　宣長

初冬朝

けさははやしくれをいそく嶺の雲きのふの秋を空にへたてゝ　春満

初冬眺望

山かのせさそふこのはの行すゑをさとのけふりにみはてつる哉　枝直

野初冬

時雨つゝあさち色つくにはとりのかつしかのへに冬はきにけり　筑波子

森初冬

冬のくる月の名におふ神なひのもりの木葉やけさしくるらん　契冲

里初冬

冬はまたいたりいたらぬ里そあらんかた時雨ずる空のへたてに　長流

山中初冬

人めさへ草さへかれし山さとのまれの細道ふゆは來にけり　仝

海邊初冬

なには人しほなれ衣あしつゝのうすきにたへぬ冬はきにけり　仝

山家初冬

軒はよりあはたつ雲のかつはれてけさは麓にしくれゆくみゆ　千蔭

田家初冬

小山田のきのふかりてしいなからに霜ふりおきて冬はきにけり　土満

閑居冬來

朝とにならす硯のすみやかに手のうちさむき冬はきにけり　蘆庵

初冬傷老

冬もきぬさてやとしもはつ時雨あたにふりぬる身にそれとろく　仝

初冬落葉

冬立といひしはかりにそめつくすと山しけ山ちりそめにけり　千蔭

冬のはしめ山里をとふ

ふゆたちてれく霜さむみたく柴のしはくとはん山かけのやと　仝

時雨

神無月たちにし日より雲のゐるあふりの山そ先しくれける　眞淵

高ねには月かけさえて時雨ふるふもとのくもにかせそしくめる　土満

初時雨

武藏野のをくきを出る月かけをみるまさかりにしくれ降きぬ　美樹

聞時雨

いくそたひ時雨きぬらんをちかたのあらゝ松原みえかくれする　千蔭

夕聞時雨

今こそはふり來にけれと思ふまにやかて時雨のおとそたえぬる　筑波子

獨聞時雨

朝風のさそふもみちにあらそひて稍にゝわくはつしくれかな　春海

時雨雲

よひのまのこのはの後やしくるらんねさめてきけは軒のたま水　契冲

時雨告冬

鳴むしをあはれときゝしゆふかけの草のかれはにしくれふる音　枝直

曉時雨

友とのみゝきりの竹にきゝなれし風より外にとふしくれかな　仝

朝時雨

朝またき都の空をゆきめくり山路しくるゝゆふくれのくも　千蔭

夕時雨

冬來ぬと空にしられてをちこちに時雨をはこふ嶺のうき雲　仝

あけたゝは色そはるへきもみちは葉にねさめ嬉しきむらしくれ哉　仝

山のはに松と月とはつれなくてしくれすきゆく有明のそら　宣長

けふも又かくていく度しくれましみねの朝日にくもかゝるなり　眞淵

朝鳥のねくらを出る山のはの木のはとゝもにふるしくれかな　千蔭

うき秋の露たにあるを神無月又袖ぬらすゆふしくれかな　自寛

木からしのもみちも雲もしくれ來て峯の入日の影ものこらす　宣長

夜時雨

冬の日のほとなき空にいく度かけふもしくれてくるゝ山かけ　蘆庵

まくらよりあとより過てねやの上もかたさたまらぬさよ時雨哉　長流

曉覺聞時雨

あたれよにふるほともなき曉の老のねさめをとふしくれかな　蘆庵

時雨驚夢

さらてしもみたてぬ夢をいくたひか閨のしくれのさそひ行らん　たみ子

時雨向夜

水こゆるものとはなしに時雨してわたりもやらぬ夢のうきはし　宣長

連夜時雨

くれかゝるは山を過て夕月にあはれをそふるむらしくれかな　千蔭

月前時雨

冬くれためつらしけなきしくれにも宵〻さむるたまくらの夢　蒿蹊

時雨過

てる月にさはらてふるは久かたのかつらの露やかせにしくるゝ　蘆庵

時雨易過

月やとるかやかのきはの玉水にれとせてすきしゝくれをそしる　仝

時雨晴

雲みえしと山はたれてわしはやく今そのきはをしくれ過ゆく　枝直

時雨易晴

雲もなし枕のしくれそれも又さめぬるゆめかありあけの月　宣長

時雨陰晴

しくれつゝ雲はのこらて夕日さすまやのゝきはに栗おつなり　蘆庵

かみな月今日もしくれの晴にけりくもりにけりといひて暮しつ　員淵

この葉散山路こゆれはしくれ行あとよりにほふゆふつく日哉　千蔭

はるゝかとみれはしくるゝ空の月雲のやとりやさためかぬらん　春海

風前時雨

うきくものあしもやすめぬ山風にいつくまてとかしくれ行らん　契沖

時雨交風

過ぬれと杉のしつくを吹かせに又もしくれのふるの山もと　宣長

時雨頻

一しきりはるゝあとより時雨きて又さしかさすころもてのさと　春海

時雨遠近

夕日さす外山のすゑにみし雲はやかて軒はのしくれなりけり　枝直

時雨處〻

雲かゝる嶺こえかねてやとゝへたふもとのさとも時雨きにけり　仝

山時雨

そめのこすこすゑもなしとみよしのゝ青根か嶺に今そしくるゝ　仝

山中時雨

あしからやいはへむら山かつかくれかつあらはれてしくれ降也　千蔭

箱根路はしくれ來にけりふしのねを雲立はなれゆくとみしまに　春海

高山時雨

雲まよふあらしもはやき山さとはたれまの空もうちしくれつゝ　宣長

遠山時雨

もみちかはふしの高ねのむらしくれはれ行あとた雪のしろたへ　仝

深山時雨

いくたひかしくれふるらしうちむかふ高根の松にまよふ浮くも　たみ子

時雨思山

ふもとには入日さしつゝおく山の軒はにかへるくもそしくるゝ　千蔭

時雨染山

もみち葉を袖につゝまぬ人もなしゝくれとゝもに山めくりして　春海

嶺時雨

そめのこす梢たつねてしくるらん雲こそかゝれやまもとのさと　枝直

神無月しくれふるらし二並のつくは高ねにくものかゝれる　仝

籠時雨　木枯にふもとはこれてむらしくれ又もたかねにかゝるうきくも　たみ子

岡時雨　くも過るみねの夕日のかけみえてふもとのさとにしくれ降こ　春海

山路時雨　わかをかのおち葉ましりの夕しくれさとの梢を今やそむらん　千蔭

樵路時雨　むら時雨もみちこきませふるころは山わけ衣はさてかへらん　仝

野時雨　袖ぬれてかへる木こりにとゝへは高ねのくもはしくれなりけり　春海

野徑時雨　さそひきて風のするのをゆく人の袖にしくるゝよその村雲　宣長

野亭時雨　おくるゝもおなし木陰を尋來て野路のしくれにあひやとりせり　春海

名所時雨　しはしとて立もやよると野への庵しくれ降日こひとりまたるゝ　宣長

海邊時雨　高鴨はこやくしくれそふりにけるかつらき山の嶺のうきくも　眞淵

磯時雨　たまもかるみぬめを過てゆく雲は野島か崎のしくれ也けり　枝直

河時雨　いそ山の松のあらしに聞なれてけふもしくれに袖ぬらしけり　千蔭

渡時雨　たつた川そめしにしきはあともなくつれなき水にしくれふるこ　たみ子

船中時雨　角田河わたしもはてすしくるめりしはし雲間の空たのめして　枝直

　たちぬるゝ袖のわたりの夕しくれ舟まつほとそわひしかりける　自寛

　山もとのあけのそほふねこれも又今一しほとしくれ來にけり　宣長

樹陰時雨　過ぬれとたとはしくれのあまやとりやむをいつとて松の下かけ　仝

松風似時雨　雲はれてよそにいなはのやまそ猶おとはしくるゝみねのまつ風　仝

杜時雨　吹さそふ風になひきてゆく雲のうきたの森や今しくるらん　蘆庵

山家時雨　谷のいほ雨やとりする柴人もしはくかはるむらしくれかな　宣長

里時雨　山かけやならのはならておとともなしかやか軒はにしくれふる頃　春海

　夕あらしひとむら雲を吹まきてけふりしくるゝ山本のいほ　春滿

閑居時雨　さそひくる雲よりさきにおとたてゝ風にしくるゝさとのむら竹　宣長

　軒にはふつたのおち葉をさきたてゝ窓にれとなふむら時雨哉　千蔭

菴時雨　世をよそにふる身をたにももらさしと笹のしのやをとふ時雨哉　春海

屋上時雨　木枯のおとするよりもくさの庵のよるのしくれそ聞うかりける　たみ子

閨時雨　さよしくれ板やの軒はふり過ぬ又たか夢かおとろかすらん　蘆庵

行路時雨　中〻にともときくこそあはれなれねさめかちなるよはの時雨を　春海

　しくるゝや道のゆくての笠やとりたちよるほとも紅葉ちりつゝ　千蔭

　くれやすき冬の日とてやたひ人に道いそかする時雨なるらん　宣長

遠郷時雨　山しろの水野のさとやしくるらん雲にれくるゝよとの河舟　枝直

をちかたの里のなかめやしくるらんさはらぬ月のよそのむら雲　宣長
たをやめの袖は昔の飛鳥風雲吹かへすむらしくれかな　仝

故郷時雨

いはしろの田つらのひつちうちなひきふせやの軒に時雨降きぬ　千蔭

關路時雨

むらしくれ岩根木のもとさためなき山路の旅の雨やとりかな　宣長

田家時雨

草枕たひのやとりに木葉ちりしくれふるまて日をもへぬかな　土滿

旅中時雨

かはかりもおもひおこさし都人しくれさへふるくさのまくらを　枝直

羈中時雨

木の葉かときけは降つゝ時雨かときけも散つゝえこそさためぬ　契沖

時雨混落葉

衣手のもりの木のはのもろけれもしくれや冬の涙なるらむ　仝

時雨似涙

たひ衣たひかさなれはもち笠の袖もしとゝのむらしくれかな　宣長

時雨霑袖

日のかけもうつれはかはるうき雲の定なきよの空そしくるゝ　長流

寄時雨述懷

うれしくもふりくるよはのしくれ哉笠やとりとはおもふ物から　千蔭

時雨ふる夜とふ人あり

ぬるゝともよしやいとはし秋の葉を染しゝくれの雨とおもへは　枝直

道行人時雨にあへり

ふりはへてともんとおもひしけふも又僞になそむらしくれかな　たみ子

しくれふる日人のもとへ

かみな月かた山あらしのとかにてもみちみるへきけふにも有哉　眞淵

十月紅葉

此秋はみさりし木〻のからにしき冬たちてこそれりつくしけれ　蘆庵

殘紅葉

もみち葉のちらぬかきりは千早振神無月ともおもはさりけり　枝直

尋殘紅葉

もみちはゝともしくなれと神無月しくるゝ頃そみるへかりける　筑波子

紅葉殘梢

かみな月しくるゝ雲にかくろひて色みえぬまにちりかすきなん　美樹

紅葉殘枝

あらし吹み山の木〻は散過て冬をさかりのさとのもみち葉　枝直

深山紅葉

神無月とるおほえたるのとけさに殘るもみちを花かとそみる　千蔭

もみちやゝ散たり

道かへて又やたつねんきのふみしは山は秋の色ものこらす　春海

社頭殘紅葉

吹おろすみねのあらしのさそひきてあらぬ梢にのこるもみち葉　枝直

時雨染紅葉

來てみれは秋のかたみの木のもとゝわれもえたゝぬから錦哉　宣長

紅葉滿庭

山かせのたえすたつぬる秋のはをひはらかくれに殘てそみる　蘆庵

紅葉散

花よりもつれなかりけり紅葉はゝ袖にしむへき香さへとめねは　千蔭

よにしらぬもみちの色をとゝめけり秋はいなりの森のしめなは　仝

かみな月もみつる木〻は時雨にやあつらへつけて秋のいにけん　蘆庵

もみち葉はちるをかきりとみしかとも庭の眞砂の秋も有けり　宣長

ちゝの木のちゝふの山の薄もみちうすきなからにちれる冬かな　眞淵

紅葉不殘　朝な〳〵ちるもみちはに霜おきてなつかしかりし色もこらす　枝直

林葉不殘　冬の來て風のはやしとなりしより秋のいろは〻露もこらす　蘆庵

落葉　もみちは〻ふるもまことの雨ならすたかあやまちの笠とりの山　長流

風ませにしくれの音のさわきしはみつかふたつの木のは也けり　契冲

山風のさそひのこせしもみちはの霜におちくる音のさやけき　土滿

いつしかと山もあらはになりにけりくぬ木かつちるさはの河風　枝直

落葉有聲　夕月のかけさやかなるまきのとに木のはのふ〻き音のさむけさ　千蔭

聞落葉　あかつきの鐘のひ〻きにね覺してねつる木のはの聲をこそきけ　仝

夜聞落葉　風ふかぬよるの軒ちにおとするは霜にもたへぬこのはなりけり　枝直

曉聞落葉　さそひゆくれとも枕にしの〻めの夢ものこさぬ風のもみちは　宣長

翫落葉　あかなくにもみち葉ひろふこのもとはいとふ物から風そ待る〻　筑波子

落葉殘秋　もみち葉を涙もてはこふ貴船川きのふの秋やこ〻によとめる　春海

落葉脆　さもこそはあらしの風のさそふらめしくれにたにもちる紅葉哉　蘆庵

落葉深　日にそひて落葉そふかく也にけるなれしつま木の道たとるまて　春海

落葉不駐　これも又あらしの後のうき世かなもみちとゝめぬやまかはの水　宣長

落葉不殘　塵つもる庭はゝらはしけさみれは枝にひとはものこらさりけり　枝直

落葉不待風　冬來てはかせもかこたし柞原心つからそちりそめにける　千蔭

落葉待風　あすまては嵐まつまのかからにしき殘ひと木のかけそたちうき　枝直

落葉風　もみち葉もいまはまさこのはつしはとちらしそめぬる庭の木枯　宣長

風前落葉　吹はとはたゝひとむらにさそはれてたもむ嵐にちるもみち哉　仝

落葉隨風　山姫もねたしとやみんこからしに心かゝしてさわくもみちは　蒿蹊

落葉　はふりこかいはふもみちを立田山神のこゝろにまかせゝつめり　千蔭

落葉霜　くれてこそ秋はみえけれもみち葉も風のたよりの常磐木の陰　宣長

落葉時雨　くちのこるかたみの秋のおち葉たに又いつまての庭のあさしも　仝

雨中落葉　かねてより染し時雨にならひけん木の葉もつひに雨とのみふる　長流

落葉交雨　時雨には散ての後もふるひたにぬれて色そふにはのもみち葉　宣長

落葉混雨　むらしくれむら〳〵さそふさよ風に又降くるは木のはなりけり　たみ子

朝落葉　かみな月木葉みたれてふるさとはわきて時雨のれともきこえす　蘆庵

山陰やしくれにかつく袖さへもちるもみち葉にそむるころ哉　千蔭

庭の霜軒の朝日もゝみち葉のよのまにちりしはとはみえけり　契冲

夕落葉　山かせのもみち吹れろすもふくれに入相のかねの聲そなしれる　仝

吹さそふもみちの色はくれはてゝ軒はにのこるこからしこゑ　蘆庵

散をたにみてましものをあやにくに暮るをくらの山のもみちは　宣長

夜落葉　山風のふくよの月におとはしてくもるともなくちる木のはかな　眞淵

曉落葉　こからしに枝をわかるゝもみち葉もほの〳〵みゆるよこ雲の空　宣長

月照落葉　かけおほふ軒はのはゝそちりかひてをり〳〵くもる在あけの月　千蔭

月前落葉　れく霜にうつろふ月のかけなから散もみち葉はよるさへそてる　仝

散まかふもみちに月もくもる夜はすさましけなる影としもなし　春滿

天津空鏡とみゆる月かけにちりかゝるものはこのはなりけり　千蔭

山落葉　としをへて木の葉は千へにつもれとも山の姿はかはるともなし　枝直

山中落葉　おく山のこすゑの秋やいかなりしやさかつもれる色をみるにも　千蔭

峯落葉　うつりゆく色の千しほはあらしにて梢よそなる峯のもみちゑ　宣長

麓落葉　よそにみしみねの梢も木からしにけふそふもとの秋のもみち葉　仝

名所落葉　さは過てたかとるぬさとみたるらんならの手向の風のもみち葉　眞淵

神無月しくれせぬまもひなくもりうすひの坂は木のはふりつゝ　枝直

橋上落葉　とふ人の稀なるはともしられけりこのはふりしくまへのたな橋　仝

葉落水紅　もみちゝるあらしをせゝの時雨にてふくにそめます山かはの水　宣長

河上落葉　河の上にたか折かけしにしきそとみゆるゑ風のこのはなりけり　たみ子

朝日山みねのもみちは散ぬめりしからみかけようちのかは長　千蔭

同しせによりやあふらん妹脊山なかゆく河にうかふこのはも　枝直

水上落葉　もみちはゝ梢のものとれもひしをさなから水の秋とこそみれ　土滿

落たきちみなわさかまく谷川にもみちみたるゝ夕あらしかな　春海

谷川の岩うつおともたえにけりいかにしからむ木のはなるらん　枝直

水邊落葉　いつしかとなかれて色にいつみかはは丶その森の下のもみちは　宣長

落葉浮水　あすか川きのふもけふも吹にけり七瀬によとむ木〻のもみちは　千蔭

落葉浮涙　そめつくす木の葉なかれて川涙のあやを錦にれりかへてけり　枝直

池邊落葉　あさみとりかけみし柳いつのまにつゝみの池をちりおほふらん　契沖

澗落葉　谷水をちるもみちはのせきとめてたきち流しおともきこえす　枝直

瀧上落葉　ちりうつむ木のはやふかき谷水ゑこはらぬ先に音そ絶行　春滿

せかれてはまさらぬ水やまさるらんこのはも落て瀧にそふなり　契沖

落葉染瀧　いかはかりもみちゝれはか紅にみなきりおつる峯の瀧津瀬　千蔭
湖上落葉　たきつせに峯のあらしのはけしさも白糸そめておつるもみち葉　宣長
　　舟出せしおは宮人の袖の色にもみちはよするしかのから崎　千蔭
海上落葉　おはひえやをひえおろしのおとさえて木のは吹まくしかの唐崎　春海
旅宿落葉　ふきおろすいそ山風をおひてにて出る千舟や木〻のもみち葉　蘆庵
關路落葉　木のはふるかた山陰のかりまくら心すむにそいをねかねつる　春海
　　時しもあれふはの關やに時雨して木葉さへこそまはらなりけれ　契冲
　　關こゆるにひさきもりか鹿きぬに散はゝそゝの名さへなつかし　千蔭
山路落葉　山かけは木〻のおちゝにうつもれて雪よりさきにみちそ絶ぬる　蘆庵
樵路落葉　白雲のうつむ山ちはわけなれてけさや木のはにまよふしはひと　契冲
行路落葉　家つとに手折てかへるひと枝もかひなき山のかせのもみち葉　宣長
路落葉　みるかうちにこゝらの木葉さそひきて嵐のうつむ冬のやま路　春満
　　跡もなき庭のゐちはに冬きぬとなか〳〵しるきやとのかよひち　宣長
落葉埋路　されはこそはけしかりつれよ嵐に朝たつ道をうつむもみちは　枝直
落葉埋苔　むす苔におちはころもをかさねきて石根は冬そあたゝかけなる　春満

落葉埋菊　ちるまゝに垣ねの花はうつもれてこのはそ菊のかにゝほひぬる　蘆庵
故郷落葉　さゝなみのあふみの宮に冬かれてのこるは守の神たにもなし　契冲
山家落葉　山さとのかけひの水そ先よわるこはらぬさきもつもる木のゝに　仝
　　木枯のたえすおとする山さとはこけ路によそのもみちをそみる　春海
閑居落葉　むら時雨ふるとしのふすさひにはならの落ゝもかきそはらはぬ　千蔭
古寺落葉　山寺の人けもまれの細道に木のゝをふめはしかそおとろく　契冲
杜落葉　松陰におつるゆふ日のさむけきに木のはをはらふすみそめの袖　仝
庭上落葉　くちのこる木陰のおちはふみわけて人のなけきのもりの朝霜　宣長
落葉藏庭　かさはらふとをゝしとて日をふれは道さへたえつ庭のもみちは　春海
閑庭落葉　もみちはにこけのみとりもうつもれて跡なき庭そ秋をのこせる　枝直
　　ちらはちれ庭ゝこのはにまかせてん初めて絶る道にしあらねゝ　契冲
松間落葉　庭もせにちるもみちはやせきぬらん筧の水のゐとたにもなし　千蔭
松下落葉　もみちはの枝のふるさと別れきてやとかる松もあらしふくなり　契冲
　　散うせぬかけをやなはもたのむらんもみちしからむまつの下水　枝直
　　冬なれや常磐の松の下陰によそのもみちをさそふこからし　たみ子

車中落葉　もみちをを風のさそへるを車はさらにしきの下すたれせり　春海

遠近落葉　冬くれはさそふむかひの山の名にをくらの山もちるもみちかな　宣長

落葉如錦　もみちゝるふもとのさとの山かつはから錦をそこゝらかつける　筑波子

落葉勝花　散てしもあわとはあらて水の面にくれなゐくゝるもみちはの色　千蔭

杜邊落葉　神垣や榊かえたのれひかせにちるもみちさへかくはしき　仝

寄神祇落葉　外のちるのちまてみゆるかしは木はは守の神やかれせさるらん　契冲

もみちちりたるに酒のむ　散はてゝもみちかきしきくむ酒におもわや秋の色にいつらん　千蔭

殘菊　もゝしもにかねてまかひし白菊のなほうたかひをのこす色哉　長流

庭殘菊　咲花にたくれて染し木はさへちりしく庭にのこる菊哉　蘆庵

籬殘菊　うつろひて色香そひもく白菊はれく初霜もえこそはからね　枝直

殘菊帶霜　かく霜をかさねてにはふしらきくに冬かれしらぬませのうち哉　春満

殘菊映水　冬來てもおもかはりせてにはへるは菊のまかきは秋やへたてぬ　契冲

や千くさの花はかれてもませのうちにはこらしけなる霜の白菊　自寛

みなからもうつろひはてぬ白菊になほまかへてや霜のおくらん　春海

おはさはのひともとの名は白菊のうつろひのこる色にこそしれ　千蔭

殘菊薰閨　なこりそとかをるまくらもあはれゝふせやの菊の秋におくれて　春海

霜後殘菊　霜さゆる閨のいたまのありあけの月かけかをるませのしらきく　千蔭

雨中殘菊　神無月しくれにぬれてにはふ菊雨をこふてふはしかあらぬか　仝

雪中殘菊　あはれてふとの千くさは霜かれてあまたにやらぬしら菊の花　契冲

月照殘菊　くれなゐに匂ふかうへのしら雪をのこれる菊のまかきにそみる　蘆庵

山家殘菊　神無月うつろふ菊に月さえてとのねかをるやとのこからし　仝

翫殘菊　のかれすむ身のたくひとて世の秋におくるゝ菊も哀とそみる　春海

惜殘菊　色もなくしをるゝ菊もかにめてゝなほ手折へきこゝちこそすれ　契冲

寄殘菊述懷　いつくとも秋のゆくへはしら菊の殘るかたみもいろかはりつゝ　宣長

散のこる菊も我身にたくへみんいたゝく霜やいつれまさると　春海

霜　れく霜にうつろひはてし菊みれは久しかれとも身をはおもはす　蘆庵

日かけさすかたへは消て軒たかきやかけにのこる霜のさむけさ　仝

よもきふも霜の花こそさきにけれ千くさにもれし秋なうらみそ　枝直

秋の色をはつかにのこす淺ちふのうらはたわにもれける霜哉　千蔭

露結爲霜　日影うとさかたへは霜となりにけり夕風さゆるをかの露はら　春海

朝霜　有明の月のひかりをさなからにしはふにのこすしもの色哉　千蔭

朝けたくわらやの軒のけふりにもなほきえかてに霜そのこれる　蘆庵

夕霜　夕しもの先やねくらん高砂のをのへにさゆるいりあひの鐘　長流

曉霜　よをさむみねき出てみれは有明の影にきはひて霜そねきける　土満

深夜霜　おきそはる軒乙の霜の深きよにきゝもまとはぬ鐘のこゑかな　春海

橋上霜　朝またき門田の鳥やあさりけん霜にあとあるまへのたなはし　仝

山路霜　かつらきや久米の岩橋よゝをへて幾代か霜をおきわたすらん　土満

樵路霜　山ふかみ霜ふむあとの一すちやこのはのおくの人のかよひち　契冲

杉路霜　柴人にしゑしれくれて朝霜もやゝとけわたるみねのかけゑし　宣長

野外霜　三輪山の杉のした道おく霜にひもろきまつる跡はみえけり　千蔭

草霜　花にみし千くさは霜にうつもれてあるにもあらぬのへの色哉　春満

寒草霜　神無月菊のきせわた取かへて春めく草におほふ霜かな　契冲

寒草帶霜　露分しなこりおもへは萩原やふるえの冬もあはれとそみる　千蔭

もえ出んはるまつしもの下草は長しと冬の日をかこつらむ　枝直

朝なさなれく霜しろきおきな草いたくもとしの老にける哉　千蔭

岡霜　夜をさむみねての朝けになかむれは初霜白し水くきの岡　蘆庵

原霜　在明のつれなきかけもかきりあるを朝の原のこれやあさしも　契冲

田霜　きのふかもをしねかりてし小山田にけさはや霜の花咲にけり　たみ子

冬くれは門田の水もかれてゝいなからしろく霜そおきける　土満

風わたるかり田のあせの霜くつれゆきゝの人の袖やさゆらん　自寛

篠霜　さゝの葉によるの霜ふる山きはゝいとゝわきさの音そさえやく　長流

松上霜　有明のきえにしかけを松の葉にしはしのこせる霜の色哉　千蔭

葉上霜　難波江の今はたかるゝあしの葉に霜の花さく色そさむけき　春満

庭霜　月はいりて庭のかれふにしはし猶のこれるかけは霜にそ有ける　千蔭

霜埋落葉　けさみれはにはのかたへのくち葉にそ所をわきて霜はおきける　契冲

山家夜霜　さよふけてきけはまくらの山からす羽におく霜や今はちふらん　枝直

閑庭霜　霜のうへにおくれてひと葉ちるれとも聞へかりける庭の朝もふ　仝

別れにしきのふの秋のしら露やはらはぬ庭の霜となりけん　千蔭

ねくら出てあさる小鳥の跡ならて跡なき庭の霜の色はも　仝

社頭霜　ゆふかけしさかきかえたにおきまよふ霜の花さへ香に匂ふらし　枝直

霜夜聞鐘　千蔭
人跡板橋霜　仝
寄霜述懐　蘆庵
氷　仝

おきそはるかはらの松のよるの霜を更行かねのこゑにしるかな
朝な〳〵おく霜しろき棚橋にたか別路のあとをみすらん
ふりそひてのこる色なき黒髪にみしやいつれの秋のはつしも
なつたにもすゝしかりつる山陰のし水よりこそこほりそめけれ

氷初結　千蔭
筑波ねの二をのあらしさえ〳〵てとはのあふみは氷ゐにけり
水結氷　枝直
よひのまにふりし時雨の小えたつみ落葉をとちてけさそ氷れる
薄氷　仝
散うかふこのえの風にまかせぬえ池のこはりやむすひそむらむ
氷滿　蘆庵
冬さむみ今えこはらぬ水もなしたきつひゝきや山かせのこゑ
厚氷　契冲
難波江にしをれて立るあしつゝのひとへに似たるうすこほり哉
朝氷　仝
あしのやのこやの池とや吹風のとつるこほりもひまなかるらん
夜氷　春滿
行かよふすはのあふみのあつ氷神のをしへし道はまよはす
月光映氷　筑波子
ひも鏡むすひ初ぬるけさよりはあさいせてこそみるへかりけれ
谷氷　契冲
よをさむみ氷やみつのころも川あつきからうへになほそかさぬる
をし鳥の妻とならひの池とてや月にこはりもあひやとりする　仝
霜をふむ山路のすゑの谷川にうすきこはりを又やわたらむ　仝

河上氷　千蔭
瀧氷　春海
なかるめるもみちをしはしとめんとて河とやはやく氷ゐにけむ
瀧のいとはよとみもみえぬ山河にあさせのこはり先そむすへる
たえ〳〵に水上よりそこほるらんはそくなりゆく瀧のしらいと　宣長
ぬの川の瀧のしらいとはつれすは岩根のこはりむすはゝれめや　契冲

池氷　長流
あしの葉にかくれてすみしこやの池の水もあらはにこほる冬哉
池水作鏡　契冲
かさゝきのこれや鏡の池ならんかたわれ月とみゆるこはりは
池水半氷　長流
ゆみはりの月のかけみし池水やなかはをわけてけさこほるらん
氷滿池上　契冲
又はとけ又はむすひし朝氷けさとちてぬひろさはのいけ
井氷　枝直
ふけゆかはさえやまさらんよひのまの板ゐの氷くみてしるにも
懸樋氷　春海
よのまにやこほりはつらん更ゆけは軒のかけひのおと絶にけり
葦間氷　枝直
水鳥のくかに鳴ねのきこゆるはあさるあしまやけさこほるらん
水路氷　契冲
杣川に山おろしさえて筏しのさをのしつくそ袖にこほれる
江氷　枝直
朝とにこほりかさねてなこのえのつなかぬ舟もなかれさりけり
江水初氷　契冲
なにはえのあしかりをふねさらに又さはり初ぬるうすこほり哉
湖氷　春海
つくはねの雪になり行あしたよりこほりそめたるとはの海つら

浦氷　志賀の浦やわしまの氷むすふ日は鴉のうきすもなかれさりけり　仝
汀氷　崎玉の池のみきはやこほるらんかもの羽おとのとほさかりゆく　枝直
澤氷　淺澤の朝な〳〵にとちはつるこほりの外の水やなからむ　契冲
淵氷　あすか河きのふの淵の薄氷けふはあやふみなくてわたらん　長流
岩間氷　山河の岩間のこほり瀬をせけは淵となりてや水もおとせぬ　仝
氷留水聲　をしかもの翹にかくる涙のおとも此頃たえてこほるいそ水　千蔭
水留流水　氷ゐておち葉にとつるいさら水けさは聲さへうつもれにけり　春海
山家氷　みなの川おとこそたゆれつくはねのよはのあらしに氷はつらむ　千蔭
氷閉細流　くみすてしあとよりやかてこほるこかた山もとのいさらゐの水　春海
氷閉山水　谷陰やいさゝ小川のひとすちはこほりて後そありとみえける　嵩蹊
寒氷閉藻　おひにせる細谷河の朝こほりいくへかむすふきひの山かせ　契冲
氷駐舟　あなし川むすふ氷のつかねをに瀨〳〵の玉もゝけさはみたれす　長流
冬田氷　みそれふるひらのをはわたさえくれて氷によとむ志賀の浦舟　春海
田邊氷　ひたのおとも絶ていつしらすしかうす氷結ひすてたる小田のかりいは　枝直
　　せきいれぬをたの時雨のたまり水れち穂を閉てけさそこほれる　仝

網代氷　もの〳〵ふの宇治のあしろきよを寒みいさよふ涙を先こほりける　秀倉
名所氷　あふみより朝立くれはたつの島やすの河せにこほりゐにけり　長流
諏訪湖氷　すはの海の氷のうへはなか〳〵に木曾路の橋のあやふけもなし　契冲
殘鴈　しくれつゝたのむかけなきうき雲にやとりかりかねぬれて鳴也　長流
曉殘鴈　霜けふる有明の月に空ゝれてまれなるかりのかすそしらるゝ　春海
雪夕殘雁　故郷をわかれかたみやおくれけんゆふへの雪にわたるかりかね　蘆庵
田殘雁　おくれきて山田のひつちふみしたきむれゐる雁の聲のさむけさ　枝直
寒草　秋はてゝ冬野の霜にしをれ行小草のさまそあはれなりける　たみ子
　　霜かるゝみふゆをよそに宮人のきぬにするてふ山あゐのいろ　千蔭
寒草疎　冬草にしひてはさけとくれなゐのあさはの野へのなてしこの花　長流
寒草少　なか〳〵にかれもはてなく秋の色のはつ〳〵のこる霜の下くさ　土滿
寒草纔　かつのこるみとりもはかな冬草のおのかゝれはに霜をへたてゝ　蘆庵
寒草藏水　かれのこるくさも有けり色かへぬ野への小松のかけをよすかに　枝直
野寒草　しをれふすあしのかれ葉にうつもれて澄ともみえぬこやの池水　蘆庵
　　かれ殘る冬のゝを花霜をさへおもけになひく色もさむけし　春滿

野徑寒草　ゆく人もすさめぬ野路に枯立てつれなくみゆるをみなへし哉　春海
原寒草　霜かれのあさちか原におひまする山菅のみそ色もかはらぬ　枝直
岡寒草　霜のうへの跡さへたえて冬はたゝかるゝゆきゝのをかのかや原　春海
白露の玉まくゝすもうら枯て夕霜さむき水くきの岡　宣長
杜寒草　たのみける千枝もかれぬる冬の霜いかにしのたのもりの下草　仝
庭寒草　くちのこる庭のを花の袖のしもはらふあしたの風そさえぬる　春満
吹風にみたれし庭のいとすゝきさけさはしもにそむすはゝれ行　春海
閑庭寒草　霜かれの庭のすゝきのひとむらはくさの庵りの身にそれひける　契冲
寒草處〻　かれゆきし垣ねのをさゝ軒の荻たえ〳〵さやく霜の朝風　春満
寒草風　霜さゆるのへのをきゝら今さらにかれたる風のおとそさひしき　契冲
嵐吹寒草　しもさむみれとたにたてぬ荻の葉をしをりにしをり吹嵐かな　千蔭
寄寒草述懷　世間はゆふ霜さやくおきな草かれてもやすき時なかりけり　眞淵
寒菊　霜の後にさくてふ菊の花なから下葉は秋の色やのこせる　春海
野寒菊　冬かれの野はおく霜の花よりも葉をめつらしみのこるむら菊　春満
寒蘆　津の國のなにはの蘆のかれぬれとそうらよりもさひしかりけり　眞淵

朝寒蘆　しら鷺のみの毛みたるゝ浦風にかれたつあしのおとむせふなり　蒿蹊
池寒蘆　おく霜はひとよふたよとみるかうちにのこる色なきあしの冬枯　蘆庵
濱寒蘆　朝氷むすふや涙のおとたえて霜にしつまるいそのむらあし　春海
江寒蘆　風さむみかれたつ池のあしのはにこほれる霜はふきもはらはす　春満
寒蘆滿江　よる涙しあしのかれ葉におとそへて夕風さわくおほよとのはま　春海
湊寒蘆　にほのすむふるえもけさや氷るらん立る村あしうちもなひかす　枝直
水鄕寒蘆　難波江はをれふすあしにうつもれて波もかれはの色にこそたて　蘆庵
蘆花似雪　みなとえにさはれる蘆も枯ふせはやかてを舟にこきしかれつゝ　仝
木枯　なかれえのをのゝふるえの名もさひし伊勢の濱荻霜かれしより　契冲
夜木枯　しら鷺のつはさの風にちるあしのふゝきもさむき冬の河つら　千蔭
吹からにおのれ木のはにさそはれて散行かたにさわくこからし　宣長
山家木枯　ちりはてゝむなしき枝をいつまてか吹すさふらんこからしの風　千蔭
椎柴　さむけしな山はひと葉のくまもなき月に吹のこる峯のこからし　春滿
この頃はいをねさりけり木枯にこのみおちくる山かけのいは　千蔭
冬こもるみねのしひ柴しひてたに寒さ忘れんよすかにそかる　春海

冬はまたくち葉ましりのおちしひをもみちの後の山つとにせん　仝
しひしはのみのなるはても世の人のゆくへにおなし烟之けり　長流

椎柴嵐

こからしにたへぬ木葉をよそにみてのこるもさひし嶺のしひ柴　千蔭
今朝みれは我ゐる山の木からしにおちしひゝろふ里のあけまき　仝

山さとにしひゝろふ

枯野

つゝくはねの緑はかりをむさしの〻草のはつかにのこす冬かな　眞淵

枯野曙

あけゆくや霞も霧もへたてなき霜のかれふのすゑもみえけり　千蔭

枯野朝

草の葉に秋みし露も玉きはるうちのおほのにむすふ朝しも　長流

枯野篠

おのつから千代の根さしを顯れてかれの〻をさゝひとり色なる　千蔭
若草のもえ出ん春のあらましをかれのにみする玉さゝの露　仝

枯野薄

もゝくさの色はかれの〻花すゝきほのかにのこる秋のおもかけ　宣長

枯野霜

霜やたひふるの〻千くさ枯ふして花にわけこしおもかけもなし　春海

前栽霜枯

冬深み霜にかれゆくませのうちの草葉からへをよそにやはみる　千蔭

寒松

ふゆふかき門のひと木の松にのみよもの嵐のなこりをそきく　仝

山寒松

山高みこすゑのかせの吹はらふ霜にわまきる松のむらたち　仝

寒松風

岩かとにたつや一木の松にのみのこるあらしのおとものすさまし　仝

寒樹

冬かれにさとのわらやのあらはれてむら鳥すたく梢さひしも　眞淵

寒樹風

日をさへし大河のへのくぬ木はら冬之風たにたまらさりけり　仝

寒樹交松

冬嶺秀孤松

たちならふこすゑをはらふ山風も散うせぬ松そしらぬかほなる　春満
もみちはゝ風にまかせぬ木ゝもなしひとり尾上の松をのこして　春海

寒松積年

ことそとも松はおもゝてへにけらし時雨も霜もよきぬものから　枝直

冬月

寒月同

風さむみゆふしもこほるならのはの落葉かうへをてらす月かけ　千蔭
冬のよは霜にくもれる月よりもあらしにふけしかけのさむけさ　春海
夜をさむみ霜やふるらんてる月のさやけきかけの薄くもりぬる　蘆庵
かさゝきのわたせる橋の霜の色とゝもにさえゆく冬のよの月　土満
ふゆのよやあふけは空はてるけくて手にとるはかりさゆる月影　枝直

冬月冴

木からしは吹よわる松の霜の上にをさまる月のかけそさえゆく　春満

冬暁月

みれは又長きをかこつ冬のよもあけかたをしき月のかけかな　宣長

暁寒月

きのふこそねさめとひしかおもとたてぬ荻のかれはの霜の月かけ　千蔭

霜暁月

大御門ひらく鼓のおとすみてみはしの霜に月そうつろふ　仝

冬寒月

さよふかみ影ものきはにかたふきてつらゝにすかる月の寒けさ　宣長

冬明月　天河水よりいて〻水よりはさむきこはりとすめるよの月　長流

霜夜月　さをしかのしからみふせし萩原やふるえの霜をてらす月影　千蔭

寒夜月　染はて〻ちりし木のはの霜のうへに月の桂はてりそまされる　枝直

雲間冬月　風さわく雲間のかけを吹ませてあられちりくる月のさむけさ　宣長

雨後寒月　木からしにゆふへの雨の雲つきて軒のたるひをてらす月かけ　千蔭

風前寒月　れは空は嶺のあらしにさえ〳〵てのきのたるひに月そうつろふ　仝

葉落月明　よをへつ〻庭におちはのつもれむや木のまの月のかけそ晴らん　枝直

月出寒山　雲もなく山のはゝるゝ雪のうへにいてやすけなる冬の夜の月　契冲

山寒月　聲たてぬ嶺のをしかのあとみゆる霜にふけゆく冬のよの月　千蔭

寒閨月　いかにねんよもきかねやのかたひさしさしいる月も氷る霜よを　枝直

山寒月　敷妙の袖のこはりとなりにけりねやのひまもる冬の夜の月　春海

河冬月　すみかまの烟はうすくなりにけりふけゆくまゝに月のさゆれは　枝直

清瀧やこはらぬみをのひとすちをとめてうつろふ月そさやけき　千蔭

山河にうきてなかるゝもみちはゝちりても月のくまとこそなれ　土満

さえわたるかけは流さし河の上のこはりを月のしからみにして　蒼生子

海冬月　箱根路やせきのよあらしさえ〳〵て月かけこはるいつの海つら　千蔭

海邊冬月　霜かれの伊勢の濱荻かりはて〻くまなき月にたつそ鳴なる　契冲

湖上冬月　ふゝきせしいふきおろしのさえくれて月にしつまるよこの浦浪　眞淵

水郷冬月　さゝなみや志賀のおほわた氷るよも月のみ舟はよとまさりけり　たみ子

寒流帶月　冬かれしあと河柳えたをなみ水のくまなくこはる月かけ　長流

みむろ山しくれも今やはれぬらん立田の河に月そこはれる　枝直

冬月浮水　冬のよもこはらぬみをのひとすちをよすかにやとる月そ寒けき　千蔭

寒流帶月澄如鏡　霜こはるあしのかれ葉に風さえて月すさましき淀の舟なみ　春海

池上冬月　下をれのかれ葉はなみにうつもれて月にさはらぬ池のむらあし　仝

森冬月　うすこはりむすひもあへぬ早きせにひもかゝみともみゆる月哉　千蔭

庭上冬月　うすらひの下になかるゝもみちはをよるさへみする池の月かけ　仝

閑庭冬月　霜かれのねふりのもりの下はれてゆめちくまなくさゆる月哉　契冲

　　さよ中とよはふけぬらし我やとの庭にしもおきてさゆる月かけ　眞淵

　　かれわたる庭のしはふの霜の上にふけゆく月をみんともゝかな　千蔭

　　あさちふの霜には跡もなかりけり月のみひとりとひならしつゝ　春海

故郷冬月　破林霜後月　　さとはあれてくまぬ古ゐの氷るよは月さへ影をとゞめさりけり　仝

名所冬月　　いつしかと霜をかち葉にふりかへて梢くまなき冬のよの月　仝

社頭冬月　　すはの海や雪けの空の雲間より氷をてらす月のさやけさ　眞淵

冬殘月　　天なるやまなゐの水もこはるらん五十鈴の宮に月さえわたる　土滿

霰　　山ゐにすれる袂の霜さえて月かけこほる賀茂のみたらし　千蔭

　　窓の月さしいるかけもさえしよのなこり身にしむ有明のそら　宣長

霰如玉　　かつきゆるものとはしれと玉霰しはしをたにとひろひてそみる　古道

　　色もなき野へのかれふもわはれ也玉かとみえてあられふるころ　千蔭

夜霰　　とるからに露とけぬるを白玉となはあさむくは霰なりけり　契冲

聞霰　　おとはして軒はのあられちる玉のひかりもみえすくらきよの空　宣長

山霰　　なには人ねさめてきけはあしの葉にしは風こえて霰ふるなり　契冲

深山霰　　やまかせのにはかにさそふしもと原梢みたれてあられふるなり　春海

野外霰　　山かつら玉のをとけてまきむくのあなしのひはら霰降なり　長流

原上霰　　あられふるかれの〳〵薄袖せはみぬしさたまらぬ玉もひろはす　契冲

　　ありま山うきたつ雲に風そひてあられたゝしるいなみの〳〵原　眞淵

篠霰　　かきくらしふるや霰の玉さゝにたまるとれみはかつくたけつゝ　春海

柏霰　　閨近き葉ひろかしはにおと立て霰もうたぬゆめそやふる〳〵　契冲

竹霰　　霜こはるいさゝむら竹さらく〳〵にあられふるよは夢もむすはす　春滿

竹間霰　　露ちりし秋のあはれもいつしかとあられにさわくいさゝむら竹　枝直

關路霰　　をとめらか機れるまとのさゝの葉に手玉みたれてちる霰かも　千蔭

田邊霰　　關の戸のひまふく風に床さえてもらぬあられに夢そくたくる　自寛

海邊霰　　かりのこすおくてのいなは打なひき田のもはるかに霰ふるみゆ　千蔭

瀧邊霰　　住よしのあられ松原わたつみのわか玉にとやちるを雲つらむ　契冲

行路霰　　瀧つせの岩にくたくる玉のこゑ空よりれちてふるあられ哉　仝

山家霰　　わけゆけはむこの山風さえ〳〵て袖に玉ちるあられ松はら　枝直

屋上霰　　もみちさへしくれはてたる山里のなかめかしはにあられふる也　契冲

屋上霰　　わしのすむあら山風のふくなへにすゝのしのやにあられ降なり　土滿

寐覺霰　　ふり過る板やの軒のくちめにそしはしあられの玉はのこれる　蘆庵

寒閨聞霰　　降とみしねやのあられは夢なれやさむる枕におとものこらす　仝

　　よもすからひまもる風のおとさえて枕とよもしふるあられかな　土滿

千鳥

おもふとありそのちとりしら涙のよるをねられぬ物となく也　長流
かまくらのよるの山おろし寒けれはみなのせ川にちとり鳴なり　眞淵
よしの川水はこほりにおとたえてたちつかふちに千鳥なくなり　土滿
すみた河舟に筏にさをなれてあさるちとりの所かへすも　枝直

月前千鳥

すむかけのくもるとみれはかつはれて月によこきるむら千鳥哉　春海
あらいそのなみにくたくる月かけを翅にかけてなく千鳥かな　千蔭

殘月聞千鳥

わたの原おきつしほ風さえ〳〵て有明の月にちとりなくなり　土滿

風前千鳥

水くらきすさの入江のすさまし く松ふくかせにちとりなくなり　契沖

曉千鳥

川涙のこほりにむせふあかつきにちとりの聲そたかくきこゆる　蘆庵
なくこゑもあくるうらわの月かけも涙間にきえてゆく千鳥哉　宣長

曉天千鳥

おきつ風雲ゐにふきて有明の月にみたるゝむらちとりかな　春海

曙千鳥

妹か島あかぬわかれになくちとり月やかたみのうらのあけはの　宣長

朝千鳥

涙まくらとゝひすてゝしのゝめのわかれはかなきともちとり哉　仝

夕千鳥

夕なみのおとも かしまの浦風にしたなくちとりおりもさためす　枝直
うきものとなにおもはまし磯まくらゆふなみちとり月になく頃　春海

夜千鳥

波のおとにうきねの枕夢さめてこゝろすむよをとふちとりかな　仝
大淀の松のあらしやつらからしよりてはかへるさよちとりかな　千蔭

寒夜千鳥

風あらくあられふるよのいそちとり千〻に乱れてなくね悲しも　仝

深夜千鳥

妻こふるこゑも高師のはま松のまつよふけぬとちとりなくらし　宣長

終夜聞千鳥

いつかたによるともなしによもすから浦洲の千鳥うらふれ鳴も　土滿

千鳥驚眠

川口の關のせきもりさそなねしゆるす千鳥のよるのかよひに　契沖

寢覺聞千鳥

住よしの松かせさむみねさむれと心はそ江にちとりなくなり　仝

聞千鳥

河風にさは山おろしふきあひてふるさとさむくちとりなくなり　仝

尋千鳥

浦つたひとめつゝゆけと大淀のまつよりつらきともちとり哉　千蔭

遠千鳥

なくこゑも涙にまきれてはる〳〵とゆくかたしらぬ浦千鳥哉　宣長

千鳥聲遠

たまのうらはなれをしまの友千とり聲きくはかり涙そしつけき　枝直

近千鳥

あらいそにすたつちとりもなれぬれは軒はにあさる海人の家島　仝

名所千鳥

なれも又ともなし千鳥こゝにきてなるをの松のねにやなくらん　長流
水きよみいくよをこゝにすみた川上つ瀬さらぬともちとりかな　千蔭

湖上千鳥

あまのこのねぬよの床の浦千鳥なかぬ袖にも涙やかくらん　契沖

海邊千鳥

室の浦の夕なみちとり鳴島のありとやこゝにこゑもをしまぬ　仝

夕されはうなかみかたのおきつ風雲ゐに吹てちとりなくなり　眞淵

湊千鳥

みなと江におひてまつまのかち枕ねさめさむけくちとり鳴也　公庸

浦千鳥

袖のうらやもろこし船もよらなくにみなとにさわくむら千鳥哉　宣長

濱千鳥

よる涙にみたるとすれと浦なれてまたゝちかへるむらちとり哉　春海

いつかたにつまやねきつの濱ちとり涙のよる〳〵鳴そうらむる　春海

よる涙に聲たてそへて夕しほのみつの濱邊にちとりなく也　宣長

磯千鳥

こゆるきのいそきてたてとむら千鳥波のあとにそ聲はきこゆる　蘆庵

崎千鳥

あられふりかしまのさきのあら波になるれはなれてすむ千鳥哉　千蔭

島千鳥

さよちとりかたみの浦に跡とめていもか島をやなきわかるらむ　枝直

潟千鳥

冬のよの月かけふけてひくしほの遠つひかたにちとりなくなり　蘆庵

津千鳥

よる波のしき津のちとりむれ立となほこりすまにおりゐてそ鳴　仝

川千鳥

河島によるかとすれと立歸るちとりやなみとおもふとちなる　春海

千鳥驚波

風さむみ前のを河の水かれて心はそくもちとりなくこゑ　枝直

むら千鳥いつれかやすの河風にしきなみたちてゐるはとそなき　契冲

千鳥驚船

船中聞千鳥

いつて舟今やよすらんさよふけて入江のかたにちとりしはなく　千蔭

海路千鳥

船とむるいそ山かけのむらちとり波のよるこそあはれそへけれ　春海

泊千鳥

難波つをこき出し日のとも千鳥いくよねさめをとひなれにけん　千蔭

旅泊千鳥

百舟のはつるとまりの友千鳥たちゐいとなき聲そきこゆる　仝

關路千鳥

かちまくらとゝふものは故郷になれしねさめの友ちとりかも　枝直

行路千鳥

すまのうらやぬる關守の夢路をはおのれゆるさぬさよ千鳥哉　宣長

千鳥有跡

しほの山うちこえきけはゆふちとり月もさし出の磯になく也　長流

千鳥留跡

誰にかも數はよめとてむら千とりつくゑのしまに跡はふみゆく　契冲

寄千鳥祝

跡つくるありその海の濱千鳥まさこのかすをよむかとそみる　仝

衾

住のえのきしの松かせはまちとりともにや千代の聲あはすめり　枝直

寒夜衾

さゆるよもふるき衾はかひそなきいねかてにのみ思ひ重ねて　春滿

寒夜重衾

蔭たのむ松にあらしのさむきよもなれてとたるあさてこふすま　枝直

水鳥

かさぬれとあさてこふすま下さえて霜夜おほゆる麻手小袋　蘆庵

岩間にはつらゝむすへるかた淵につなかれぬ鵜の河かつくらん　枝直

そこひなき水の緑にすみなれてかものあをはの色もかはらす　土滿

夜水鳥　世をわたる人しもならへ水鳥のやすくそなみにうきしつみする　春海

寒夜水鳥　山河ははやくこほりやとちぬらんさとわの水にかもそむれゐる　千蔭

深夜水鳥　よをさむみこほりはつれは池なからくかのまよひに水鳥そなく　契冲

月前水鳥　夜もすから霜吹かせのつるき羽も寒さはらはぬ池のをし鳥　仝

夜思水鳥　みきはよりこほるもしるくさよ更てとほかさかり行水鳥のこゑ　仝

朝水鳥　くたけちる氷とみえて水鳥の羽風にさわくいけの月かけ　蘆庵

水鳥帶霜　をし鳥もいかほの沼のいかにねんこほりのとこの霜のふすまは　契冲

水鳥拂霜　なつみ川夏はきのふのやなせよりけさはおちくる水鳥のこゑ　長流

氷閉水鳥　釼羽に毛をふく風ををし鳥の霜すさましきよとやわふらん　契冲

池水鳥　池水にをしやわふらんおく霜をはらふ羽風もおなしさむさに　宣長

氷さへかたくやむすふおもひ川つかへるをしのなかのちきりに　契冲

としさむき池のみきはの松かねにかもの青羽もあらはれにけり　枝直

葦間水鳥　池ひろみちりてうかへる紅葉はのにしきをかつくあちのむら鳥　千蔭

水鳥遊藻　難波かたあしまの床も霜かれてぬるよなけなるをしのこゑ哉　筑波子

にほ水の玉藻のやとをかるの池も氷らぬほとのなにこそ有けれ　長流

江水鳥　さすさをの音になれつゝ船きはふ入江のかものたちもさわかす　枝直

海水鳥　なにはめをおのかつまとはなけれともきつゝなれたる浦の水鳥　長流

澤水鳥　こすけかる人もやかよふ澤水にところさためぬかものむら鳥　春海

河水鳥　あつこほりひまもなつみの河淀に床しめわひてかもそなくなる　宣長

河瀨にをしなく　夜をさむみつかはぬをしの聲す也岩ねの水やこほりそむらん　春海

水鳥驚筏　杣河やくたす筏のみなれさをみなれてもなほさわく水鳥　宣長

水鳥知主　巣たちせし池の雁の子年をへてぬしわくはかりなるゝわはれさ　春海

一鳥過寒水　上つせのあらしやいかにはやからし友まとはせるみさこなくこ　千蔭

鴉　たゝひとりうきすやたとるむらあしのかるゝ川とを過るには鳥　仝

鴨　かつまたに冬もなほゐる鴉鳥やつれなしくさのねにかよふらん　契冲

鴛鴦　鴨とりのおのか名におふ河水にすみていくよをなれしうきねや　蘆庵

寄水鳥述懷　枕よりあとよりさゆる河風にせんかたなみのをしのうきねや　契冲

網代　水鳥のところさためぬやとりをもうき身の上にたくへてそみる　春海

網代木をつひのよるせとさためこしひをのちきりのうちの川波　長流

袖さゆる氷をうちのあしろ守わくれはいつるひをやまつらん　宣長

大君のみけに備ふるひをなれてあしろ守をちかわさそかしこき　千蔭

夕網代

波のうへのあしろの篝しらむよになはこかるゝはもみち也けり　春海

夜網代

川上の山のかけよりくれそめてあしろのきりにゝほふかゝり火　蘆庵

もりあかすよ床やわふる網代人ともすかゝりのひをたのみつゝ　春海

宮人にひをたまふなる時なれやあしろのかゝりかすそはり行　千蔭

名所網代

あしろ人衣手さむし川上のたなかみやまにあらしふく頃　仝

網代寒

埋火のもとにも風をいとふ夜にあしろもる身もあれは有けり　たみ子

紅葉留網代

紅葉葉のよるなる時はさとの名を身にはしらしなあしろもる人　千蔭

紅葉葉の流れてとまるあしろ木はひをのよるさへ赤くそ有ける　枝直

網代雪

橋姫のこかるゝ袖の色なれやせゝのあしろによするもみちは　千蔭

かきくらし日をふる雪に田上のあしろもるをの袖やさゆらん　自寛

網代興

うち河やひをにもみちにあくかれてたえすよりくる都人哉　千蔭

霙

しくれにも雪にもよらぬうき雲の中空にてやみそれふるらむ　長流

風さむみ霙もこゝらふりにけりけさよりたれか冬こもるらん　古道

山家霙

雪になるたかねはもやくましろにて麓のさとにみそれふる也　春海

雪

はしたてのくらはし山に雲きらひ高市國原ゆきふりにけり　眞淵

春ならてあらしものとはおもへとも空に花こそ散まかひけれ　筑波子

もゝしきや玉のみきりにあとつけてけふはつ雪をいはふもろ人　春海

ふりつもるけさのひかりに月花もおもひけたれてむかふしら雪　蘆庵

待雪

めつらしき小島をそみるとまやかた雪をつみつゝくたる河舟　千蔭

初雪

見わたしにたてるをかへの一つ松まつはとすきす雪はふらなむ　契冲

武蔵野はまたかれのこる草もあるをちゝふの山に初雪そふる　枝直

身につもる老をわすれてとし〳〵にめつらしとみる庭の初ゆき　蘆庵

初雪はうれしかりけりいさゝめにふるもとも待よすかと思へは　春海

朝初雪

うすくものきのふの空のあらましにあくれはつもる初みゆき哉　千蔭

葉上初雪

けさみれは塘を出るむら鳥のつはさまたらにはつもきそふる　仝

山初雪

色なから木の葉ちりしく苔の上にみそむるゆきのめつらしき哉　春海

山家初雪

またれにし雪をみそむるあしたより月にうかりし山もなつかし　枝直

たちいてゝひろふつま木に折そふる花とみるまてふれるしら雪　仝

けふよりは都の人もまちて見んはつゆきふれりうちの山里　春海

嶺初雪　高ねにはもつ雪ふれりわか園の小松かうれにいつかみるへき　千蔭
松上初雪　ふるほとのしはしは風もおとたえてまつにみそむる雪の曙　枝直
行路初雪　かれはてゝこまもすさめぬ草をたに猶とめてかふ野路の初雪　契冲
橋上初雪　初みゆきまたわさむつの橋の上にけさしもたれか跡つけぬへき　千蔭
水路新雪　とまり舟笘のしつくのおとたえてよはのしくれそ雪になりゆく　春海
淺雪　庭のおもの苔路はかりは埋れてかれふのすゝき雪にさやけり　仝
雪未深　あすといはゝ路や絶なん降雪にとひもとはれもけふこそはせめ　枝直
曉望山雪　さえ〳〵てあくるよしのゝ山かつら雪にそかゝるみねの白雲　宣長
曙雪　ねくら出しみ山からすのうちみたれなかめをそふる雪の明はの　枝直
朝雪　雲はるゝをのへは雪にあちはれてまたあけはてぬ山もとのさと　春海
雪朝　あけぬれと朝日もしはしうつもれてかけまつ峯の雪のさむけき　宣長
夕雪　山かけのねくらを出る朝鳥のはふきにこはす木〻のしら雪　蘆庵
　　かた山のまきの葉しのきふる雪をつはさにかけてたつからす哉　千蔭
　　初みゆきはれたる朝にみわたせはさとのけふりもめつらしき哉　眞淵
　　庭のゆきとひこし人のつれなくもあとさへつけてかへる夕暮　宣長

薄暮雪　くまもなくふりつむゆきの空はれてよそにきゝなす入相の鐘　枝直
夜雪　まつほとのおもひをみせてつもるらしこぬゆふくれの軒の白雪　たみ子
深夜雪　かけはるゝ月たにくまもあるものをよをましろにもふれる雪哉　仝
深夜聞雪　あけやらぬ閨のいたまのはの〳〵と白むは雪のつもるなりけり　枝直
夜寒知山雪　さよふけてねくらの鳥のうちはらふはふきに雪のおとをきく哉　千蔭
雪似月　さよふけてはひかちになる埋火にみ山の雪もおもかけにみゆ　仝
月照雪　おきいてゝわかつきふかくみし雪のけさまて月にまかふ庭哉　眞淵
山月照雪　山のはのゆきにむかへるとも鏡よるさへみよとかくる月かけ　契冲
寒月映雪　あしからや八重山風に月はれて雪さやかなるみねの岩かと　千蔭
風前雪　草も木もゆきのこゝろにまかすれとうつみかねたる月のかけ哉　契冲
聞雪折　かせませにふれはそなひく初雪とおもるともなけすゝのしの原　仝
　　高砂のをのへのかねの鐘の後にひゝくをきけは松の雪折　長流
　　くれ竹のよるの衣はさむけきをおもきにたへぬ雪折の聲　契冲
雪深　笹の葉にふりしくおとのきこえぬはふかくやなりしよはの白雪　蘆庵
積雪　とはまくもあとをしむまのやすらひにわけかたきまて積る白雪　宣長

連日雪　月も日もよそにへたてゝふりぬれとよにひかりある雪のこの頃　たみ子
雲間雪　箱根路や雲の絶間にみわたせはむつ雪ふれりみねの岩かと　千蔭
雪似白雲　すみそめのゆふへの雲の絶間よりなはくれのこる峯のしら雪　春海
朝たゝはさてやみわかんしら雲のゆふゐる山の雪のまかひは　契冲
箱根山ところもさらぬしら雲はこの頃つもる雪にさりける　千蔭
雪似花　ゆきふれはやへかさなれるむら山もひとよのほとに花咲にけり　仝
雪懸林頭見有花　たちよらはかをりやせまし花とのみゝ山はやしにつもるしら雪　仝
山雪　朝またきみわたす山のしら雪にあとつけそめてとふからす哉　宣長
山中雪　山みれはまゆしろたへに雪ふれりすむ人さへやおいはてぬらん　契冲
暮山雪　つたの葉のしけりしよりもわけかねぬうつの山への雪のした道　長流
深山雪　くれそむるふもとのさとのともし火にあらそふ嶺の雪の色哉　千蔭
遠山雪　雪ふかみ山ちとゝもに絶ぬへしたきゝこるをのやとのけふりも　契冲
遠山見雪　東路やくもゐにみゆるひとむらをなにそとゝへはふしの白雪　宣長
住のえの浦わのなみにまかふまて雪かすかなるあはちしま山　春海
見わたせはふりつむゆきをありあけの月にみかける玉のよこ山　千蔭

嶽雪　ゆふされはさやの中山風さえてあはゝかたけにふれるしら雪　土満
岡雪　むさしのゝを花おしなみ雪ふれはむかひのをかそ山とみえける　契冲
夕月夜おもふにのこるかけたあらしけさやをかへの松のしら雪　長流
ふりもせぬ外山の松につもれるや葉こしにみゆる峯の白雪　宣長
峯雪　あらち山やたのゝあさち枯しよりふもとにさむくあわ雪そふる　契冲
麓雪　かひかねのけさより白くみゆめるはよはのしくれや雪と成けん　春海
雪滿高根　關こゆる八十氏人のぬさなれやはこねちとほくつもるしら雪　千蔭
雪滿群山　いつる日の光にむかふむさしねやをみねと〳〵雪そさやけき　仝
名山雪　千早振かみもおもひの下こかれうへはつれなきふしのしら雪　長流
山深雪　冬ふかみよもの雪のみしらまゆみふりもかよはぬこしの山里　契冲
足柄山雪　たひころも衣手さむしあしからの關吹こゆる雪の朝かせ　春海
野雪　あまきらひみ雪ふれゝは打わたすのへの限もしられさりけり　春郷
原上雪　雪はまたおもかけはかり降そめて靡そはてぬまのゝかやはら　契冲
野徑雪　松もひきわかれもつまんはるまては雪にまかするのへのはそ道　枝直
ふりつゐる枯野の道の萩かえをわけゆく袖は雪の花すり　宣長

野亭雪　降まゝにのへのたかゝやをれふしてみわたしとはき窓のしら雪　枝直

柚雪　おしなへて梢の雪となるときはくち木のそまも花さきにけり　春海

山路雪　つもりてはなか〳〵人の跡みえて雪にまよはぬふゆのやまみち　宣長

樵路雪　花ならはあすのけふりやかをちましつま木にかゝる嶺のしら雪　千蔭

關雪　ふりつもる雪のひかりにはかられて關路の鳥やよはになくらん　宣長

行駒の跡たにもなし鈴鹿山けさふりうつむ關のしらゆき　自寛

みわたせむすまのうしろの山風に雪うちゝれる關のあらかき　千蔭

關路雪滿　いかにせんもらゐゆきゝの道たえて雪を關なるあしからのやま　春滿

雪も又八重山とはくふりつみてすゝまぬ駒のあしからの關　宣長

關路朝雪　朝はらけ關路こえゆく東人の荷前の箱に雪そつもれる　蒿蹊

足柄關雪　たひ衣雪にさはひて出たつやむちうつこまのあしからの關　千蔭

行路深雪　なか〳〵に木のね岩かとうつもれてやすけにみゆる雪の山道　春海

雪埋路　あはれしる人やわけゝむさかつむゆふへのゆきに跡もありけり　枝直

旅中雪　おもひやれみやこの山も雪ふらはこひしさつもるたひの心を　千蔭

雪中旅行　ふるゆきのぬさのれひ風しるへする道とてゆかは猶やまとはん　宣長

馬上雪　行なやむ山路もしらてけふの雪ふるさと人やいかにみるらん　長流

車中雪　花ならはひつめもかにやにはは雪ふみわくるかひのくろ駒　千蔭

水邊雪　たそかれのしのひ車のすきかけもれもなきはかりつもる雪哉　仝

氷上雪　花とちるおはちの雪をを車のをすかゝけつゝみるひとやたれ　仝

川雪　すみた川水のうへにもふるゆきのきえのこれるはみやこ鳥かも　枝直

水上をとつるこはりにつくはねの雪やつもりて淵となるらん　契沖

みてそしるけさのしくれは川上の雪つみそへてくたすしは舟　蘆庵

刀根河やきえせてなみになかれゆく雪にもけさはうは濁せり　春海

海邊雪　濱ゆふも埋れてしら雪のもゝへにつもるみくまのゝうら　宣長

海邊松雪　松の雪つもりてはるゝ曙にみやこわするゝあまのはしたて　契沖

浦雪　かつちりてつもりもやらぬ松の雪たかうちはらふ袖のうら風　宣長

塩竈浦雪　かきりなきくもゐにつゝく雪のうちも烟にしるき塩竈の浦　千蔭

濱雪　たひねせんやとのしるへもかきくれて雪のをりしくはせの濱荻　枝直

けさみれはきくの濱松名もしるくつくしのわたをきする白雪　長流

湖邊雪　みわたせはやそのみおともくまそなき雪にわけ行にほの海つら　春海
島雪　眞梶とるたもとに雪をはらひつゝさしてこきよる笠ぬひの島　仝
孤島雪　伊豆の海にひとむらきえぬうたかたやみゆきつもれる浦の初島　千蔭
江雪　ふりつみておもるしつえのしら雪にしら浪つゝく住のえの松　宣長
江天暮雪　なにはえはくれそめてなは雪の色にゆふへをのこすわはち島山　千蔭
古渡雪　まくらかのこかのわたりを朝わたり河せにふれる雪をみる哉　仝
瀧雪　あらし山松はみゆきにうつもれてとなせの瀧に聲そのこれる　仝
船中雪　島山はつもるもみえすかきくれてともふねしろき雪のうなはら　宣長
名所雪　ふるゆきにあこかれいて丶みなれさをさすとはなしに行心かな　枝直
　　あしからやあしの海つらこほる日は神のみさかに雪そふりける　春海
　　うちわたそ横山かけてふる雪にひとすちのこるた多麻川の水　千蔭
　　とひこかし木毎に雪のふるさとは春にもまさる志賀の花岡　宣長
里雪　はれまなく日をふる雪にくれ竹のふしみのさとは道やたえなん　蘆庵
市雪　いこま山嶺のこからしおとたえて雪しつかなる秋しの丶さと　千蔭
　　朝ほらけなにたかへましひんかしの市のうゑ木につもるしら雪　仝

市中雪　ゆきかよふさとの市女か笠のはにはらひもあへすつもる雪哉　春海
山家雪　山さとに雪みる日こそ世の外にふるかひありと思ひしられ　仝
　　我岡にみゆきふりけり玉たれのをすかゝくらん都かた人　千蔭
山家深雪　山さとのきのふのこのはけふの雪いつれかやくとゝふ人もなし　契冲
山里雪　こん人はおもひもかけぬ山さとにともまつ雪やたれになりへる　春海
山館見雪　雪ふれはさくやうめつの山さとにはとぬ花は人もとひこそ　眞淵
閑居雪　空はれてふく山風に今も又ふるやのきはの松のしらゆき　宣長
　　たちよれはなほしはの戸はさしなかちかとかましき松の雪哉　千蔭
閑庭雪　世にそむくやとゝや雪もへたつらんけさは隣もみちみえぬまて　春海
庵雪　まれにたにとはれぬやとは日をふれとつもれるまゝの庭の白雪　宣長
　　冬こもるいほのとはそをまれに明て竹にかゝれる雪をみる哉　眞淵
庭上雪　とひくへき人しなけれは庭の雪に心かれぬくさの庵かな　春海
庭雪厭人　降ゆきに庭のまかきはうつもれて外山をしめのうちにこそみれ　枝直
　　雪にけさあとをいとふやとはれぬをうらみしほとの心にも似ぬ　千蔭
庭雪似月　わすれては月とみつゝもかりたちて跡つけぬへき庭のゆき哉　仝

田家雪　くちのこる門田のなるこれとさへもうつもれはてしけさの雪哉　春海

都雪　とよとしのあかたのみつきとはてゝ賤かふせやの雪そしつけき　千蔭

　來てもみよはるの錦の色よりも木ことの雪の花のみやこを　宣長

禁中雪　あけみとり行かふ袖にうちゝりて都おほちの雪そはえある　千蔭

　こん春もちかきまもりのさくら花れもかけみせてつもるしら雪　宣長

　百敷やゆきうちはらふ朝風にみはしの櫻ちるかとそみる　春海

　かさゝきのみはしの雪に跡つけてくもゐにのぼる心地こそすれ　千蔭

禁庭雪　さくら花さきてちるかとみるはかり近きまもりにふれる白雪　枝直

故郷雪　もゝしきやみはしのさくら春またて咲かとみゆるけさの雪哉　千蔭

故郷雪深　みよしのゝ故郷とてやさえくらす雪けの空もあれてみゆらん　契冲

社頭雪　さらぬたにとふへき人もしら雪のいとゝふるさと跡やたえなん　春満

　武藏の海よせてかへらぬ涙かともいはゐのもりにつもるしら雪　千蔭

　雪そとゝきえての後やしらゆふにさなからまかふもりの榊葉　宣長

神社雪　みたらしの岩うつ涙もうつもれて雪しつかなる賀茂のみ社　春海

　かしまかた神のみむろにうちよせてかへらぬ涙は雪にさりける　千蔭

古寺雪　さゝ涙やひら山風のはやけれは横河の寺にみ雪ちるなり　仝

雪中古寺　山のおくにおこなふ道や絶さらん鐘のおとするゆきのふる寺　宣長

杜雪　身のよそにいつまてかみん東路のおいそのもりにふれるしら雪　眞淵

　風ふけはゆるきのもりにちる雪をねくらの鷺のたつかとそみる　春海

　しつけしな杜の名におふこからしのおとも梢も雪にうもれて　春満

杜間雪　むらさきのねくらあらそふ聲はやみてゆるきの杜のよはの雪折　契冲

山樹雪深　山松の枝もとをゝの雪の花人もたをらすおのかしたをれ　長流

嶺樹雪深　山櫻ふゆのこすゑもさきもせしよしのよくみよ嶺のしらゆき　仝

雪埋樹　朝はらけ雪のこすゑのおもかはりわれしら山にいつかきにけん　契冲

樹頭雪　月やのこる花やさきぬと朝戸出におとろかれぬる木ゝの雪哉　千蔭

雪埋落葉　わかいほの庭には跡もなかりけりおち葉かうへにふれるしら雪　眞淵

遠村雪　野も山もふりつむ雪の空はれてさとのしるへとけふりたつみゆ　枝直

　けふりさへあまきる空にうつもれて雪にくれゆく遠方のさと　宣長

　今朝みれはさとは有けり遠かたの雪にをれふすたかむらのおく　千蔭

松上雪　松の葉のはるひとしほの色そふや今ふる雪のそむるなるらん　枝直

ねくら出るからすもけさはしら鳥のとは山松の雪の明ほの　宣長

松雪深

菊にこそわたはきせしか雪ふれはあたゝかけなる松のうへ哉　契冲

雪埋松樹

ふれむかつはらふとすれと吹風もつもるによわる松のしらゆき　宣長

翫松上雪

いつはとはわかぬみとりもうつもれて下にはるをやまつの白雪　仝

雪作松樹花

晴雪落長松

あるかなかに松に積れる白雪は千年みるともわかしとそ思ふ　千蔭

杉雪

雪ふれは春さへさかぬ松かえを心をさなく花とみしかな　契冲

檜雪

梢よりたるひのしつく落そめてやかてこほるゝ松の雪かな　千蔭

常磐木雪

なく鳥のこゑもうもれて稲荷山くれしつかなる雪の杉むら　春満

竹雪

三輪の山うつむ梢も神さひてしるしまかはぬ杉のしら雪　宣長

ふる雪の友まつはとはまきもくのひはらもいまた埋れさりけり　枝直

わひしらにおのか友よふ山はとのこゑはうもれぬ雪のしらかし　仝

色かへぬ竹のみとりもうつもれて千代をこめたるそのゝ雪哉　春海

くれ竹にねくらをしめてぬる鳥のふしもさためぬ雪折の聲　契冲

ふるまゝにをれふす竹の枝さえて雪よりまとのひかりとちぬる　春満

しめおきしまかきになひくくれ竹のよにめつらしくみゆる雪哉　眞淵

竹雪深

なひけともをれはてもせすなよ竹のつよき心そ雪にみえける　たみ子

雪埋竹

さえたのみおもけにみしも降そひて雪の山なす軒のくれ竹　葛蹊

雪滿衣

をさゝ原うつもれてゝいふせさを雪にわするゝ窓のうち哉　千蔭

雪中遊興

雪みんとわかの浦わにたち出てしらすきにけり鶴の毛衣　たみ子

野も山も冬はさひしとそもひけり雪にこゝろのうかるゝものを　眞淵

雪山のきえんきえしをいつしかとなおほつかなくもふる日數哉　春海

軒の松まかきの竹もありなから雪ふみわけて雪をこそみれ　枝直

雪中眺望

雪はるゝ朝けにみれは不二のねのふもとなりけりむさしのゝ原　眞淵

ふちね日もひらのねおろしさそひきて雪の花つむ志賀の浦舟　枝直

雪朝眺望

わしかきはひとよのほとに埋もれてと山の雪そしめのうちなる　千蔭

ふりつもる朝けをみれは浪の上に雪をわたせる天のはし立　宣長

雪中遠望

すみた河くたす筏をよすかにてみゆきなかるゝ朝ほらけ哉　千蔭

わしからや八重山かけて白妙につゝきのはらの雪のあけほの　仝

雪朝遠望

降つもる松の木間にうつもれて朝日もさむき雪のやまのは　宣長

眞柴たく烟のみこそうつもれね河よりをちの雪の明ほの　千蔭

雪朝遠樹　枝直
朝日かけ先さすかたの片枝より色あらはるゝ松のしらゆき
ふりつもるおなしよそめも松杉となほしら雪のあさあけの山　宣長

雪朝遠村　枝直
山もとのよのまの雪の下折やけさのけふりのつま木なるらん

今朝みれは麓のさとはわかねともけふりそ雪の上にたなひく　眞淵

雪中遠情　宣長
みやこたに木ゝにさけは花ならぬ雪もよしのゝやまそゆかしき

橋立やきしわたりこしおもかけもこゝろにかゝるけふの雪哉　千蔭

雪中戀人　仝
待わひて袖うちはらふおもかけもゆきみまほしき妹かつかな

雪中待友　たみ子
はらはねと人まちかほにおきかへる杉の雪たにきてもみよかし

依雪待人　仝
わすれとも故郷人のとひこかしをのゝあたりの雪のこのころ

雪朝待友　蘆庵
けさはまたふみわけつへき山さとの雪も友まつはとにとゝなん

雪中待人　たみ子
ふるまゝにつもるとみすや契置て雪に友まつ人のおもひも

雪中訪人　春滿
ふりはへて誰かはとはん雪もよにかさやとりする人やわたまし

雪中行人　春海
ふりはへて雪おもしろきやとゝへは友松枝のかけそたかはぬ

雪中客來　千蔭
すみた川堤の雪のあけはのにそてうちはらひゆくひとやたれ

跡つけしとなとかめそしかすかにまつにかゝれるゆきの夕暮　仝

雪中會友　宣長
まとゐして庭のこすゑもとの葉も花をあらそふけふのしら雪

ふりはへてとはんとおもふともかきにあふもうれしき雪の中道　千蔭

雪中待春　宣長
まつ人の跡こそたえめ春のこん道をはのこせ庭のしらゆき

老人憐雪　千蔭
花とのみ梢の雪をみても猶またるゝものは春にそ有ける

寄雪傷老　蘆庵
黑髪のふりてかはらん色そともしらてめてこしとし〳〵のゆき

雪上淺深　蒼生子
世にふれは又もうき身につむとしを老木の松の雪にこそしれ

雪中獸　蘆庵
ふきためし垣ねをみれはしらゆきの深さあさゝは風のまに〳〵

雪中鳥　千蔭
おはひえや雪にうもるゝうつは木に子を思ふ猿の聲のあはれさ

鳥翅拂雪　枝直
ゆふくれのあはれをそへて降雪になれも友よふやま鳩の聲

雪中燈　蘆庵
花とみし冬の林のゆきちらはとりのはふきやはるのやまかせ

雪中鐘　千蔭
ふる雪にのきのくれ竹うつもれてかけしつかなるまとの燈火

雪夕聞鐘　枝直
今は又雪の花こそちりにけれあはれさひしき入相のかね

寄雪延思　千蔭
くれかての雪のひかりにあらそふやをのへの鐘の入相の聲

雪中述懷　たみ子
三つの友とみし月花のおもかけもみゆきひとつに今はしのひて

花さかん春にあふよやまちてみんとしふる雪のうつもれし身も　春海

寄雪祝　消るゝよはあらしとそおもふ松竹にちとせをかけてふれる白雪　仝

寄雪神祇　しら雪のふるさにかへれ神垣もみちある御代は跡をたつねて　宣長

野行幸　みゆきせし道も昔にかへすよは今いくたひのみかりの丶はら　春満

鷹狩　雪降はあけもみとりもおしなへてむらこにみゆるみの丶かり人　千蔭

やちくさの花の秋よりみかりのにするはかり衣の袖のいろ〳〵　宣長

のる駒のあかきそはやみかは雪のみたれていつるみかりの丶原　春海

はなちやる手なれの鷹にさき立て心そらなるますらをのとも　千蔭

大鷹狩　あすもこん片の丶ましはしをりせよあかす暮ぬるけふのみ狩は　蘆庵

みかりの乙朝風さむし雪つもるとは山すりの袖こはるまて　春海

朝鷹狩　みかり野やふ丶きにくもる夕暮もをふさの鈴のおとそさやけき　千蔭

かり人の朝たつそてのしのふすりみたる丶雪にきはひてそゆく　春海

夕鷹狩　衣手にきのふはすりしこはき原朝たちならしとかりするかな　千蔭

晩頭鷹狩　するくれて明日のとたちも殘るのに狩場なからの仮寐をやせん　宣長

鷹狩欲暮　かりくらし今はとかへる道のへのとたちにたかを又あはせつる　蘆庵

あかす今ふたよりみより狩ゆかはとたちもみえすのへは暮なん　仝

鷹狩日暮　くれぬとてましはをりしきくむ酒にやとるも寒きみかりの丶月　仝

連日鷹狩　かり衣冬たちしよりうたの丶のしくれに雪にぬれぬ日もなし　千蔭

あすもこんきのふもけふもかり衣ならしの岡のあかぬ鳥立に　春満

日々鷹狩　をとつひもきのふものへに狩くれぬあすは山路の鳥立たつねん　蘆庵

雪中鷹狩　ふる雪にきのふもけふもかりくらし黒ふの鷹も色はえてみゆ　自寛

狩場風　うたの野やとたちもわかすはたれふるわしたの雪にきそふ狩人　千蔭

狩場霰　御狩野の風をはけしみますらをか空とる鷹やあとせわふらん　春海

野鷹狩　み狩野にさ丶うつ霰たはしれとき丶すはとはにかくろひてのみ　契冲

炭竈　御狩人今やいるの丶しもかれにみたれてみゆるそてのいろ〳〵　蘆庵

天河星のぬるよそすくなきをかた野に鷹のあはぬ日はなし　長流

冬の日のかけほとなしといかはかりすみやかるらんをの丶山里　蘆庵

山里はなほしくるらんとはかりに烟たなひくをの丶すみかま　土満

炭竈烟　山かつのおのかふせやも炭かまにみえきかひたるゆふけふり哉　契冲

冬こもるほとやいつまてすみかまのけふりくゆらす小野の山人　春海

あさちふのをの丶炭竈しのふれとあまるけふりや空に立らん　長流

炭竈烟織　をの山に炭やくしつのをた卷の糸にけふりもよられてそゆく　仝
炭竈雲　ゆふけふりたちこそまされ白雲はおりしつまれる峰のすみかま　枝直
炭竈雪　すみかまや雪のしたをれ中〻にけふりとなりてあらはれにけり　千蔭
雪中炭竈　炭かまのけふりをかけて雪のうちにひとすちまよふ小野の細道　長流
深山炭竈　み山木はおち葉してたにあせにしを又きりやつすをの〻炭やき　仝
嶺炭竈　たえまなき烟にしるし山人ややくとやくらんみねのすみかま　蘆庵
里炭竈　大原や朝け夕けの外に又たえぬけふりやさとのすみかま　宣長
遠炭竈　夕こりの雲よりうへに立のぼるけふりもはそきをちの炭かま　千蔭
遠近炭竈　みねこしのよそめは雪にうつもれて烟しみかき遠の炭かま　宣長
　　あしひきのかなたこなたに立けふり炭やく里の數そみえける　千蔭
埋火　いか斗炭やくとてか遠近のみねにこりつむ眞柴ならしは　春海
　　よそにのみわはれとみつる炭かまのけふりになる〻閨の埋火　枝直
閨埋火　しはしとてむかひしけさの埋火のあたりなかちに日を暮しつる　蘆庵
　　とはかりもたち離るれたへやらてやかてよりそふ埋火のもと　筑波子
　　吹風にゆくへさためぬすみかまのけふりのはてや閨の埋火　枝直

爐火　時しわらはまたかきおこせ埋火のはひとなりゆく老の心も　春海
　　埋火のもとみしともをかそふれはきえのこれるそ少かりける　蘆庵
　　よをさむみおきいて〻みれそ埋火のうへさへ霜の色となりぬる　土滿
向爐火　うとからぬ友もかくやはむかふへきあたりをさらすなる〻埋火　蘆庵
夜爐火　霜はらふをしの羽おとや埋火に冬しらぬよをおとろかすらん　枝直
寒夜爐火　埋火の炭さへもよのふけぬれはおきなか髪の色にこそなれ　蘆庵
　　さしそへし炭もいくたひ霜の色にさゆるよしるき閨の埋火　仝
爐邊閑談　はひかちの色をも霜とみつる哉ふくるよさむき閨のうつみ火　春海
　　もろともにむかふ火とりのいり炭のおもひいりてや昔かたらむ　仝
　　わかれをも先ともにをと下もゆる埋火のもとにかたりあひつ〻　千蔭
爐火似春　かきくつし心のくまもうつみ火ものこりなきまてかたる冬のよ　宣長
　　つけやらぬ谷のふるすのうくひすも初音きなかん埋火のもと　枝直
山家爐火　をの山やまたきかすめる炭竈のなこりのとけき閨の埋火　千蔭
　　折くへし柴のおきひをうつみ置てよはの寒さをしのく山かつ　契冲
　　かきおこしはたきりくへよ埋火のあたりもさむき冬の山里　蘆庵

爐邊述懷　埋火のうつもれし身よいかにしてむかしを今にかきおこさまし　春海

爐邊懷舊　なにとなく灰かきならし埋火のもとしのふこそうちもねられぬ　蒿蹊

冬至　はるのけの土にきさすといふ日よりさらにはけしき木枯の風　蘆庵

冬のよのなかきを春の日にそへてのとかなるへき時はきにけり　古道

さきそむる梅の色香にしられけりはるにさきたつはるの心は　春海

あしかひの神代おほえて天地のはるをもよほすけふにも有哉　千蔭

豐明節會　をとめ子か衣にかくるあかひものあかぬは舞の姿なりけり　春海

五節　み心をよしの丶宮のためしとやそてかへすらんけふのまひひめ　仝

臨時祭適立　宮人はとよのあかりの名殘とてかたぬくはかりゑひしれにけり　仝

霜さやくみはしの竹のませのもとよにおもしろき神あそひかな　千蔭

賀茂臨時祭　きのふかもあふひかさし丶宮人の山河ゐの袖に露そおきける　仝

夕されはみはしの雪に跡つけてかへりたちする雲のうへひと　春海

荷前使　うた人のもとめにうたふ聲もよしかへり立するくれたけのもと　千蔭

貢調　みてくらを君か御門にはこふなり今そのさきの使たつらし　春海

みつきものにひくはまゆの白たへにみくらの山は雪そつもれる　長流

新嘗會　たふとさやすへらみとは神なから神をまつらすけふのにひなへ　眞淵

神樂　とのもりの白くたくなる大御火のよにおもしろき神あそひかも　仝

今もそのとこよの鳥のしたりをのなかくそともにうたい明せる　契冲

もふたすきかたにとりかけとる杖もあなたふとしや神のみや人　春海

日の影もまた夜の暮のいはと山あかはしうたふ聲いそかなん　長流

雪中神樂　まさきつらたすきにかけし神よ丶りとよの遊ひは絶せさりけり　千蔭

禁中神樂　ふる雪にめくらす袖も物のねもあひにあひたる面白のよや　枝直

曉天神樂　宮人のとよのあそひは更にけりとるや手草に霜のおくまて　千蔭

夜神樂　天のとをあけかたちかきよかくらに長鳴鳥も聲あはせつ丶　仝

さよふかみとるやさかきの本末に霜おきまよふ袖のさむけさ　宣長

佛名　からかみの神のみまへによもすから大和のをのおともすみけり　春海

なかきよの竹の燈火しらむまて佛の御名をとなへあかしつ丶　千蔭

雪中佛名　ためしとてかつくるわたにとり添て醉をすゝむるかへなしの酒　春海

木ゝもみなわたかつけ丶りみほとけの名をとなふなる庭の白雪　千蔭

となへつ丶みよのほとけにたてまつる花もをりえつよはの白雪　長流

佛名夜闌　西になる月にきこえてみほとけのみなの聲こそなかくすみぬれ　蘆庵
佛名到曉　罪とかも佛の御名ものこさしとわかつきかけて花たてまつる　春海
佛名朝　白雪のふりすてゝけふわかるとも山たちいてはまたもとへ君　仝
早梅　北山のむろのとはそをわけたてゝ霞やいとゝよそにへたてん　千蔭
　　かはかたは春たに花のまたるゝをとしのうちにもにほふ梅かな　眞淵
　　うくひすのなみたもこほる雪のうちに先とけそむる梅のした紐　枝直
冬梅　梅の花冬さく色もかはらねはのちこん春のかひやなからん　土滿
　　鶯のなかぬへたてそなはうとき梅さくやとは春のとなりを　長流
霜中梅花　一とせにふたゝひさきぬかれはてし菊より後にさらにこの花　契冲
雪中早梅　はるかけて日數つむへきさかりをも雪のうちよりみするうめ哉　千蔭
梅雪　春をまつうくひすの音にさきたちて雪のふる木の梅咲にけり　枝直
梅花先春　紅のしたてるはかり咲梅のにほふかうへにつもるしらゆき　仝
年内梅　こん春の道のしをりとさきたちて野にもさとにもにほふ梅かゝ　仝
年内早梅　年の内にはふ梅をは咲花のもてとやいはん初めとやいもん　宣長
　　木ゝはまためも春をまつ雪のうちにひとりかをれる庭の梅かえ　春滿

年中早梅　世の外のやとにも梅の花のみそよそのいそきにさそはれにける　千蔭
里早梅　くれて行とし心やいそくらん春もまたきにうめにはふなり　蘆庵
梅告春近　山のはのはるのかすみにさきたちてにはふ籬のさとの梅かゝ　宣長
寒月照梅花　春ちかくなるをもしらぬ山すみをおとろかしつるうめのはつ花　蘆庵
歳暮　白妙の夕霜こほる古枝よりさきいつるうめをてらす月かな　千蔭
　　くれてゆく年のはやせのみなかみはしろきすちこそ落まさり鳧　眞淵
　　おいの涙又せきあへて越ぬへしとしもつひにすゑのまつ山　春滿
　　風をいたみよせてはかへる白涙のいとなく過る月日なりけり　古道
　　はるをまちとしをゝしむも一とせの心すさひのとちめなりけり　千蔭
歳暮近　けふのみとくれぬるよはの大空にいつこをはかと年のゆくらん　土滿
歳欲暮　とし月もいつしか春にゆつる葉を折もてはこふをちのさと人　千蔭
惜歳暮　ほともなくはるにやこえん年波の立もかへらぬすゑのまつ山　蘆庵
　　時のまもをしき日影のうつりきてけふは年さへくれんとすらん　宣長
　　くれゆくを年といふなもけふこそは惜きにつけて思ひしりぬれ　仝
年〻惜歳暮　行年はこそも今年もかゝらぬを暮るゝをしさそいやまさりぬる　土滿